

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 3

閑戸廃寺

1997年3月

笠岡市教育委員会

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 3 関戸廃寺

正誤表

	誤	正
9 P 第4図		縮尺(1/1,000)
32 P 38行	礎石抜け跡10	礎石抜け跡9
40 P 23行	硬質な	硬質な土
44 P 6行	北端部	北東端部
86 P 第2表	番号 4→7, 5→4, 6→5, 7→6	
93 P 4行	出土し	出土した
93 P 23行	粘度で	粘土で
98 P 17行	金堂東北角の基壇化粧の瓦	33トレンチの基壇側面押さえ土 の上に並ぶ平瓦
104 P 14行	軒平瓦の	瓦当文をもった軒平瓦の
図版32	6	7

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 3

閑戸廃寺

1997年3月

笠岡市教育委員会

1. 鬼瓦 I 類▶

出土状況

(北から)



2. 鬼瓦 II 類▶

出土状況

(北から)



▲3. 鬼瓦 I 類・鬼瓦 II 類



序 文

笠岡市は、気候風土に恵まれた自然豊かな都市であります。本市には、これらに育まれた、いにしえを知る手掛かりとなる多くの遺跡が点在しております。

高速自動車道路網の整備に伴い、本市にも都市開発の波が押し寄せて来ており、閑静なたたずまいの中にあった関戸廃寺周辺も急速な宅地化がすんでまいりました。

このため、今後の史跡保護のため、平成6年度から3ヶ年計画で国庫補助をうけて関戸廃寺の寺域の確認調査を実施することとなりました。調査地は、水田として耕作を行っているため、秋の収穫後に調査に着手し、春先には埋め戻し耕作が出来るようするという事情もあり、十分な調査場所も確保しきれない面もありましたが、ともかく所期の目的をほぼ達成することができました。

報告書は、必ずしも意を尽くしたものとは言えませんが、今後の埋蔵文化財の保護・保存に役立ち、歴史研究や郷土の理解の一助となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりましては、専門委員の諸先生方や文化庁記念物課をはじめ、岡山県教育庁文化課、岡山県古代吉備文化財センター並びに笠岡市文化財保護委員、また多くの研究者の方々から数々のご支援とご助言を賜りました。さらには、地権者をはじめとする地元自治会の方々からも、温かいご協力をいただくとともに、地元有志を初めとする作業員の方々には、真冬の極寒の中、誠心誠意の発掘調査に従事してくださいました。あわせて厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

笠岡市教育委員会
教育長 仁科一夫

例　　言

1. 本報告書は、笠岡市教育委員会が国庫補助を受けて平成6年度から8年度にかけて実施した「^{関戸}廃寺跡発掘調査」の概要報告書である。
2. 関戸廃寺跡は、岡山県笠岡市関戸字唐臼・前田・下前田に所在する。
3. 発掘調査は、笠岡市教育委員会文化課職員安東康宏・岩崎仁司が担当して、平成6年度、7年度、8年度の3次にわたって行った。
4. 発掘調査および報告書の作成にあたっては文化庁記念物課坂井秀弥調査官、西田健彦調査官の指導を得たほか、関戸廃寺跡発掘調査対策委員会を設け、以下の方々に委員を嘱託した。委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

亀田修一（岡山理科大学助教授）

葛原克人（岡山県教育庁文化課参事）

高橋 譲（ノートルダム清心女子大学教授）

高畠知功（岡山県古代吉備文化財センター調査第1課長）

中野 勇（笠岡市文化財保護委員会委員長）

間壁忠彦（倉敷考古館長）

間壁茂子（倉敷考古館学芸員・神戸女子大学教授）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）（敬称略あいうえお順）

5. 本報告書の作成は、安東・岩崎が笠岡市教育委員会文化課分室において行った。文責は日次に記す。遺物の整理・復元・実測および写真撮影については三原富美子・田玄訓子の協力を得た。

また、付載2については調査担当者である岡本寛久氏（岡山県古代吉備文化財センター課長補佐）に執筆を依頼し、原稿を収載させていただいた。

6. 本書で使用した方位は、特に示さない限り磁北である。遺跡付近の磁北は西偏6°40'を測る。

7. 本書の第2図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を、第83図は同じく1/50,000地形図を複製・縮小・加筆したものである。

8. 本報告書掲載の遺構・遺物実測図の縮尺率は可能な限り下記のとおり統一し、例外については縮尺率を明記した。

遺構 1/80

遺物 瓦1/4 土器1/4 土製品1/4 金属製品1/3

9. 出土遺物および図面・写真等は、笠岡市教育委員会文化課分室（笠岡市金浦50-3）に保管し、一部を笠岡市立郷土館（笠岡市笠岡5628-20）において展示している。

目 次

序	i
例 言	ii
目 次	iii
第1章 地理的・歴史的環境	(安東) ... 1
第2章 発掘調査の経緯と経過	(岩崎) ... 5
第1節 関戸廃寺調査のあゆみ	5
第2節 発掘調査の経過	5
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 調査区の概要	(安東) ... 7
第2節 遺構	(安東) ... 13
1. 金堂	13
2. 塔	20
3. 東方建物	25
4. 回廊	36
5. 門	39
6. 築地と寺域の四至	40
7. 掘立柱建物と溝	49
第3節 遺物	51
1. 土製品	51
①瓦	(安東) ... 51
②土器	(安東) ... 87
③瓦塔	(岩崎) ... 93
2. 金属製品	97
①青銅製品	(岩崎) ... 97
②鉄製品	(安東) ... 99
3. その他	(安東) ... 102
第4章 考察	(安東) ... 103
第1節 発掘調査の成果	103
第2節 瓦当文について	107
第3節 建立氏族について	109
付載1 関連資料紹介	(安東) ... 115
付載2 昭和54(1979)年の調査報告	(岡本) ... 120
付載3 平成4(1992)年の調査報告	(岩崎) ... 124

図 表 目 次

第1図	笠岡市の位置	1
第2図	周辺遺跡分布図	3
第3図	伽藍配置想定図	8
第4図	レンチ配置図	9
第5図	主要部分レンチ配置図	11
第6図	33レンチ平面・断面図	14
第7図	金堂平面図	15
第8図	32レンチ平面・断面図	17
第9図	9レンチ平面図	18
第10図	26レンチ平面・断面図	19
第11図	9レンチ東壁・36レンチ北壁 断面図	20
第12図	塔平面図	21
第13図	35レンチ平面・断面・立面図	22
第14図	34レンチ平面・断面図	24
第15図	21・22レンチ平面・断面図	25
第16図	東方建物周辺断面図その1	26
第17図	東方建物平面図	27
第18図	6・7レンチ平面図	29
第19図	東方建物周辺断面図その2	31
第20図	38レンチ窓跡平面・断面図	35
第21図	5レンチ平面・断面図	36
第22図	8レンチ平面・断面図	37
第23図	39レンチ平面・断面図	37
第24図	10レンチ平面・断面図	38
第25図	40レンチ平面・断面図	39
第26図	37レンチ平面・断面図	39
第27図	24レンチ平面・断面図	41
第28図	4レンチ平面・断面図	42
第29図	16・17レンチ平面・断面図	42
第30図	13レンチ平面・断面図	43
第31図	14レンチ平面・断面図	43
第32図	11レンチ平面・断面図	46
第33図	12レンチ平面・断面図	46
第34図	2レンチ平面・断面図	47
第35図	30レンチ平面・断面図	47
第36図	31レンチ平面・断面図	47
第37図	29レンチ平面・断面図	47
第38図	20レンチ平面・断面図	48
第39図	19レンチ平面・断面図	48
第40図	18レンチ平面・断面図	48
第41図	15レンチ平面・断面図	50
第42図	28レンチ平面・断面図	50
第43図	27レンチ平面・断面図	50
第44図	軒丸瓦実測図1	52
第45図	軒丸瓦実測図2	53
第46図	軒丸瓦実測図3	56
第47図	軒丸瓦実測図4	57
第48図	瓦冠と范傷の特徴	57
第49図	軒平瓦実測図1	59
第50図	軒平瓦実測図2	60
第51図	軒平瓦実測図3	61
第52図	軒平瓦実測図4	62
第53図	軒平瓦実測図5	63
第54図	軒平瓦実測図6	64
第55図	丸瓦実測図1	66
第56図	丸瓦実測図2	67
第57図	丸瓦実測図3	68
第58図	平瓦実測図1	70
第59図	平瓦実測図2	71
第60図	平瓦実測図3	72
第61図	平瓦実測図4	74
第62図	平瓦実測図5	75
第63図	平瓦実測図6	76
第64図	平瓦実測図7	77
第65図	平瓦の叩き目	78
第66図	鬼瓦I類実測図	81
第67図	鬼瓦II類・鷲尾・面戸瓦実測図	82
第68図	道具瓦実測図	83
第69図	隅切瓦実測図	85

第1表	軒丸瓦観察表	86
第2表	軒平瓦観察表	86
第70図	金堂・塔周辺出土土器実測図1	87
第71図	金堂・塔周辺出土土器実測図2	88
第72図	東方建物周辺出土土器実測図	88
第73図	38トレンチ窯跡出土土器実測図	89
第74図	27トレンチ溝出土土器実測図	90
第75図	その他の土器実測図	90
第3表	土器観察表	91
第76図	瓦塔実測図	95
第77図	風招実測図	97
第78図	不明青銅製品実測図	98
第79図	鉄釘実測図	100
第80図	鎌状鉄製品・不明鉄製品実測図	101
第4表	鉄釘観察表	101
第5表	炉壁・鉄滓出土量一覧表	102
第81図	墨書碟実測図	102
第82図	金堂・塔周辺出土軒丸瓦割合の変遷	105
第6表	軒丸・軒平瓦等一覧表	106
第83図	関連遺跡等分布図	111

付 載 図 表 目 次

第84図	礎石実測図	115
第85図	鷦尾実測図1	116
第86図	鷦尾実測図2・その他	117
第87図	相輪実測図	118
第88図	関戸廃寺周辺の状況	119
第89図	調査地区位置図	120
第90図	調査地区全体図	120
第91図	調査区側溝土層断面図	121
第92図	第1トレンチ・第2トレンチ (溝1) 平面・断面図	122
第93図	第3トレンチ平面図	122
第94図	調査地区出土軒瓦	123
第95図	溝1出土土師器	123
第96図	1992年調査区平面・断面図	124

図版目次

- カラー図版1 鬼瓦
- 1 鬼瓦I類出土状況（北から）
- 2 鬼瓦II類出土状況（北から）
- 3 鬼瓦I類・鬼瓦II類
- カラー図版2
- 1 38トレンチ窓跡
- 2 瓦塔
- 3 風招・墨書き
- 図版1 関戸廃寺の遠景
- 1 寺域北半（西から）
- 2 寺域南半（西から）
- 3 調査前の塔跡（東から）
- 図版2 金堂
- 1 基壇と南辺の瓦溜り（南西から）
32・33トレンチ
- 2 南辺の瓦溜り（南から）
32トレンチ
- 3 基壇南辺（南から） 32トレンチ
- 図版3 金堂
- 1 東辺の瓦溜り（東から）
33トレンチ
- 2 基壇東辺（北から） 33トレンチ
- 3 東辺の基壇化粧（南東から）
33トレンチ
- 図版4 金堂
- 1 北東端部の瓦溜り①上面（北から）
26トレンチ
- 2 北東端部の瓦溜り②鬼瓦I類出土
状況（北から） 26トレンチ
- 3 北東端部の瓦溜り③軒丸・軒平瓦
出土状況（南から） 26トレンチ
- 図版5 金堂
- 1 基壇北東端部（北から）
26トレンチ
- 2 北東端部の基壇化粧（北東から）
- 26トレンチ
- 3 基壇東辺断面 26トレンチ南壁
- 図版6 金堂
- 1 基壇北辺（東から） 9トレンチ
- 2 基壇南西端部（南から）
36トレンチ
- 3 基壇西端部断面 36トレンチ北壁
- 図版7 塔
- 1 基壇北辺（北から） 35トレンチ
- 2 北辺の瓦溜り（北から）
35トレンチ
- 3 北辺の階段状遺構（北西から）
35トレンチ
- 図版8 塔
- 1 基壇東辺（南東から）
34トレンチ
- 2 東辺の瓦溜り（東から）
34トレンチ
- 3 塔心礎（西から） 35トレンチ
- 図版9 塔
- 1 塔心礎西側の版築（南から）
35トレンチ
- 2 版築と立板状痕跡
35トレンチ東壁
- 3 塔北側の搅乱上層（北から）
32トレンチ南壁
- 図版10 塔周辺
- 1 瓦塔出土状況 35トレンチ
- 2 瓦塔出土状況 32トレンチ
- 3 塔東側の溝と柱穴（北から）
21トレンチ
- 図版11 東方建物
- 1 第3期建物基壇と南辺の基壇化粧
(南西から) 6・7トレンチ
- 2 第3期建物基壇北東部分

- (西から) 23トレンチ
- 3 第3期建物落とし込まれた礎石
(北から) 6・7トレンチ
- 図版12 東方建物
- 1 第3期礎石抜け跡2 (東から)
 - 2 第3期礎石抜け跡3 (南から)
 - 3 第3期礎石抜け跡4 (北から)
 - 4 第3期礎石抜け跡5 (北から)
 - 5 第3期礎石抜け跡6 (南から)
 - 6 第3期礎石抜け跡7 (西から)
 - 7 第3期礎石抜け跡8 (西から)
 - 8 第3期礎石抜け跡9 (南から)
- 図版13 東方建物
- 1 第3期建物基壇化粧 (南から)
6・7トレンチ
 - 2 第3期建物基壇化粧の外側断面
(西から) 6・7トレンチ
 - 3 東方建物の版築
6・7トレンチ北壁
- 図版14 東方建物
- 1 基壇南側の掘形 (西から)
6・7トレンチ
 - 2 基壇南側の掘形1 (南から)
6・7トレンチ
 - 3 基壇南側の掘形2 (南から)
6・7トレンチ
 - 4 第2期建物の小形礎石 (西から)
6・7トレンチ
- 図版15 東方建物周辺
- 1 東方建物南側の溝と柱穴 (南から)
38トレンチ
 - 2 第4期整地上と溝 (南東から)
38トレンチ
 - 3 同溝断面 38トレンチ東壁
- 図版16 東方建物周辺
- 1 土師質土器窯跡の焼成室 (南東から)
38トレンチ
 - 2 焼土遺構 (東から) 38トレンチ
- 3 東方建物西側の溝 (南西から)
5トレンチ
- 図版17 回廊
- 1 8トレンチ (南から)
 - 2 39トレンチ (北東から)
 - 3 10トレンチ溝 (西から)
- 図版18 回廊等
- 1 40トレンチ (東から)
 - 2 37トレンチ柱穴 (南から)
 - 3 9トレンチ地山の盛上がり (西から)
- 図版19 築地と寺域の西側
- 1 4トレンチ (西から)
 - 2 16トレンチ (南から)
 - 3 24トレンチ 築地基底部 (北から)
 - 4 25トレンチ (東から)
- 図版20 寺域の北西端部
- 1 13トレンチ 瓦溜り (北から)
 - 2 同 築地内側の溝 (南から)
 - 3 14トレンチ 溝 (東から)
 - 4 同 柱穴群 (南から)
- 図版21 寺域の北側と北東端部
- 1 11トレンチ 寺域北端部の溝
(南西から)
 - 2 12トレンチ (南西から)
 - 3 2トレンチ (南から)
- 図版22 寺域の東側
- 1 30トレンチ (西から)
 - 2 31トレンチ (東から)
 - 3 29トレンチ (北東から)
- 図版23 寺域の東側
- 1 20トレンチ 段状遺構 (南西から)
 - 2 19トレンチ (南西から)
 - 3 18トレンチ (南西から)
- 図版24 寺域の南側
- 1 1トレンチ (北東から)
 - 2 15トレンチ (南から)
 - 3 17トレンチ (南から)
- 図版25 掘立柱建物と溝

- 1	11トレンチ	掘立柱建物（南から）	図版38	平瓦
- 2	10トレンチ	柱穴（北から）	図版39	平瓦
- 3	28トレンチ	柱穴（南から）	図版40	平瓦
- 4	27トレンチ	溝（南から）	図版41	鬼瓦・鷲尾
図版26	軒丸瓦		図版42	道具瓦
図版27	軒丸瓦		図版43	土器
図版28	軒丸瓦		図版44	土器
図版29	軒平瓦		図版45	瓦塔
図版30	隅軒平瓦		図版46	瓦塔
図版31	隅軒平瓦		図版47	瓦塔・青銅製品・墨書き・その他
図版32	軒平瓦		図版48	鉄製品
図版33	軒平瓦		図版49	付載 1 関連資料 1
図版34	丸瓦		図版50	付載 1 関連資料 2
図版35	丸瓦		図版51	付載 2 1979年調査
図版36	平瓦		図版52	付載 2 1979年調査
図版37	平瓦		図版53	付載 3 1992年調査

第1章 地理的・歴史的環境

関戸廃寺は、岡山県笠岡市関戸字唐臼・前田・下前田に所在する。

笠岡市は岡山県の南西端に位置しており、現在人口約61000人、面積約136km²で、東を浅口郡鴨方町・里庄町・寄島町、北を井原市・小田郡矢掛町、西を広島県深安郡神辺町・福山市と接している。また、高島・白石島・北木島・真鍋島・大飛島・小飛島・六島をはじめとする大小の島々からなる笠岡諸島を含み、南は海上で香川県丸亀市・多度津町・詫間町に接している。

この地域には大河川がなく、広大な平野の発達は見られないものの、笠岡市南部では、南流して瀬戸内海にそそぐ吉田川・隅田川・今立川等の小河川の堆積作用によって扇状地や三角州が形成され、さらに人工的土地造成により平地が増加している。いっぽう北部では、吉田の低い分水界を境に尾坂川が北流し、矢掛町内で高梁川の支流である小田川に注ぐ。その尾坂川流域の新山から甲駒にかけての地区にはやまとまった平地が広がり、小田川流域の小平野に続いている。山地は丘陵性で、地質は大部分が花崗岩からなる。平地には恵まれないが、北木島のほかには200mを越える山地はない。

笠岡市域における旧石器時代の遺跡は、現在笠岡湾干拓で陸地化している片島や、高島周辺、六島など島嶼部の数箇所において見られる。片島では、岡山県教育委員会により詳細な分布調査が行われ、サヌカイト製ナイフ形石器などが確認されている。

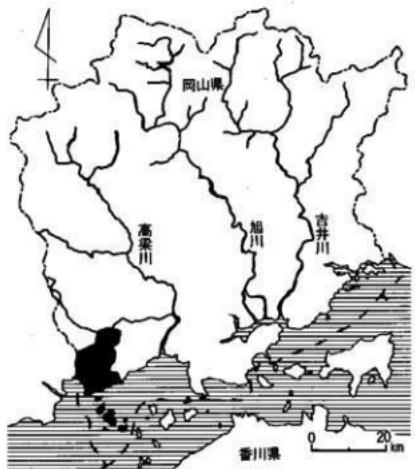
縄文時代に入ると、現在の市域の東と西に海が深く入りこみ、その沿岸において多数の遺跡が形成された。東では西大島から神島にかけての一帯に備中原貝塚や津雲貝塚などが、西では有田の有田貝塚・東大戸⁽¹⁾の助室貝塚などがある。これらの遺跡は縄文後期を主体とするものが多く、特に津雲貝塚では大正期の発掘調査によって約170体もの縄文後・晩期人骨が出土し、人類学・考古学研究の上で大きな成果をもたらしている。一方島嶼部でも、古くから人々が生活していたらしく、高島・北木島・真鍋島などで早期の押型文土器が採集されているのをはじめ、白石島でも前期以降の遺物が発見

されている。⁽²⁾高島の黒土遺跡は特に著名であり、前期から晩期に至るまでの各型式の土器が出土しているが、特に晩期の土器は黒土BⅠ式・BⅡ式として知られている。

弥生時代の遺跡で特筆すべきものは見られないが、海浜部に遺跡が集中した縄文時代とは逆に、小田川に近い市内北部に遺跡が多くみられる。また、阿部山等の丘陵上にも弥生土器の散布地がある。また、注目すべき遺物として、当時は海底であった笠岡湾干拓地内から中継型銅戈が発見されている。

古墳時代になると市内各所で古墳が築造され、遺跡数・種類ともに急激に増加する。

5世紀の古墳で著名なのは長福寺裏山古墳群である。小田川を北に望む丘陵が北東から南西に伸びており、その尾根線上に、北東か



第1図 笠岡市の位置

ら東塚（前方後円墳）・仙人塚（造出付の円墳）・一つ塚（円墳）・双つ塚（前方後円墳）・七つ塚（円墳数基）が所在している。これらは5世紀中頃から後半にかけて相次いで築造されているが、なかでも双つ塚は全長62mを測り、備中西部で最大の古墳である。しかし、笠岡地域の首長系譜が著しく台頭するのはこの古墳群が築造された時期だけであり、前後の時期にはこれに匹敵するほどの古墳はみられない。

6世紀になると横穴式石室をもつ古墳が市内各所において築造される。長福寺裏山古墳群のある丘陵麓の斜面には、山内最大規模の横穴式石室をもつ小池古墳（石室全長11.8m）をはじめ、竹之内古墳など、多数の後期古墳が築造される。さらに、後期古墳は島嶼部にも存在する。片島・差出島などの小島をはじめ、高島・白石島・北木島にそれぞれ数基ずつあり、真鍋島にもかつては存在していたと言われる。古墳時代の遺跡で他に注目すべきものとして、製塙と製鉄に関する遺跡がある。製塙上器の散布地は高島・白石島をはじめとして市内海浜部の各所に見られ、高島の土泊遺跡などが調査されている。一方製鉄遺跡は内陸部の丘陵地帯に多く、古墳時代から古代にかけて、ひとつの集中地帯を形成している。製鉄遺跡で年代の判明しているものは少ないが、鍛冶屋遺跡は6世紀後半以降、鉄塊遺跡は7世紀代と考えられている。

古代における笠岡市域は小田郡と浅口郡に属していた。平安時代に作られた「和名類聚抄」の中から笠岡市域に関係していると考えられる郷をあげると、小田郡甲努郷・魚渚郷・出部郷、浅口郡小坂郷・大島郷などがある。これらの郷名は現在の地名に少なからず反映されている。古代の山陽道は、小田川に沿って笠岡市域北端をかすめるように東西に通っていたと考えられる。

白鳳時代になると、尾坂川上流の閻戸において閻戸廃寺の造営が開始される。小田郡内に所在する白鳳・奈良時代の寺院は、当寺のほかに奈良時代の瓦が採集されている矢掛町東三成廃寺（瓦谷廃寺）が知られているのみである。平安時代になると、閻戸廃寺の北東の山上に尾坂西谷廃寺が営まれた。その他にも、山内数か所において山上伽藍跡が認められるが、いずれも詳細は不明である。官衙に関する遺跡としては、前述した鍛冶屋遺跡で奈良～平安時代の倉庫群が検出され、郷倉であった可能性が指摘されている。また、有田字太折には、平安期の須恵器窯跡と考えられる太折窯跡が所在する。その他にも平安期の遺跡として、経塚などが確認されている。さらに、島嶼部では人飛島遺跡が知られている。瀬戸内海の中央付近に位置する向島では、海に突き出た砂州が独白の景観をなしており、砂州の付け根にある巨岩周辺において、海に関する祭祀が行われた遺跡として著名である。

中世に入ると、島嶼部では真鍋氏・陸地部では陶山氏の台頭が見られる。特に陶山氏は、鎌倉時代末から室町時代にかけて足利氏の周辺で活躍していた武士である。陶山氏の領有していた陶山莊は、笠岡市街地の付近はもとより南は神島、北は篠坂まで市内陸地部の大部分に及んでいた。現在の笠岡市笠岡に本拠を構えた陶山氏は、遍照寺を中心に据えて町づくりを行い、市街地発展の基礎を築いた。発掘調査された中世の遺跡には、山陽自動車道の建設に伴って発掘調査が実施された本谷遺跡・園井土井遺跡・鍛冶屋遺跡などがある。本谷遺跡では集落跡と墳墓、園井土井遺跡では塚や棚によつて区画された筋跡、鍛冶屋遺跡では製鐵関連遺物を出土する集落などが検出されている。また、市内各所には山城が数多く築城されているが、その城主は室町時代の真鍋氏・陶山氏から戦国時代の小田氏・村上氏等と様々である。笠岡城は、旧市街地の南西方向にあり海中に突き出た半島状の丘陵上に位置する海城である。戦国期に村上氏が使用したもので、近世以後の土取りによって大幅に形状が変わってしまい、II状をうかがうことができない点が惜しまれる。



- 1 門戸魔寺 2 浅香古墳 3 延福寺跡 4 半木古墳 5 両塙塚古墳 6 湯田の坪条里推定地 7 弓場山古墳
 8 甲野宮山古墳群 9 和田山古墳群 10 小池古墳 11 証文谷の塚古墳 12 長福寺裏山古墳群 13 上井立池の半古墳
 14 鉄塊遺跡 15 吉田乳母が塚古墳 16 大之平古墳 17 八幡山古墳 18 門戸姫塚 19 尾坂西谷魔寺 20 逍万遺跡 21 葵田古墳
 22 葵田中塙古墳 23 尾坂亀居古墳 24 尾坂製鉄跡 25 吉田大塚 2 号墳 26 吉田大塚 1 号墳 27 助実貝塚 28 純治屋遺跡
 29 両井上井遺跡 30 本谷遺跡 31 小田県庁跡 32 日照照寺

第2図 周辺遺跡分布図 (1/500,000)

近世の笠岡は水野氏の支配を経て天領となった。笠岡の市街地はその後も寺町・港町として賑わいを見せ続け、明治初期には小田県⁽¹⁷⁾も置かれたほどであったが、その町並みは戦後の土地区画整理によって面影を失った。また、同時に大規模な干拓が行われたため、市内の海岸部の景観は大幅に変化している。

註

- (1) a. 「笠岡市史」第1巻 1983年
b. 平井勝『片島分布調査報告書』笠岡市教育委員会 1985年
- (2) 島田貞彦・清野謙次・梅原未治「備中國浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告」「京都帝国大学文学部考古学研究報告」5 1920年
清野謙次「第2部中国及び畿内貝塚群 第1篇備中國浅口郡大島村西大島字津雲貝塚」「日本貝塚の研究」 1969年
- (3) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会 1956年
- (4) 綱本善光「岡山県笠岡市笠岡湾干拓地出土の銅戈について」「古文化談叢」17 1987年
- (5) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁蘋子「長福寺裏山古墳群 附関戸廃寺跡」長福寺裏山古墳群・関戸廃寺址調査推進委員会 1965年
- (6) 笠岡市教育委員会「小池の古墳」「笠岡の文化財」笠岡市教育委員会 1984年
- (7) a. 綱本善光「岡山県笠岡市(伝)竹之内古墳出土の遺物について」「古代吉備」9 1987年
b. 西川宏「小形古墳と横穴式石室の普及」「岡山県史」第2巻 原始・古代I 1991年
- (8) 註(3)文献
- (9) 岡田博・福田正継・松本和男「鍛冶屋遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」70 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (10) 安東康宏「笠岡市における最近の発掘調査」「古代吉備」第18集 1996年
笠岡市内陆工業団地造成中に発見、1992(平成4)年度に市教育委員会が発掘調査を行った。
- (11)「奈良朝平安朝時代」「増訂小田郡誌」上巻 1941年
註(1) a. 文獻
- (12)「古代寺院と山陽道」「矢掛町史」本編 1982年
- (13)「倉敷考古館研究小報」1 倉敷考古館 1964年
- (14) 綱本善光・岩崎仁司「山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡」「笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告」1 建設省岡山国道工事事務所・笠岡市教育委員会 1987年
- (15) 岡田博・福田正継・松本和男「園井上井遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」70 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (16)「日本城郭大系」第13巻広島・岡山 1980年
- (17) a. 「小田県⁽¹⁷⁾跡」「笠岡の文化財」笠岡市教育委員会 1984年
b. 「笠岡市史」第3巻 1996年

第2章 発掘調査の経緯と経過

第1節 関戸廃寺調査のあゆみ

関戸廃寺の近辺から布目瓦が出土することは地元では以前から知られていたが、これに早くから着目したのは、郷土史家である市内尾坂出身の高田馬治氏であった。氏は関戸廃寺付近から古瓦が多数出土することや寺院の礎石と思われる大きな石が見られることから、この場所に古代の寺院跡が眠っていることを世に知らしめた。その結果、1958（昭和33）年、関戸廃寺跡は市指定史跡となった。

1961（昭和36）年、地元史談会の要請により、石田茂作氏（当時奈良国立博物館長）、鎌木義昌氏（当時倉敷考古館）らが現地調査を行うとともに、地元の旧家の庭にあった「しび」の破片を確認し、⁽¹⁾発掘調査の必要性が認識された。

これを受け、1962（昭和37）年12月10日から6日にわたり、倉敷考古館の鎌木義昌氏・間壁忠彦氏・間壁賛子氏らを担当者として発掘調査が行われた。その結果、塔基壇が確認され、関戸廃寺の性格を解明する上で大きな成果を得ることができた。⁽²⁾

この調査により確認された塔基壇及びその周辺を市として買収し、保存することとした。

1963（昭和38）年8月1日、前年の調査の成果をふまえて、塔基壇周辺が岡山県指定史跡となった。その頃、地元では関戸廃寺跡の保護の気運が急速に高まり、1965（昭和40）年5月18日から同遺跡の保護・保存を行うことを目的に関戸廃寺跡保存会が発足した。

1976（昭和51）年、塔跡の南側はJ.A笠岡吉田支所の敷地であったが、建物の改築の計画がなされた。史跡の保存と利便性の2面から再三協議が繰り返されたが、他に建てることのできる場所もなく、予定地内の発掘調査を実施し、その結果により再度協議することになった。このため、岡山県教育委員会によって確認調査が実施されたが、遺構は検出されず、整理箱5箱分の瓦が出土したにとどまった。⁽³⁾この結果により、建物の基礎を深くしないこととして、建築の許可が出た。

1979（昭和54）年、塔跡の東側で宅地造成がなされ、これに伴って岡山県教育委員会が確認調査を実施した。その結果、溝・壇状遺構・柱穴が検出されている。⁽⁴⁾

1992（平成4）年、塔跡の西側でふたたび宅地造成が計画され、市教育委員会が確認調査を実施した。調査では、南北の畦に沿って瓦の集中がみられたため、築地の存在が想定された。地権者との交渉の結果、宅地造成は中止となり、同敷地は笠岡市によって買収され市有地となった。

山陽自動車道開通以後、インターチェンジを中心に進んでいる都市化の波が、関戸廃寺の周辺に及びはじめたことが改めて認識された。このため、早急に寺域と主要伽藍の配置を確認し、今後の保存と活用のための基礎資料を得ることが待望された。そこで、国庫補助を受け、平成6年度から8年度の3カ年計画で関戸廃寺跡の寺域確認調査を実施することとなったのである。

第2節 発掘調査の経過

（第1次調査）

関戸廃寺の寺域は、水田や畠としてほとんど開発の手を免れていた。また、地権者を初めとした地元自治会の暖かいご理解により、トレチの設定も比較的制約を受けずにすんだ。そこで、当初から唯一判明していた塔心礎のほぞ穴を基準点として、東西南北にトレチを設定し、まず周辺の状況をつかむこ

とした。また、周囲の水田畦畔の形状を参考にして寺域の北東角・北西角にあたると思われる付近にもレンジを設定した。ただ、水田ということもあり、秋の収穫が終わってからの農閑期に調査することとなり、平成6年11月7日から平成7年3月29日まで実施した。

これにより、塔のすぐ北側と東側に、基壇をもつ建物の存在が確認できたとともに、寺域の西限と、北限がほぼ推定できることとなった。しかし、当初の予想に反し、北側では、耕作のための地下げが行われており、遺跡の保存状態が非常に悪い事も判明した。

(第2次調査)

第2年度は、平成7年11月13日から平成8年3月29日まで実施した。第2次調査は、前回の調査で確認された建物の規模と性格の確認と、寺域の南限と東限の確認を主眼に置いて実施した。

その結果、北側の建物では、北東角、東端部、南端部が確認されば建物の規模が想定できた。一方、東側の建物では、建物の基壇化粧と思われる石積みが検出されるとともに、礎石の抜け跡が多数検出できた。また、前段階の建物礎石が検出された。

また、寺域西限の築地の基底部が検出され西限が確定できたが、東限と南限は、確認できなかった。

(第3次調査)

第3年度は、平成8年10月24日から平成8年11月26日まで調査した。最終年度として、2カ年の調査で確認できなかった北側建物の西端、塔基壇の確認及び東側建物の補足調査を目的とした。

北側の建物は、建物の規模が判明し、東側の建物では、昭和54年の調査との関連が明確になった。また塔基壇においては、版築の状況がより明確になるとともに、石積化粧の状況が把握できた。

調査の実施及び整理にあたっては、対策委員の先生を始め下記の方々から有益なご教示・ご助言をいただきくとともに暖かいご支援をいただいた。記して謝意を表す次第である。

有井広幸、伊藤敬太郎、井上和人、上原真人、鳥越憲三郎、岡田博、岡本寛久、奥村清一郎、小田富士雄、狩野久、龟山行雄、木村勉、小林謙一、河本清、佐川正敏、佐藤純治、直原伸二、白石純、高田知樹、館野和己、谷山雅彦、次山淳、新納泉、西口寿生、沼野忠之、花谷浩、平井勝、藤原好二、森下章司、山崎信二、市文化財保護委員会委員各位（敬称略あいうえお順）

また、高田馬次氏のご遺族から氏の研究資料の提供をいただいた。合わせて感謝の意を表したい。3カ年にわたる発掘作業には、地権者、地元自治会、吉田公民館、JA笠岡吉田支所の方々の暖かくご支援・ご協力をいただいた。また作業に従事していただいた作業員の方々には、地元有志の方のほか、かなり遠隔地からの通勤を強いた方々もあり、極寒の中ご参加をいただいた。

作業員名簿

上野清美、上野光子、大森茂、北野秋芳、倉橋正太、河本和義、小坂義夫、小寺美知子、佐藤忠夫、末竹稔、竹本進、中道松枝、萩原直義、古田哲夫、古田豊子、森田潤一、三宅千代子、三宅義男、森ミツエ、森谷弘、元家智代子、薮田節子、山足研典、山本ムツ子、渡辺正明、

註

(1) このころのいきさつは、地元の郷土史家による小冊子に詳しく述べられている。

小見山熊夫・田中舜治・広沢澄郎「関戸廃寺の研究」1961年

小見山熊夫・広沢澄郎「関戸廃寺の研究Ⅱ」1963年

(2) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁茂子「附関戸廃寺址」「長福寺裏山古墳群 附関戸廃寺跡」1965年

(3) 葛原克人「笠岡市関戸廃寺と農協支所」「岡山県埋蔵文化財報告」7 1977年

(4) 岡本寛久「笠岡市関戸廃寺跡の確認調査」「岡山県埋蔵文化財報告」10 1980年

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

関戸廃寺周辺の土地は、今までかなりの部分が水田として使用されてきたため、比較的自由に調査区を設定することができた。調査区の設定にあたっては、過去の調査で検出され、すでに地表に露出していた塔心礎の舍利孔の中に基準点をおき、真北にそって正方眼を設定した。なお、1979（昭和54）年と1992（平成4）年の調査においてもそれぞれ同様の方法で基準点を設定しているが、今回の調査における基準点とは微妙なずれがあるようである。各トレンチは地形上の制約を受けない限り、この方眼に沿った形で設定している。

地形は、丘陵地帯の西麓に位置しているため東高西低であり、水田は東から西へと段々に下っている。特に、南東方向から舌状に張り出した八幡神社の丘陵に近い寺城南東部分が高い位置にある。それでも寺院を造営するにあたっては、この南東部分の地山をより深く削り、地形の傾斜を若干解消した後に造営しているものと思われる。地山は、明褐色砂質土で白色のひび割れのような文様が走る非常に硬質な土である。さらにその下層には色が濃く岩盤のように硬い層がある。寺院の各施設は、これらの地山土の上に構築されている。寺城の形状は、現在の水田畦畔や道の形状にかなり反映されているようである。

トレンチは合計40箇所に設定した。その配置については図のとおりである。6トレンチと7トレンチは、平成6年度の調査では別々のビニールハウスの内に設定していたが、平成7年度になってハウスを全て撤去することができたため、連結してひとつのトレンチとなった。

金堂に關係するのは9・26・32・33・36トレンチ、塔に關係するのは34・35トレンチ、東方建物に關係するのは6・7・23トレンチである。その他に24トレンチでは築地基底部が、11トレンチでは2間×1間の掘立柱建物が確認されている。

これまでに、寺院創建以前の遺物・遺構は発見されていない。また、寺院が完全に廃絶してから後の遺物・遺構も非常に少なく、数点の土器小破片が出土しただけである。

（第1次調査）

関戸廃寺の寺城は、かなりの部分が水田や畠として開発の手を免れていたため、トレンチの配置も比較的制約を受けてずにすんだ。そこで、当初から唯一判明していた塔跡の東西南北にトレンチを設定し、周辺の状況をつかむことにした。また、周囲の水田畦畔の形状を参考にして寺城の北東角・北西角にあたると思われる付近にもトレンチを設定した。

その結果塔跡北側の9トレンチで建物基壇の北端部と、それに伴う瓦溜りが良好なかたちで検出された。また、塔跡東側の6トレンチと7トレンチでは基壇の上面に当たらしく、原位置を移動した礎石とその抜け跡が検出された。その他には、主要な伽藍に伴う可能性のある遺構として、5トレンチで南北方向の溝、10トレンチ南端で東西方向の溝が検出された。塔跡西側の8トレンチは、現在ツイジタと呼ばれている休耕田に位置しているが、南北に並んだ柱穴が2カ所に検出された。寺城を画する施設に關わる可能性がある遺構として、4トレンチの南北方向の浅い溝、11トレンチ北端の東西方向の溝などがある。また、11トレンチでは掘立柱建物、13トレンチでは溝と瓦を廃棄したと思われる瓦溜り、14トレンチでは柱穴群が検出された。

以上の結果より、塔跡の北側と東側にそれぞれ主要な建物が存在することが判明した。また、寺域の北限と西限のおおよその位置をつかむことができた。出土遺物は、9トレンチ・13トレンチの瓦溜りを中心には、瓦・土師質上器・須恵器・鉄釘などが出土した。これらはすべて寺院に伴うものと思われる。

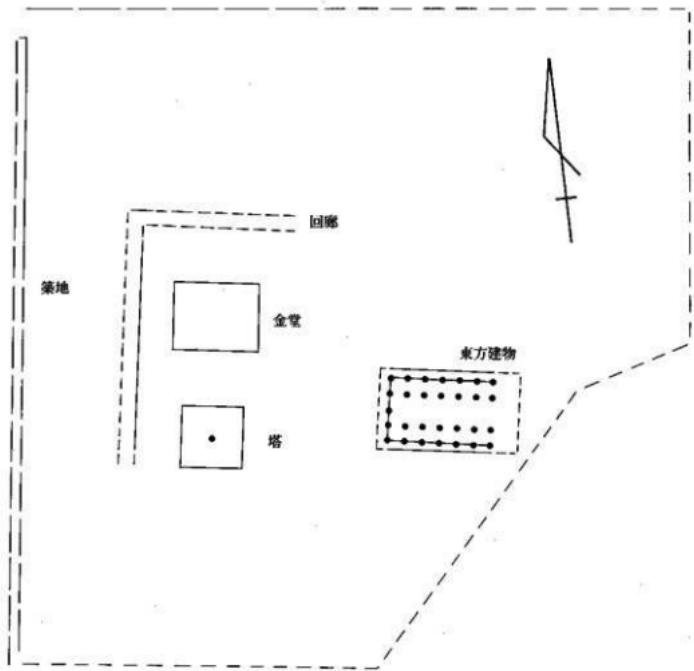
(第2次調査)

第2次調査は、前回の調査で確認された2棟の主要建物の規模と性格の確認と、寺域の南限と東限の確認を主眼に置いて実施した。

その結果、塔跡北側の建物では、北東コーナー（26トレンチ）、東端（33トレンチ）、南端（32トレンチ）が確認された。当建物は、塔跡よりも古相の瓦が出上することより金堂であると判断した。いっぽう塔跡東側の建物では、6・7トレンチにおいて建物の基壇化粧が検出され、23トレンチの成果と合わせて桁行5間以上×梁間4間の建物になることも判明したが、基壇中から小礫石1カ所が出土し、さらにその下層にあたる地山上面からは瓦と木炭を多量に含んだ層が検出されたことから、それまで認識していた東方建物よりも、さらに前段階にも何らかの建物が存在していたことが判明した。また、寺域の西端にあたる24トレンチでは築地の基底部が出土して寺域西限が確定できたが、東限と南限を確認するための15・16・17・18・19・20・29・30・31トレンチでは寺域を画する施設の遺構は検出されなかった。

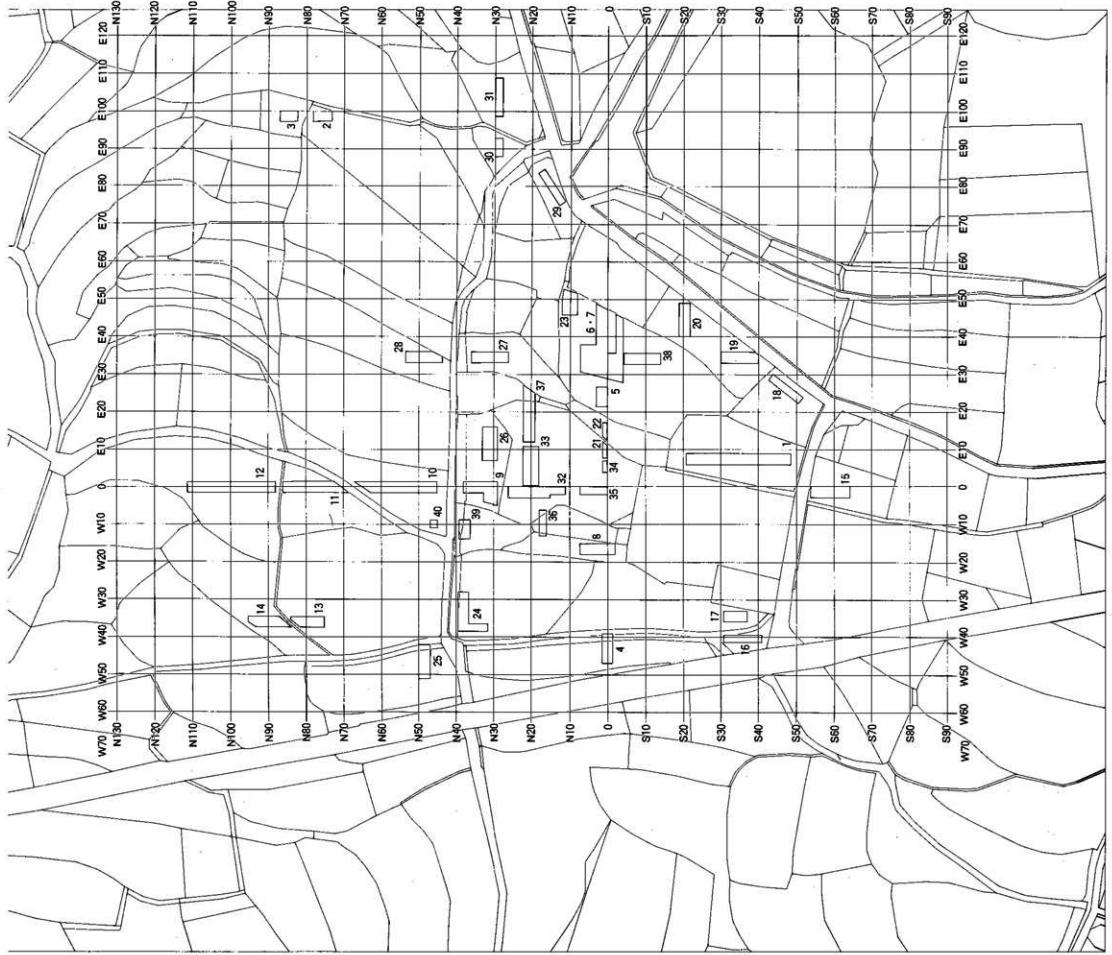
(第3次調査)

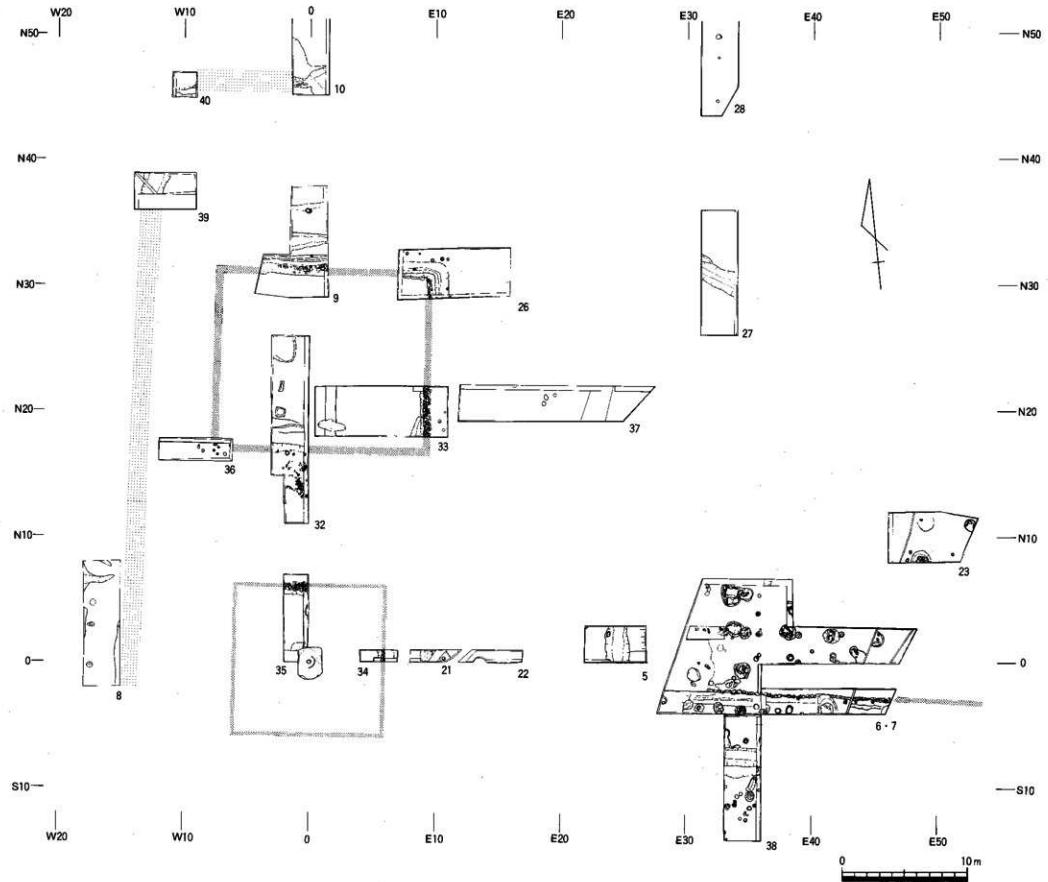
34・35トレンチにおいて、塔基壇が確認された。



第3図 伽藍配置想定図 (1/1,000)

第4図 ドレンチ配管図





第5図 主要トレンチ配置図 (1/300)

第2節 遺構

1. 金堂

塔の北側で確認された建物基壇は、その規模と位置・出土瓦から考えて金堂のものであると考えられる。第1次調査で9トレンチ、第2次調査で26・32・33トレンチ、第3次調査で36トレンチを調査した。

基壇の残存高が最も高いのは32トレンチで、地山から約80cmの高さまで残っているのに対して、東辺・北辺では60cm程の高さまでの残存である。これは、もともと創建期の地形（地山上面）が東から西に傾斜しているため、西側のほうがより後世の破壊の影響を受けずにすむためである。ただし、西端部だけはその後の水田地形の影響から遺存状況が非常に悪く、ほとんど地山近くまで削平されている。基壇の外側には、瓦・土器・鉄釘・木炭などを大量に包含する灰白色土層が存在し、その下に瓦・土器・木炭を包含する灰色砂質土層が堆積している。この灰色砂質土層は基壇の外側を巡る雨落溝としての機能を果たしていた段階の層であろう。

《規模と版築》

基壇の規模は、下端で南北16.55m・東西約17.3m、上面で南北13.55mを測る。基壇の版築は、地山の上に黄褐色土・淡褐色の砂質土・灰褐色のやや粘質な土を何層にもわたり交互に積み上げて構築されている。掘り込み地業は確認できなかった。なお、32トレンチで基壇の最下層より、鉄滓が1点出土している。なお、基壇化粧をもとにして割り出した金堂の主軸は、真北に対して約1°東にふっている。

《礎石と抜け跡》

基壇は、礎石や明瞭な抜け跡が検出されなかつことから、かなり深くまで後世の削平を受けていると考へられる。唯一、32トレンチで基壇上に浅い掘形状の遺構を3カ所検出したが、埋土が新しくいため、直接礎石抜け跡とは結びつかないと思われる。また、33トレンチ基壇上には幅80cm、深さ10cm程の南北に長いトレンチ状の掘り込みがみられたが、埋土からして現代に掘られたものであろう。さらに、礎石のような石が割られて基壇の上に掘られた土壙の中に落とし込まれていた。石材は近辺で産出される流紋岩であった。

《基壇の化粧》

基壇化粧は、平瓦の凸面を外側にして立て並べ、径10~20cm程度の石を使ってこれを押さえめる形で構成されていたものと考えられる。平瓦は、地山面より70°程度の角度をもって立てられており、その外側に1列の列石が巡っている。ただし、基壇化粧は東辺（33トレンチ・26トレンチ）においてのみ残存している。基壇の北東角では、ちょうどコーナーにあたる位置に平瓦を配し、瓦の曲面をうまく利用している。基壇土盛部分と化粧の平瓦との間には幅10cm程度の裏込土が認められる。

基壇化粧に使用されている平瓦の内訳は、後述する平瓦Ⅲ A類7点・I A類4点・I E類2点・不明3点となっている。最も多いのが繩目叩きの平瓦Ⅲ A類であり、奈良時代に大幅に改修されたか、新たに設置されたことがわかる。したがって、この化粧の状況が創建当初からのものか否かは確定できない。

化粧の平瓦と列石の下側には押さえの土が存在するが、その上に多数の平瓦の破片が不規則に並んでいる状況が33・26・9トレンチで確認された。この平瓦片は押さえの土の上に貼り付けてあるもののか、それとも単に散乱しているだけなのかは判らないが、その中には軒平瓦Ⅰ類なども含まれている。

《雨落溝》

創建期の地表面は、前述のとおり東から西に傾斜しており、雨落溝底部の比高差は、最も高い東側(33トレンチ)に比して、北側(9トレンチ)で30cm程度、南側(32トレンチ)で25cm程度低くなっている。いっぽう雨落溝の幅は東側(33トレンチ)で150cm程度、北東角(26トレンチ)で130cm程度、北側(9トレンチ)で60cm程度、南側(32トレンチ)で70cm程度である。深さは、東側(33トレンチ)で22cm、北東角(26トレンチ)で10~15cm、北側(9トレンチ)で7cm、南側(32トレンチ)で24cm程度である。

《金堂の南側》

雨落溝を隔てた金堂南側の空間には、長径5~15cm程度の小石がほとんど同一平面上に散乱している。これらの小石は他の部分では確認されていないものであるが、瓦溜りの下側に存在していることから、ある時期に金堂の南側、塔との間の空間に散かれたものであると考えられる。

《瓦溜り》

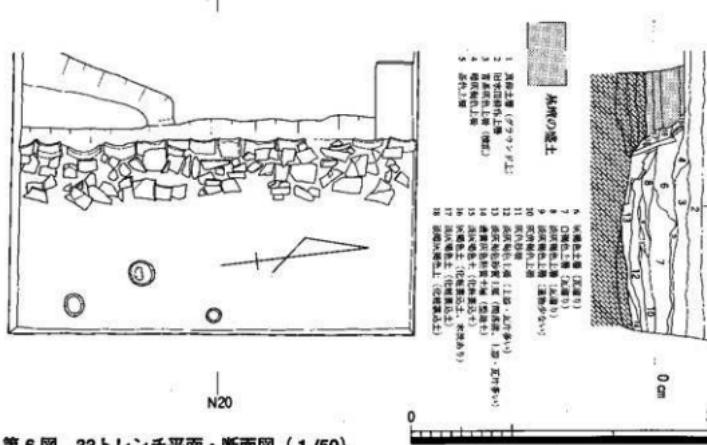
金堂周辺からはおびただしい量の瓦が出土した。その量はコンテナ約270箱分である。瓦に混じって土器・鉄釘も多量に出土した。瓦溜りの存在する白灰色土層中には木炭が多量に存在しており、その状況から火災によって短期間のうちに金堂が焼絶したことをうかがわせる。

瓦溜りは、おもに基壇端部から2m以内の範囲に比較的大形の瓦破片が集中して、完形に近い瓦も多数出土する。軒丸・軒平瓦のなかで圧倒的多数を占めるのは後述する軒丸瓦I類・III類と軒平瓦I類である。平瓦では格子目叩きのIA類・IB類などのほか、繩目叩きのIII A類も多い。26トレンチと33トレンチでは残存状況が良好で、特に26トレンチでは瓦溜りを除去してゆくと、最下部から軒丸・軒平瓦が列をなして出土した。この軒瓦列は、基壇上端から50~70cmを隔て、ちょうど雨落溝の底部から外側肩部の間に相当する位置に横一列に並んでいる。軒丸瓦はすべてIII類、軒平瓦はすべてI類である。角にあたる位置にあるのは隅軒平瓦である。瓦溜りに混じって反対側の隅軒平瓦も出土している。ほとんどの軒丸瓦が四面、軒平瓦が凸面を上にした状態で出土し、しかも瓦当部が基壇側を向いている。このことから、建物の倒壊時に軒先だけが先に崩れ落ちていたことが推定される。

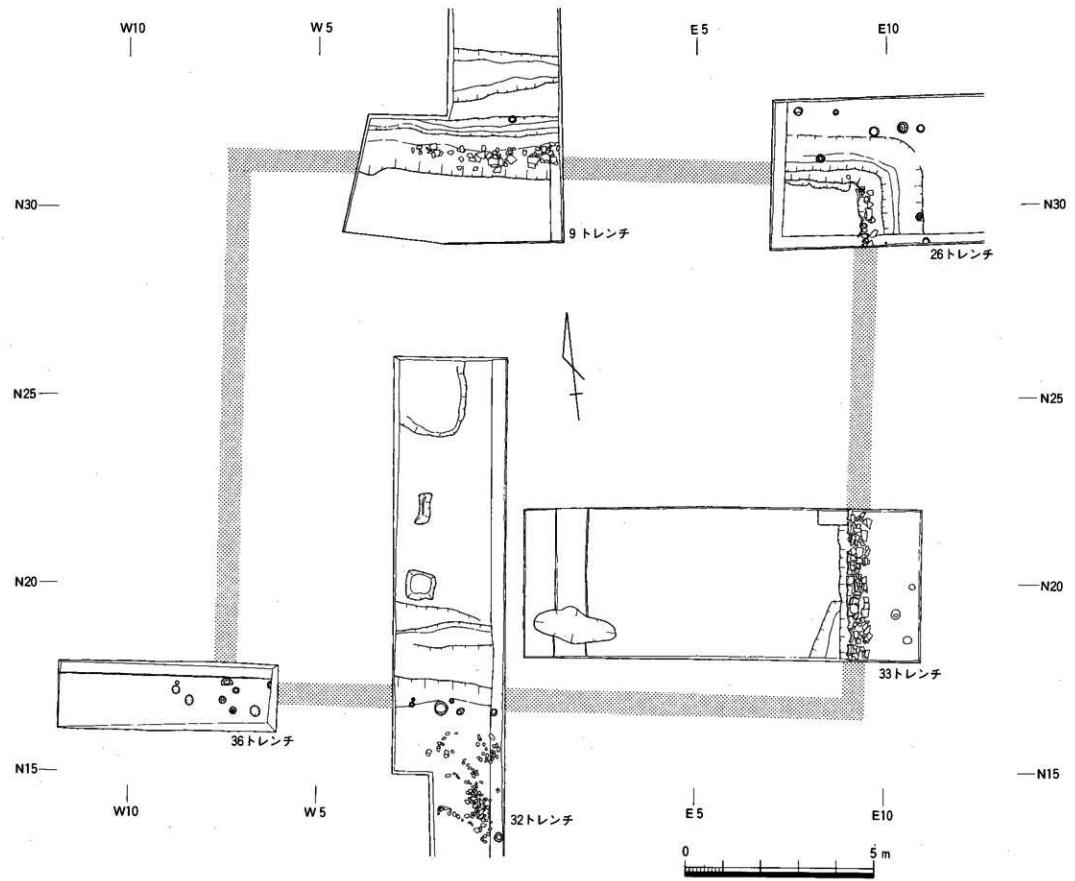
N20

E10—

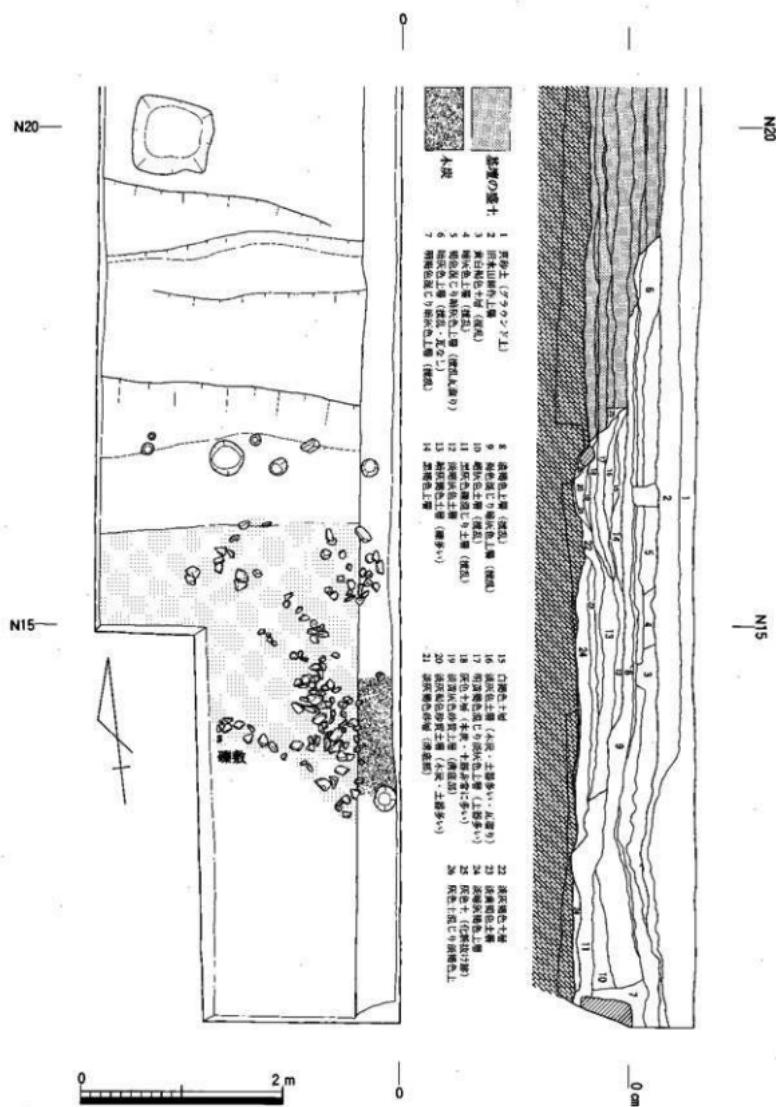
—E10



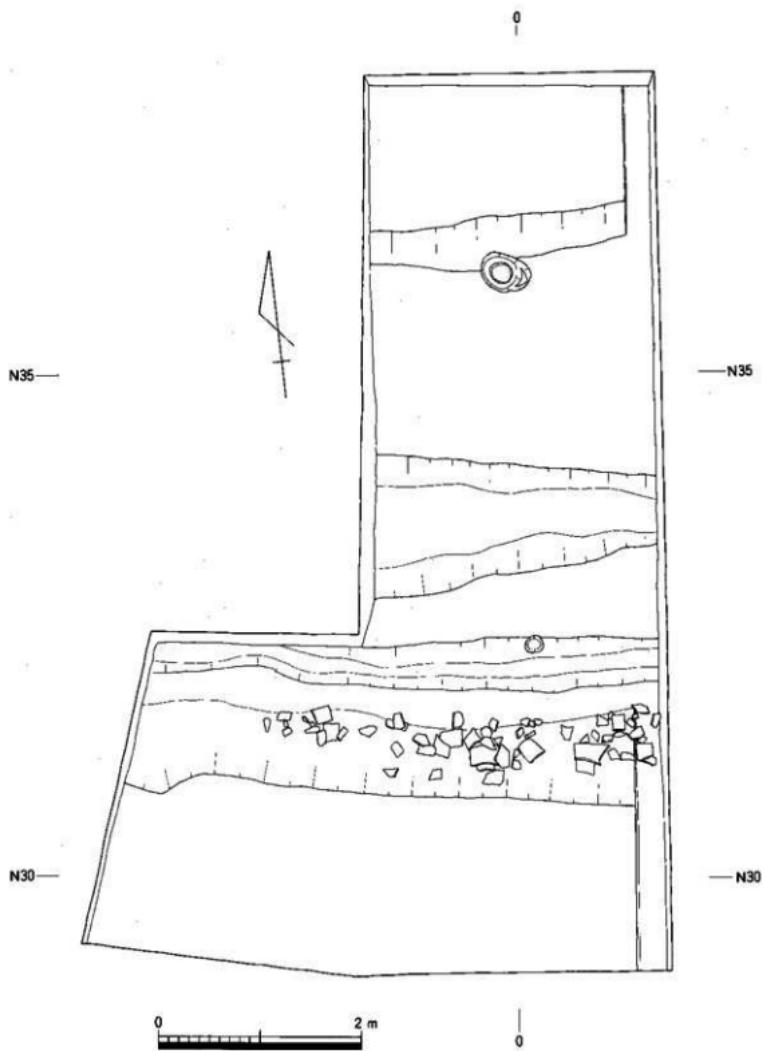
第6図 33トレンチ平面・断面図 (1/50)



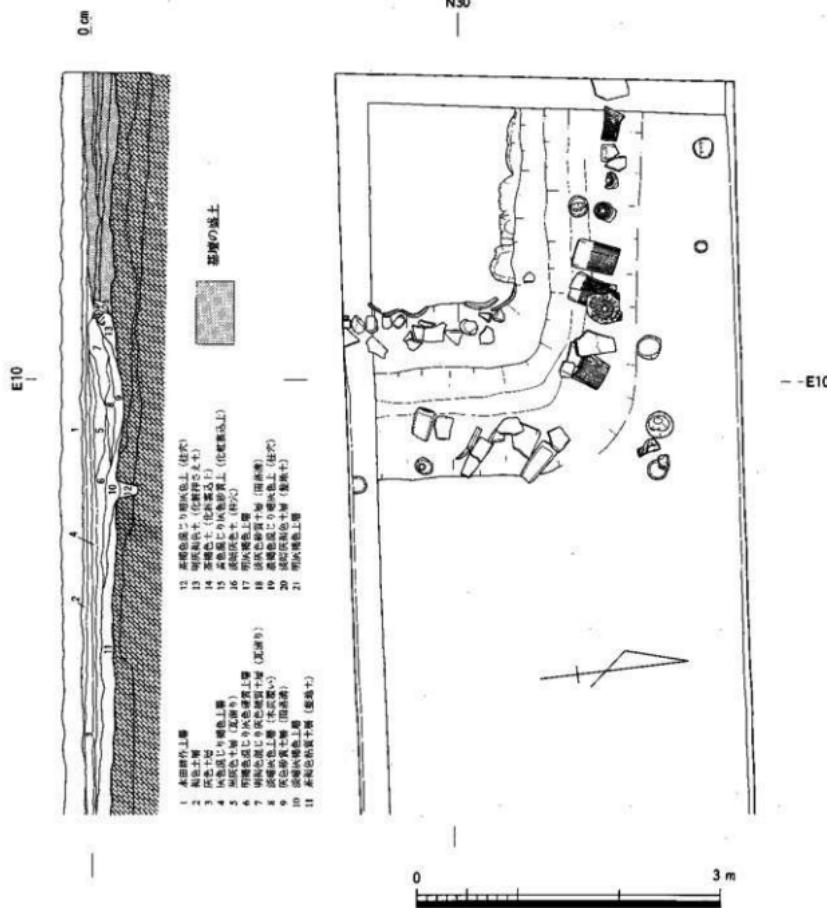
第7図 金堂平面図 (1/100)



第8図 32トレンチ平面・断面図 (1/50)



第9図 9トレンチ平面図 (1/50)



第10図 26トレンチ平面・断面図 (1/50)

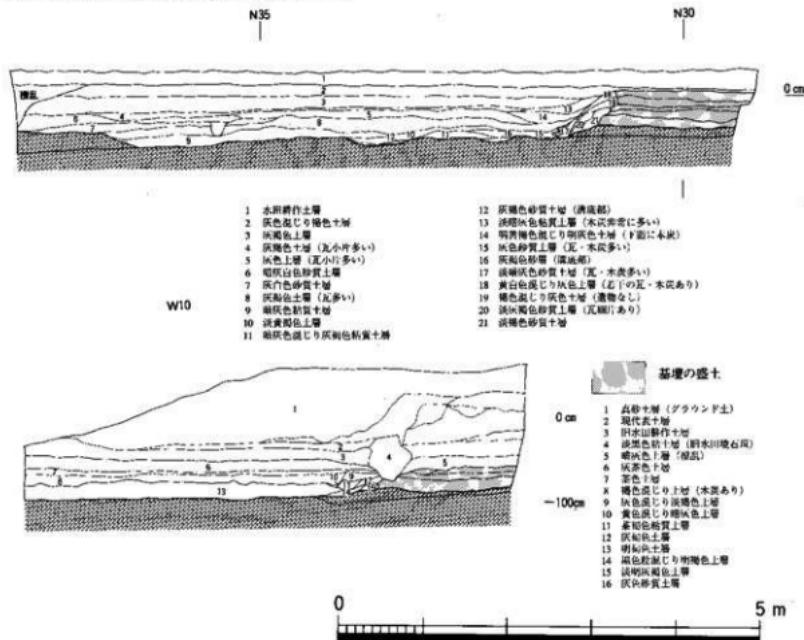
また、角に近い位置の平瓦の上側から完形に近い鬼瓦Ⅰ類が出土しており、この鬼瓦が軒先に近い位置に配されていたことをうかがわせる。

〈足場穴〉

金堂の周囲、雨落溝付近で多数の柱穴が検出された。これらの柱穴には大小さまざまなものがあるが、金堂の創建または改修に伴って何度か使用された工事用足場柱の痕跡であろう。

《金堂北側の地山盛り上がり》

9トレンチ北端では、地山の盛り上がった部分が検出された。これは地山を削り出して平坦面をつくり出したもので、金堂の北4.5mの位置から北に伸びており、北壁にかかっている。調査区内での南北幅は上面で1.2~1.5m、高さ13cmである。南端部に接するように柱穴が1カ所存在する。柱掘形は径40cm、柱痕跡は径20cmで、深さは33cmである。地山盛り上がりの南側には明確な溝は存在しないが、溝の埋土を想わせる暗灰色土が堆積していた。



第11図 9トレンチ東壁・36トレンチ北壁断面図（1/60）

2. 塔

塔の概要

34トレンチ・35トレンチにおいて塔基壇を調査した。心礎は半地下式であるため原位置を保っていたが、それ以外の礎石は後世に移動させられたようである。トレンチを設定した部分では、1962（昭和37）年の発掘調査の際に、基壇と基壇化粧・瓦溜りの上面までが調査されていたが、今回は基壇外側を創建期の地山面まで掘り下げた。

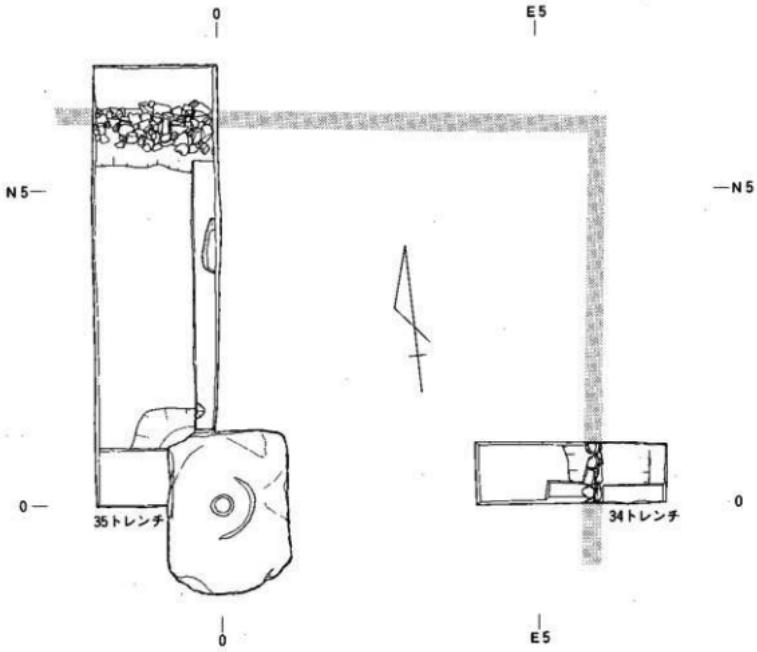
《規模と概要》

塔基壇は、金堂とほぼ同一のレベルまで削平を受けており、北辺で地山から約80cm、東辺では約60cmの高さまでが残存している。基壇の外側に瓦・土器などを大量に包含する灰白色土層が存在し、その下に瓦・土器・木炭を包含する灰色砂質土層が堆積している状況は金堂とよく似ている。ただし、北側の瓦溜りは2次的に動かされたものである可能性がある。雨落溝底部の比高差は、東側(34トレンチ)に比して、北側(35トレンチ)で25cm程度低くなっている。

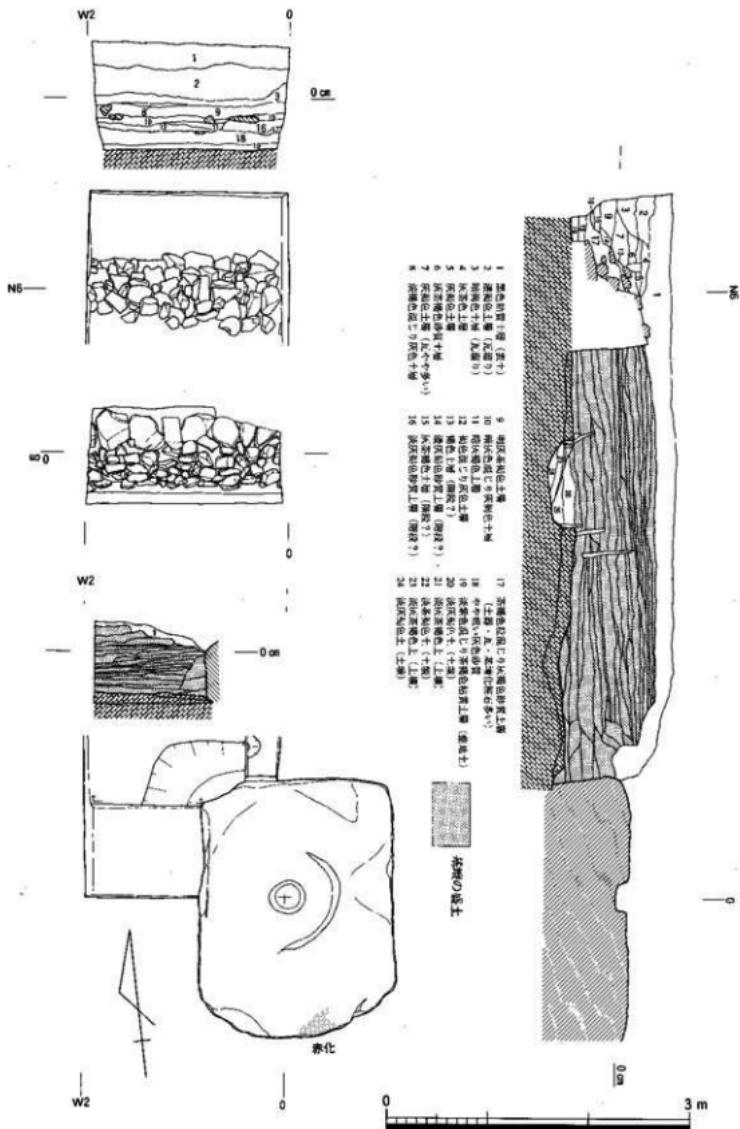
塔心礎の中心から基壇上面の化粧石までの距離は、北辺において5.6m、東辺においては5.75mを測る。いっぽう化粧下端部までの距離は、北辺において約6.3m、東辺においては6.0mである。これらのことから塔の全体像を推定すると、上面で1辺11m弱、下面で1辺12m強ということになろう。この数字は過去の調査とほとんど同じである。なお、基壇化粧を元にして割り出した塔の主軸はN1°Eであり、金堂と同じであるが、塔の中心線は金堂のそれよりも若干西にずれて設定されている。

《版築》

塔基壇は非常に硬質な地山上に直接構築されており、掘り込み地業は確認できない。塔心礎は半地下式であり、地山を10cm程度掘りくぼめて安置している。基壇盛土の版築を行うにあたっては、まず心礎の周囲に押さえの土を置き、その後地山に近い硬質の褐色砂質土、次に淡褐色土を積み、その上により粘質の高く粒子の細かな淡灰褐色土をそれぞれ何層も念入りに積み上げている。積み上げの単位は上層に行くにしたがってより細かくなる。さらに、基壇の土層断面において、立板状の痕跡が



第12図 塔平面図 (1/80)



第13図 35トレンチ平面・断面・立面図 (1/50)

4カ所に確認された。立板状の痕跡は淡灰色を呈する細かな粒子の土から成っており、立板の外側と内側では明らかに土層が異なっている。

この板状の痕跡に挟まれた幅約80cmの部分では、地山を15cm程度土壤状に掘りくぼめているが、その意味はわからない。しかし、これらの痕跡は基壇の構築過程に深く関わっているものと考えられる。また、基壇盛土の下側、心礎に近い位置の地山上面において小穴を1カ所検出している。小穴は径25cm、深さ11cm程度の逆円錐形の穴であり、基壇の土盛りを開始する以前のものである。小さな穴であるため、柱穴等ではないと思われる。

〈心礎〉

塔心礎はすでに過去の調査で知られているが、改めてここで報告する。心礎は上面で南北260cm、東西193cm、厚さは80cm程度である。上面中央には舍利孔がうがたれている。舍利孔は径33cm、深さ13cmの円形である。心礎上面の形状は東側がやや高く隆起しているため、舍利孔の東側を加工して最大5cm程度窪ませ、径約95cmの円形平坦面をつくり出している。おそらく心柱下端はこのスペースに収まっていたものと思われる。石材は当廃寺では珍しい花崗岩である。なお、過去の調査で発見されている南西角の礎石も花崗岩製であると報告されている。

1962(昭和37)年の調査報告には、「心礎上面には、東半に半径60cmの半円形、西半は中心から40cmのあたりまで、木炭が10cm～2cmの厚さに密着していた。おそらく火事によって滅失した心柱の痕跡であろう。」とある。また、心礎南端に赤化している部分があり、これもおそらく被熱によるものであろう。これらのことから、塔も金堂と同じく火災を直接の契機として廃絶したことがうかがわれる。また「心礎の西側に接して、焼けた瓦がつめこまれた1.5m×0.9mばかりの穴があり、深さは礎石の下面に達していた。」ともあるが、今回はその穴を利用して心礎の西側に「ア」字型を設定し、基壇盛土の状況を確認した。

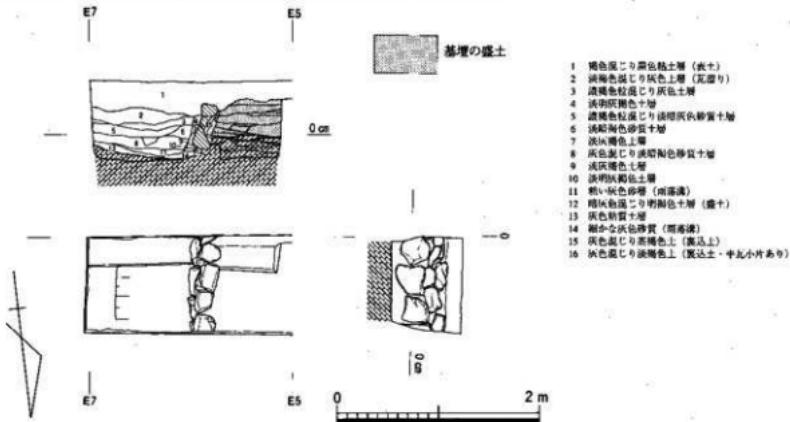
〈基壇の化粧〉

基壇化粧は乱石積であり、東辺では下から2～3段目まで、北辺では5段目くらいまで積み上げたものが残存している。石材はすべて付近で産出される流紋岩である。化粧の構築は、まず縦30cm×横20～30cm×奥行き20cm程度の大形の石を立て、その上に横長の石を順次積み上げて行われている。この横長の石は、東辺では縦10cm×横20～25cm×奥行き10～20cm程度のしっかりしたものを積んでいるのに対し、北辺では縦10cm×横15～20cm程度のやや小ぶりな石を積み、その透き間を縦横10cm程度の小石で埋めており、比較的乱雑なつくりとなっている。石積の角度は東辺では78°程度である。北辺でも下部は同程度の角度をもって積まれており、垂直に近い印象を受けるが、上半部は放物線を描くように内に傾斜している。この基壇化粧は、地山の上に堆積した灰褐色土層の上に設置されており、この灰褐色土層には瓦が含まれる。また、東辺では基壇盛土と化粧石との間に幅10cm程度の裏込土が確認されたが、裏込土中から平瓦小片が凸面を外に向かって状態で3点出土した。この平瓦は後述する平瓦ⅢA類であることから、塔の基壇化粧も金堂と同じく奈良時代に大幅に改修されたか、新たに設置されたと推定される。

〈階段〉

基壇北辺の中央付近では、基壇の外側に化粧石と同じような石が集中して検出された。検出状況から、崩壊した化粧石とも階段の痕跡ともとれるが、土層の状況も考え合わせて、ここではいちおう階段ということで報告しておきたい。階段は、おおむね1列の石を1段として数段で構成されているよ

うであるが、崩壊が激しいため正確な幅等は不明である。しかし、階段部分の土層は他の部分とは異なっており、灰茶褐色の砂質が強い層で構成されている。この層中からは石のほか、瓦もかなり出土した。同層は中軸から約70cm幅で残存していることから、階段であるとするならば百数十センチ程度の幅をもっていたものと考えられる。この階段に隠れて見えなくなるはずの部分にもやはり化粧が施されているが、他の部分に比較してやや粗雑なつくりである。



第14図 34トレンチ平面・断面図 (1/50)

〈瓦溜り〉

金堂と同じく塔周辺にも瓦溜りがみられた。ただし、35トレンチ上層の瓦溜りは、他の箇所で見られるような木炭を包含した灰白色土層ではなく、茶褐色土層中に存在するため、2次的に搅乱を受けている可能性がある。トレンチが小規模であったため、瓦溜りがどの程度の規模であるかはっきりとは分からぬが、金堂の瓦溜りとよく似た状況であり、金堂と同じく、火災などの理由によって短期間のうちに倒壊した状況が推定される。

調査区が小さかったため今回はそれほどでもないが、過去の調査でかなりの軒丸・軒平瓦が出土している。最も多いのは軒丸瓦Ⅰ類であり、次に軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅰ類が多い。平瓦では正格子目に近い叩きのⅠD類が目立つ。

〈北側の搅乱土層〉

金堂と塔との間の部分の土層はかなり深く搅乱を受けており、2次的に動かされた瓦を多量に包含する暗灰褐色土・黄褐色土・暗灰色土が存在する。この層中において、32トレンチ南壁にかかった状態で礎石が1点出土しているが、金堂と塔どちらのものであるのかは不明である。石材は流紋岩である。また、これらの搅乱土層から下層の灰色砂質土層にかけて、瓦塔の破片が多数出土している。瓦塔は金堂の南邊から塔の北邊にかけて広く出土したが、いずれも小破片であり、瓦と同じく2次的に移動していると考えられる。そのため正確な設置位置は不明であるものの、金堂と塔との間の空間からさほど遠くない位置に置かれていたと考えられる。

②. 塔東側の状況

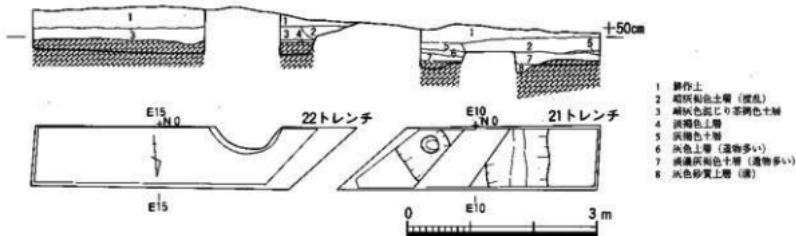
《21トレーナー》

塔の東側で南北溝が検出された。塔の東端部から溝の中心線までの距離は3.3mを測る。溝は幅約1m、深さ約20cmで、底は南から北に傾斜している。幅は狭いが、肩の形状は明瞭であり、しっかりした形の溝である。溝内の埋土は風化して粒状になった瓦を含む灰色砂質土層からなっており、土質質等が出土している。

さらに、溝の東側には柱穴が1カ所確認された。柱穴は直径30cm、深さ45cm程度のもので、溝と同様の埋土で埋まっていた。塔の東端部から柱穴の中心までの距離は4.7mを測った。これらの遺構は直接塔に関係するものではないが、距離的にかなり接近した位置にある。出土する瓦は塔のものである可能性が高いが、平瓦Ⅲ A類・Ⅰ D類などがある。

《22トレーナー》

遺構は特に確認されなかった。瓦も小破片が1箱足らず出土しただけである。



第15図 21・22トレーナー平面・断面図 (1/80)

3. 東方建物

塔跡東側で確認された建物跡は、その性格が不明確なことからここでは東方建物と呼ぶ。第1次調査で6・7トレーナーにおいて礎石とその抜け跡が検出され、主要建物の存在が確認されたため、第2次調査では両トレーナーを大幅に拡張すると同時に、新たに23トレーナーを設定した。その結果、前年度発見された建物基壇の内部に新たな礎石が、そして基壇最下層において瓦と木炭を含む層が検出され、東方の瓦葺建物が複数の時期にわたって立て替えられていることが判明した。第3次調査では38トレーナーを調査し、さらに新しい段階の盛土と溝の存在を確認したため、最終的に東方建物には第1期から第4期までの4つの段階があったものと解釈した。

東方建物の周辺は、主要建物と工房・生活施設が隣接していた空間である。建物の規格は建て替えが行われるごとに異なるものとなっており、建物が果たしていた役割も、時期とともにしだいに変化していくものと考えられる。

①. 第1期（瓦葺建物）

第3期礎石建物の基壇最下層は盛土ではなく、木炭・瓦を多量に包含する暗灰色土層である。このことが24トレーナーにおいて確認され、付近に基壇構築以前に瓦葺建物が存在したことが想定されたため、この建物の時期を第1期とした。

6・7トレーナー北壁側の24トレーナーからは、丸瓦と平瓦がコンテナ1箱分出土しているが、平瓦のなかでは繩目叩きのⅢ A類が主であり、格子目叩きのⅠ D類も若干混じっている。木炭は地山上面と暗灰色土

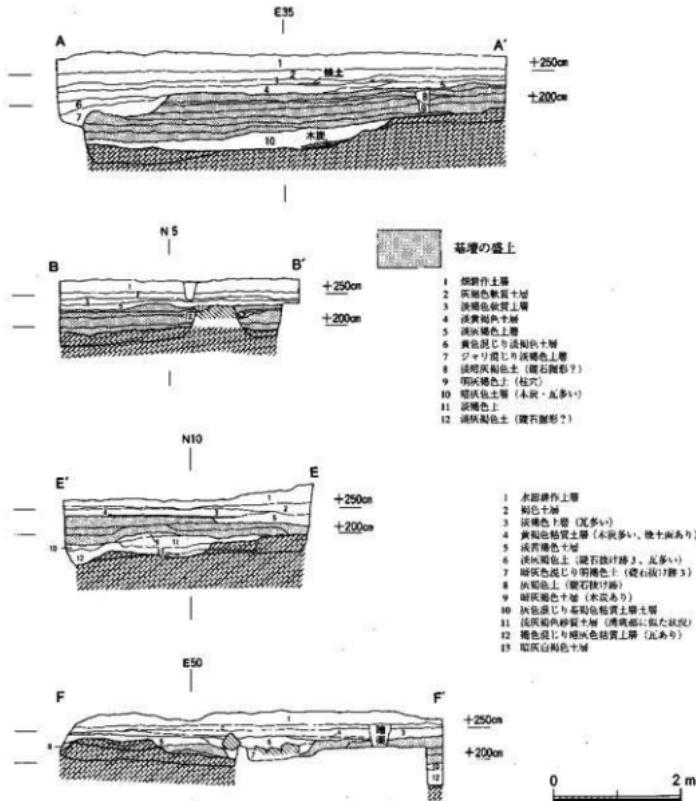
層上部で特に多くみられるが、地山上面の木炭は幅80cm、厚さ5cmの範囲に集中しており、その部分では地山が一部被熱して赤化している。いっぽう暗灰色上層上部の木炭はさほどの集中はみられないが、瓦とともに面をなして堆積している。

6・7トレンジ北壁のサブトレーンでは、東半で地山地形がやや急激に盛り上がっており、あるいはこの部分が第1期建物に関連している可能性もあるが、サブトレーン内の検出のため、詳細は不明である。

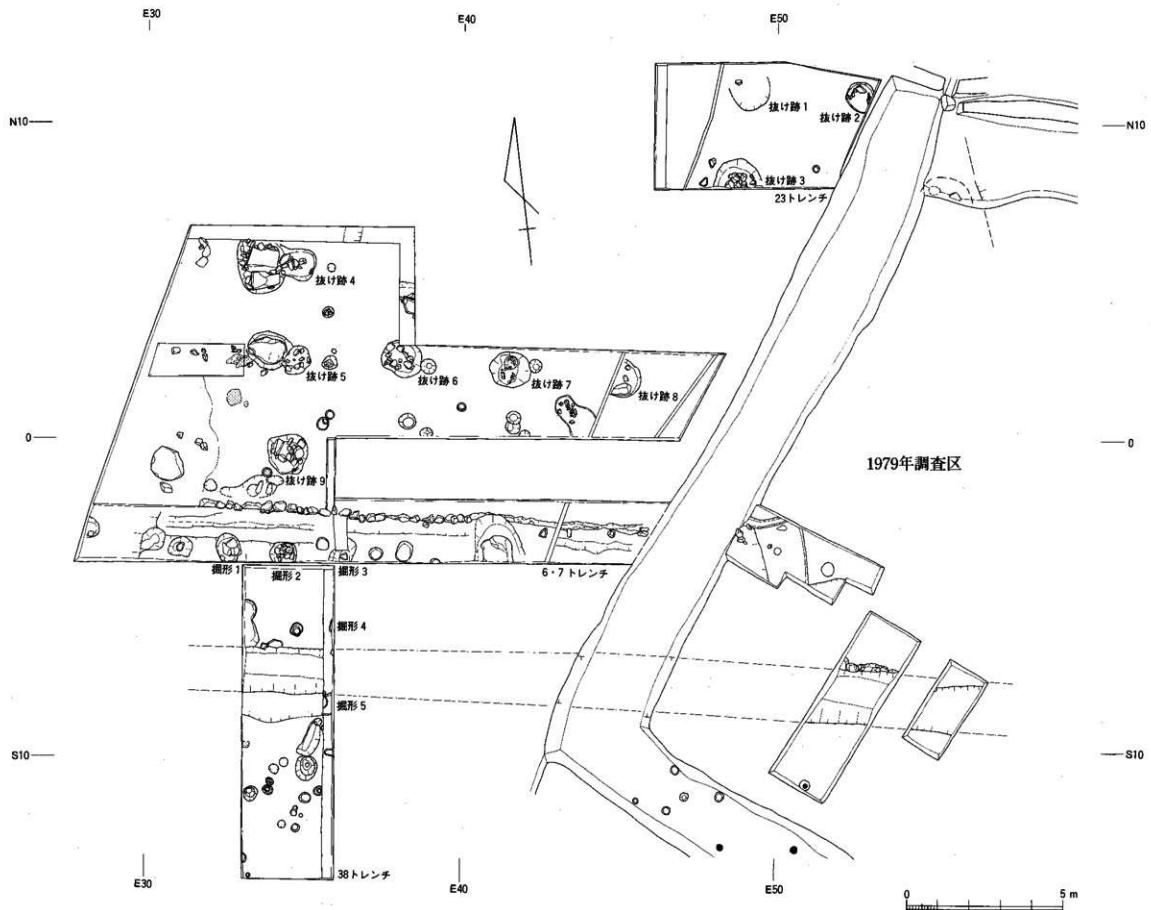
②. 第2期（礎石建物）

第3期建物の基壇版築土層中において、小形の礎石が確認された。これは、6・7トレンジ東壁側に設定したサブトレーン内から偶然検出されたもので、原位置を保ったままであると判断した。すなわち、第3期礎石建物に先行して、比較的規模の小さい礎石建物が存在しており、その基壇を利用するかたちで第3期礎石建物が建立されたものと推定される。この先行する比較的規模の小さい礎石建物の時期を第2期とする。

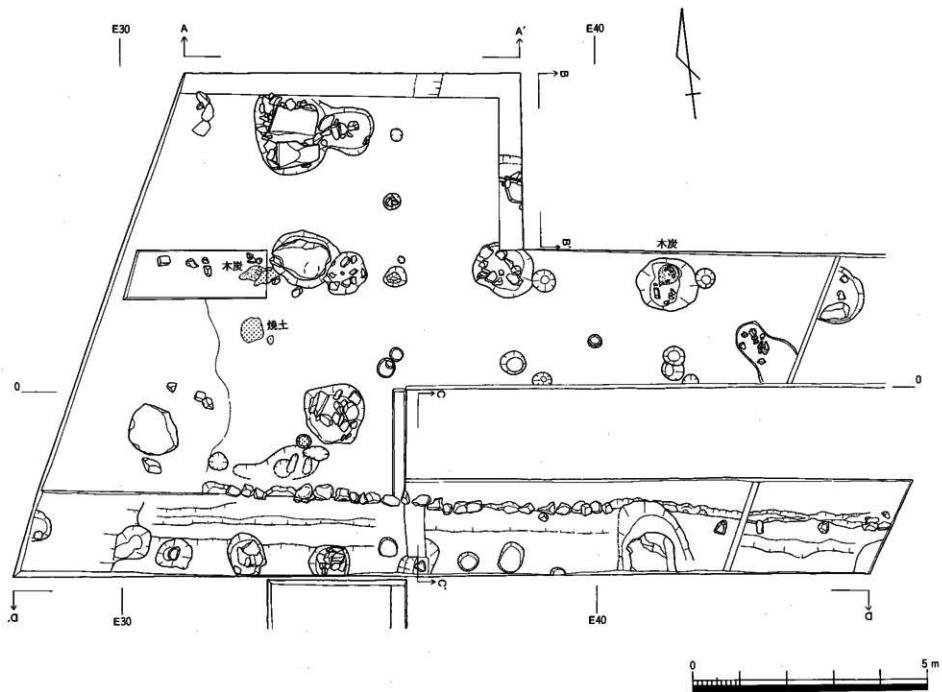
礎石は、6・7トレンジの東壁にかかった状態で出土した。石材は第3期の礎石と同じような流紋岩で



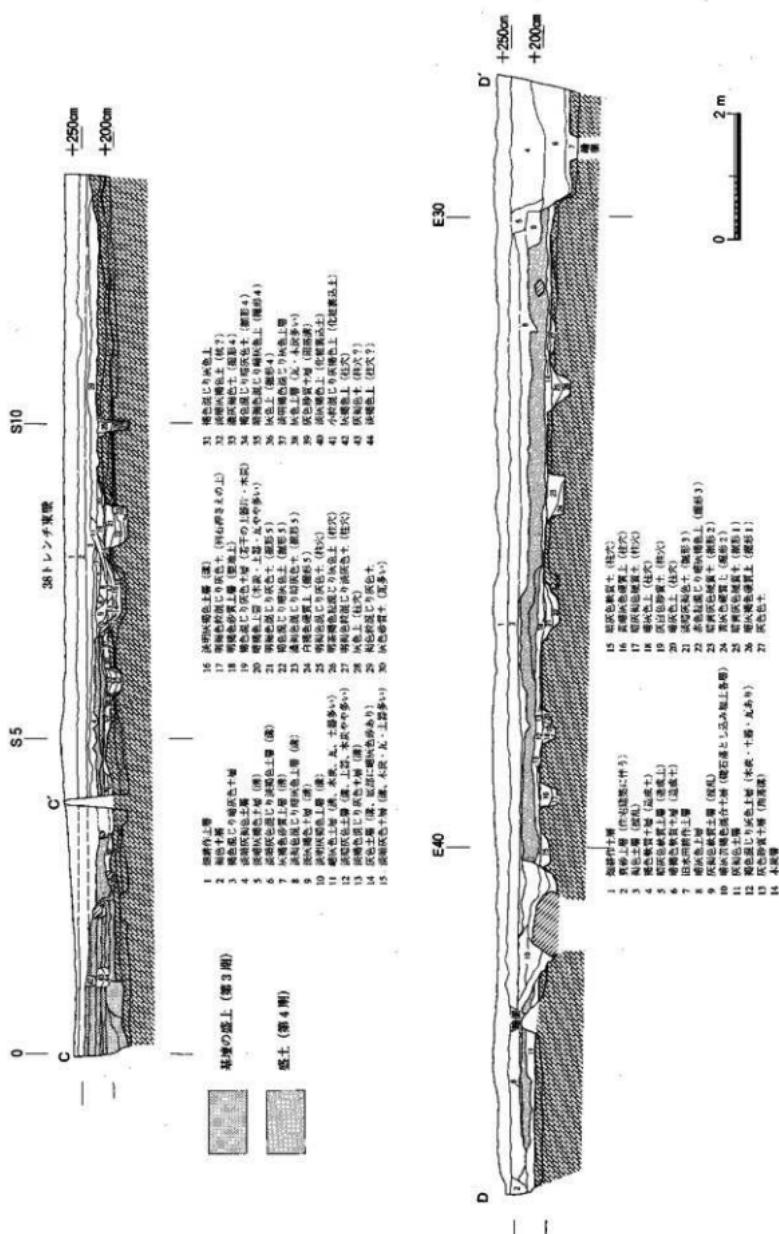
第16図 東方建物周辺断面図その1 (1/80)



第17図 東方建物平面図 (1/120)



第18図 6・7 トレンチ平面図 (1/80)



第19図 東方建物周辺断面図その2 (1/80)

ある。上面は平坦に仕上げられ、南北34cm、東西検出幅30cmを測り、やや長方形に近い形をしている。厚さは20cm程度で、礎石の下側には根石が6つみられた。その上面は第3期建物の礎石抜け跡の根石上面と比較すると、10cm程度低い。礎石の設置方法は、まず基壇上に南北1.35m、深さ10数cmの穴を掘り、径15~30cmの根石を配した後に礎石を安置し、淡灰褐色土で穴を埋めて礎石を据えつけ、最後に基壇全体に1層の盛土を積み上げて完成している。盛土は礎石の位置で地山から約30cm、調査区西側で地山から約80cmの高さまで積み上げられている。

その他の第2期建物に関わる遺構としては、後述する雨落溝とトレチ北壁で確認された柱穴があるのみであり、建物の性格を推定するのは困難である。しかし、23トレチ東側では地山が礎石上面よりも高い位置で検出されているので、建物の東限はそれ以西にあったと考えるのが妥当であろう。

③. 第3期（礎石建物）

調査当初から発見されていた基壇はこの段階の建物のものである。基壇は後世に西端部が削り取られていたが、礎石の抜け跡と南面の基壇化粧下部が残存していた。

基壇は、地山もしくは第2期礎石建物の基壇の上にさらに盛土を行って構築されている。すなわち、金堂や塔よりもさらに丘陵に近い位置にある東方建物周辺は、もとの地山地形の傾斜もより急であるため、東半部では完全に整地を行わず直接地山を利用し、そして西半部では第2期礎石建物の基壇を利用することによって東西の傾斜を解消し、その上に新たに基壇を築いているものと思われる。その結果、調査区内における基壇盛土の残存高は、西端付近で地山から約90cmであるのに対し、東端付近では約10cmとなっている。また、南辺の軒先の地形も東西でかなり傾斜しており、調査区東側と西側では約30cmの比高差がある。

基壇外側の状況は、褐色土混じり灰色土層の上に、若干の瓦などを包含するしまりの弱い淡緑褐色土層（第4期盛土）が存在している。上層の中には崩壊した第3期建物の基壇化粧石もみられる。金堂や塔とは異なり、瓦溜りは検出されなかった。また、階段も確認できなかった。基壇上の検出面では瓦が散乱しており、焼土遺構が数箇所に見られたことから、建物廃絶後に基壇を削り、生活面として利用していた時期があったと思われる。

《規模と概要》

基壇は南辺を検出できたのみであるため、正確な規模はわからないが、桁行5間以上、梁間4間になると考えられる。東西の規模が不明確なのは、東側は現在民家が建っており調査することができなかつたこと、西側は基壇が削られていたために西端の礎石列の有無が確定できなかつたことによる。第17図は東方建物周辺のトレチ配置図に、1979（昭和54）年の調査区を加えたものである。ただし、基準線に若干のずれを生じたため、担当者間の合意のもとで位置関係を多少調整している。これにより、さらに1列東側にも礎石列の存在を想定することができよう。

建物の主軸方位はN3.1°Eで、金堂や塔よりも若干東にふっている。また塔の東側に位置しているものの、真東にあるわけではなく、若干北にずれている。このことから、金堂・塔とは若干異なる規格のもとに建てられているものと思われる。基壇の上面を塔と比較すると、第3期東方建物のほうが約2m高い。このことは、地形的な条件に起因していることもあろうが、あるいは南北道の通る西の平地側からの景観を意識して、あえて高い位置に東方建物を設定している可能性も考えられる。現在でも、東方建物跡の敷地は、その西側の土地と比べると1段高くなっている。塔の東辺からこの段差までの距離は約21.7m、同じく礎石抜け跡10までの距離は約28.5mである。

〈礎石の抜け跡〉

礎石の抜け跡は都合 9 カ所において検出された。また、抜け跡 3 の東側の抜け跡も、23 レンチ南壁において確認することができた。それぞれの抜け跡では、拳大から人頭大の根石が検出された。根石はほとんどが礎石と同じく付近で産出される流紋岩であるが、一部に花崗岩など他の石材もある。

抜け跡 7 では、底の一部が被熱して多量の木炭が分布しており、根石も拳大以下に碎かれていた。礎石を移動させた後に、抜け跡に瓦を詰め込んだ例が、抜け跡 3 と 5 の 2 カ所にみられた。抜け跡 5 内からは軒丸瓦 V 類も出土している。

礎石抜け跡の心々距離は、桁行で 3.5m、梁間で 3.0m を測る。また、南端の抜け跡から基壇縁までは 1.8m である。なお、抜け跡 4 の東側にだけは礎石抜け跡が存在していない。

〈礎石〉

調査区内からは第 3 期建物に属すると思われる礎石が 4 個出土したが、いずれも原位置をとどめておらず、完全に移動させられていた。3 個は基壇上に穴を掘って落とし込まれており、残る 1 個は軒先に穴を掘って落とし込まれていた。

礎石はいずれも上面が平坦に仕上げられており、柱座は造り出していない。基壇上最も北側の礎石は二つに削られた後、抜け跡 4 のすぐ西側に穴を掘って根石とともに落とし込まれていた。礎石は側面を上にして穴にはまっており、厚さは 55cm を測った。次に、その南側に位置する礎石は、柱を据えた面を上にしたそのままの状態で、抜け跡 5 のすぐ西側に穴を掘って落とし込まれていた。礎石は結果的に基壇検出面から数 cm 頂を出している。そして、その上面は 0.6 × 1.2m でやや三角形に近く、中央が若干くぼんでいる。抜け跡には根行が残っており、さらにそこに瓦が詰め込まれていた。基壇上最も南側の礎石は摸索を受けた基壇西端部に存在するが、0.85 × 1.1m でやや角張った楕円形に近い。もとの位置は不明確だが、削平された南西端部か、抜け跡 9 の位置にあったものであろう。柱を据えていた面を上にして傾いた状態で出土している。いっぽう軒先の礎石は、調査区南壁にかかる出土した。上面はやや平坦で東西幅約 80cm を測るが、他の礎石と比較すると隆起が目立っているため、本来の上面ではない可能性もある。以上の 4 点の礎石はすべて流紋岩製である。

これらの礎石が動かされた時期であるが、抜け跡 4 と 5 の礎石は出土状況や土層が似ており、第 3 期建物廃絶後、基壇検出面が生活面として利用されていた時期に動かされたものと推定される。また南西端の礎石と軒先の礎石は上層が新しいため、水田耕作を行い始めて以後の段階に現在の位置まで移動させられたものと思われる。

〈基壇上の柱穴〉

基壇上からは多数の柱穴が検出された。柱穴はおおむね直径 50cm、深さ 10~20cm 内外であり、埋土はしまりの弱い灰色土である。これらは建物を建てる際の作業用足場穴等であると思われるが、後に基壇が検出面に近い深さまで削平され、作業面として利用されることになるため、その段階の遺構も混在している可能性がある。

抜け跡 5・6・7 の東側に 1 つずつ存在する柱穴は、ほぼ 3.4m 等間で一列に並んでいる。また、その南側の柱穴群のなかにも対になるものが見受けられる。抜け跡 6 に接している柱穴の埋土上位からは、環状の用途不明の鉄製品が出土している。また、抜け跡 9 の南西側にある柱穴は、底部が熱を受けて赤化している。

《基壇の化粧》

基壇の化粧として、径15~20cmのやや横長の石を中心として列石を築いている。列石は平坦な面を外側に向けて横一列に並べられている。おおむね1段目までしか残存していないため、その上部がどのようになっていたかは不明である。ただし、東西でかなり高低差があるため、西側の一部では2段積みになっている部分もある。また、東半では列石はほとんど残っておらず、抜け落ちてしまっている。西半では化粧の石の下側に瓦を包含する灰褐色土がみられるが、これは第2期建物南辺の堆積土を裏込上としてその上に基壇化粧を構築したことによるものであろう。なお、化粧に使用されている石はやはりほとんどが流紋岩である。

《雨落溝》

雨落溝の遺構は内側と外側の2箇所にみられる。

内側の溝は基壇南辺に接している細い溝で、部分的に北側の肩がない箇所もあり、かなり基壇に近接していることから、前段階の第2期礎石建物に関する雨落溝である可能性もある。幅50cm以下で、深さは5cm程度と小規模であり、底には薄く灰色砂が堆積している。砂層中からは若干の土器細片が出土した。調査区東側と西側では約26cmの高低差がある。

外側の溝は6~7tロング南壁にかかるおり、検出幅は最大で70cm、深さ5~9cmとやや規模が大きい。埋土は灰色土であり、遺物の出土量が比較的多い。底には木炭・土器などが面的に堆積していた。瓦溜りはみられなかった。なお、東方建物周辺で出土する瓦は斜倒的に縦目叩きのⅢ類が多い。

《建物南側の掘形》

建物基壇の南側、外側の雨落溝のある位置には、掘立柱の掘形等が存在する。その中には明らかに掘立柱の掘形であると分かるものもあるが、一部にやや規模が大きく礎石の根石状に石が詰まっているものがあるため、これらに限って単に掘形1~5と呼称しておく。

掘形1~3は東西に並んでおり、1.85m等間を測る。一方掘形3~5は南北に並んでおり、おおむね2.4m等間である。これらの掘形によって構成される建物の主軸は真北から若干東にふっており、企画性を持って建てられていたことがうかがわれる。掘形1~3は長径90cm程度の楕円形で、底部には径10~40cmの石が存在している。掘形1の下部からは完形の土師質小皿が出上している。これらの掘形の埋土は非常に硬くしまっている。その他の柱穴は足場穴等であると思われる。

④. 第4期（盛土と溝）

第3期の基壇南側の化粧を埋め殺しにした状態で盛土が行われている。盛土は基壇南端から幅4.3mにわたって存在しており、その南側には溝が存在する。盛土は褐色土がブロック状に混じる灰色土の上に、しまりの弱い緑灰色土を積み上げられており、崩落した基壇化粧石や瓦を包含している。その中には軒丸瓦V類も含まれている。盛土の南端部には人頭大の石が3箇所に残存しているが、これらは溝の北肩にのみ横一列に配されていたものと思われる。あたかも建物に伴う盛土のようであるが、第3期礎石建物との関係は不明である。なお、38tロングでは盛土の上面で柱穴と窓跡が検出されている。

溝は、第3期東方建物の基壇化粧とほぼ平行しており、真東に対して3°程度南にふっている。溝の幅は約1.4m、深さは25cm程度で、底は東から西に向かってゆるやかに傾斜している。肩の形状は明瞭であり、底部はほぼ平坦面をなしている。溝内の埋土には木炭が多量に混じり、瓦・土器が多数出土した。出土した瓦のなかでは平瓦ⅢC類・ⅢA類などが目立っている。

この盛土と溝は、1979（昭和54）年の調査でも確認されている。

⑤. 東方建物周辺の状況

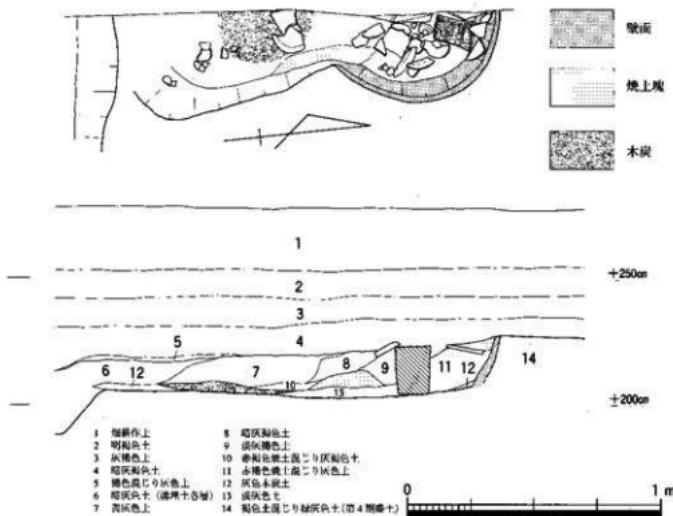
《38トレチ》

第4期の溝については前述したが、その溝の南側では多数の柱穴が検出された。その多くが地山上面で検出されている。これらは数次にわたって建て替えられた建物・施設の柱穴であると思われる。その性格については様々なものがあると思われるが、組み合わせは判然としない。しかし、ほとんどの柱穴が径20~30cmであり、工房や生活に関連した比較的小規模な建物・施設群であったと思われる。38トレチでは、東壁にかかる柱穴から軒丸瓦V類の完形に近い個体ほか多数の瓦が出上している。

《38トレチの窯跡》

第4期の盛土上面において、トレチ西壁に半分かかった状態で土師質土器を焼成したと思われる窯跡が検出された。窯跡は当初、赤褐色の堅い壁面の輪のなかに焼土が詰まった焼成室だけが露出していたが、掘り進んでいくうちに灰原の存在も確認された。

焼成室の平面形状は円形に近く、床面で南北約50cm、東西検出幅25cm、上端で南北約65cm、東西検出幅35cmを測る。壁面は床から約20cmの高さまで残存しているが、床から約10cmのあたりまでは垂直に近い角度で立ち上がっており、そこから一旦外反して再び垂直に近い立ち上がりを見せている。壁面は赤褐色でレンガのように堅くしまっており、厚さは2cm程度であるが、その周縁部はほとんど変色していない。床面はほぼ平坦であり、そのまま灰原へとつながっている。床面の中央には方形の石が据えてある。石は、わずかに一部分しか確認できなかったものの、かなり整った方形であり、上面と灰原側の面は被熱によって完全に赤化しているが、側面はほとんど赤化していない。石の周囲からは土師質土器の椀・皿・平瓦ⅢB類などが出土した。



第20図 38トレチ窯跡平面・断面図 (1/20)

焚口は最も狭くなっている部分で、東西検出幅18cmを測る。焚口周辺には赤褐色の焼土ブロックがみられたほか、壁面も赤褐色に焼けていた。灰原は、長さ90cm程度、検出最大幅40cmであり、末広がりに広がった後に少し狭くなり、そのまま溝の北肩へとつながっている。床面には多量の木炭がみられる。

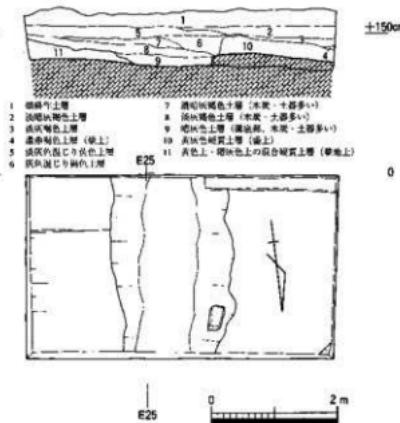
窓内から出土した土師質土器は溝の埋土から出土する土器よりも新しく位置付けられるものであり、後述するように、寺院内の主要伽藍が廢絶した後に営まれた窓跡であると考えられる。

《5トレンチ》

東方建物の西側にある5トレンチでは、南北方向の溝が検出された。塔東端からこの溝の中心線までの距離は18.6mを測る。溝の方向は真北から4°程度東にふれている。溝の幅は2m弱で、深さは10~15cm、底部は平坦でしっかりした形の溝である。埋土は木炭・瓦・土器を多量に包含する灰色土層である。

溝の東肩は黄色土と暗灰色土がブロック状に混じる硬質な整地上である。整地上は、東から西に向けて急な斜面を形成しているが、これは東方建物のある東側との地山地形の高低差を解消するために積まれたものと思われる。ちなみに溝の東肩部分、整地上上面において軒丸瓦VI類が出土している。

溝の西肩は、地山の上に黄灰色土または明灰色土が積まれており、整地上というより建物等の基底部であるかのような印象を受ける。また、溝の西肩部分には長径40cmの長方形の石が1つ存在する。盛土状の黄灰色土または明灰色土は25~30cmの厚さであり、西側になるとほど削平されて低くなっているが、最も残りのよい東端部分と溝の底部との比高差は約50cmである。はっきりと判明していない東側回廊の基底部であると推定することもできるが、西側の回廊と比較すると塔から若干遠くなってしまうため、ここではその可能性を指摘するにとどめたい。また、その上面にあたるトレンチ西端部には赤褐色の焼土が存在していた。



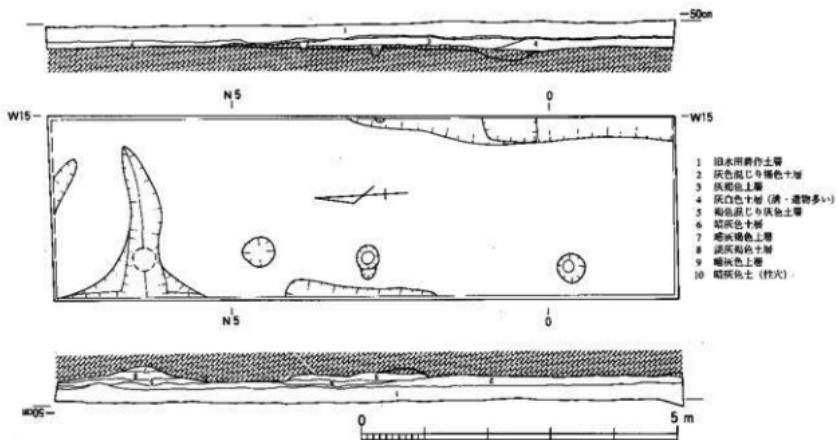
第21図 5トレンチ平面・断面図 (1/80)

4. 回廊

回廊については、明確にそれと断定できるような遺構を確認することができなかった。後世に削平されたとも考えられるが、あるいはきわめて簡単な施設だったのかもしれない。このたびの調査では、塔西側(8トレンチ)の柱穴、金堂北側(39・40・10トレンチ)の溝、金堂東側の柱穴(37トレンチ)などが回廊に関係していると推定した。以下、関連するトレンチごとに状況を述べる。

《8トレンチ》

塔西側の8トレンチでは全体が地山まで削平されていたが、地山を掘りこんだ柱穴を3カ所に確認した。南北に並ぶ柱穴は径40~45cmの円形で、深さは約30cm、柱間は3.2mを測る。また、北側の柱穴よりも北方約3.5mの位置は、ちょうど溝状に後世の削平を受けていたため柱穴の有無は確認できなかつた。いっぽう東側の柱穴は、東壁に半分以上かかった形で検出された。前述した北側の柱穴と



第22図 8トレンチ平面・断面図 (1/80)

の間隔は、2.2mである。トレンチ西壁側の溝状造構の埋土は比較的新しいが、東側の溝は寺院に関係しているものと思われる。この溝は39トレンチで検出された溝との位置関係から回廊に相当する施設の内側を走る南北溝の西肩であると推定される。溝からは軒丸瓦I類が出土しているが、あるいは塔の屋根瓦が転落したものかもしれない。ちなみに南北の柱穴の上軸はN2.4°Eであり、南北溝の主軸と一致する。

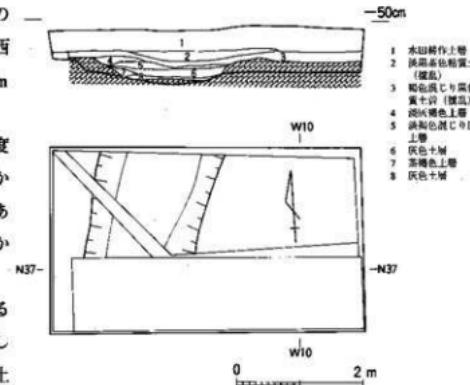
この柱穴群が回廊に直接伴うものであると断定することはできないが、トレンチを設定した水田が「ツイイジタ」という字名で呼ばれており、南北に細長く伸びる形状であること、また、他の施設との距離、位置関係をみても適当な位置にあることなどから、回廊に相当する施設に関係するものであったと推定した。しかし、この柱穴だけをもって回廊が掘立柱であったか否かを断定することはできない。

《39トレンチ》

8トレンチの北方、金堂の北西側に位置する39トレンチでは、南北方向の溝を検出した。溝は、真北に対し13°程度東にふっている。8トレンチの溝とつなぎ合わせて考えると、金堂西端部から溝の中心線までの距離は5.5m程度になると考えられる。

溝の幅は1.7~2.1m、深さは25cm程度で、底は南から北に向かってゆるやかに傾斜している。肩の形状は明瞭であり、底部はほぼ平坦面をなし、しっかりした形の溝である。

溝内の埋土は灰色層からなっているが、溝内からは遺物はほとんど出土しない。平瓦I-E類などがわずかに出土している。

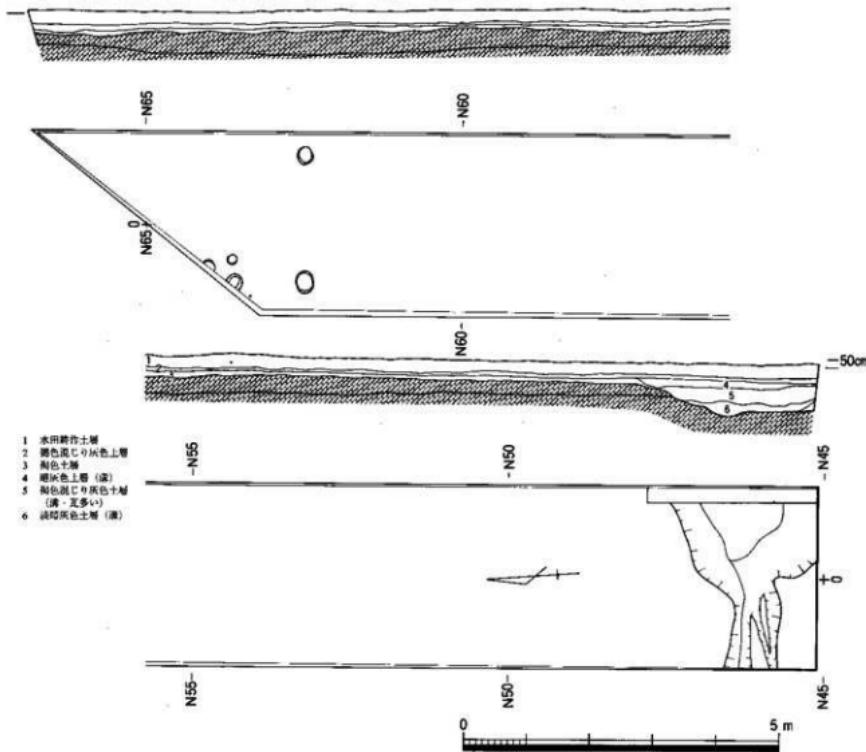


第23図 39トレンチ平面・断面図 (1/80)

トレンチ全体が地山まで削平されているため溝以外の遺構は確認されなかったが、前述の8トレンチの成果と考え合わせると、回廊に相当する施設の内側（東側）を走る溝であると推定される。

《10トレンチ》

金堂の北側に位置する10トレンチでは、南端で東西方向の溝を検出した。金堂北端部から溝の中心線までの距離は14.5m程度である。南側の肩が調査区外に伸びているため全体の幅は不明であるが、調査区での幅は東側で2.6m、西側で1.45mを測る。深さは東側で30~45cm、西側で10cm程度であり、地形の傾斜に逆らって東半部だけが不自然に深く、幅広くなっている。肩の形状は明瞭であり、底部は平坦面をなす、しっかりした形の溝である。溝内の埋土は、地山の上に淡暗灰色土層をはさみ、その上にやや多量の瓦と若干の土器小片を包含する灰色土層が存在する。この埋土からはコンテナ2箱分の瓦が出土している。平瓦で最も目立つのはⅢ類であるが、ⅠB類・ⅡB類なども混じっている。40トレンチの溝と同じく回廊施設の外側（北側）を走る溝であったと推定される。したがって回廊に相当する施設は、ちょうど現在東西道路がある位置で東西に走っているものと考えられる。



第24図 10トレンチ平面・断面図 (1/80)

《40トレンチ》

10トレンチの西方に位置する40トレンチでは、東西方向の溝の南肩を検出した。位置、埋土の状況から10ト

と同一の溝と考えてよいであろう。溝の形状は北方に向かってさらに傾斜しているため、最も深い部分は調査区内にあると考えられる。

溝の調査区内での幅は1.7~1.9m、深さは25cm程度で、底は地形に従って東から西へと深くなっている。また、肩の形状はゆるやかで、そのまま北側へと傾斜している。

溝内の埋土は、地山の上に淡黄灰褐色土層をはさみ、その上に瓦の密度のやや高い灰茶褐色土層が存在する。出土する瓦はⅢ A類のほか、Ⅲ B類・Ⅱ B類などもある。

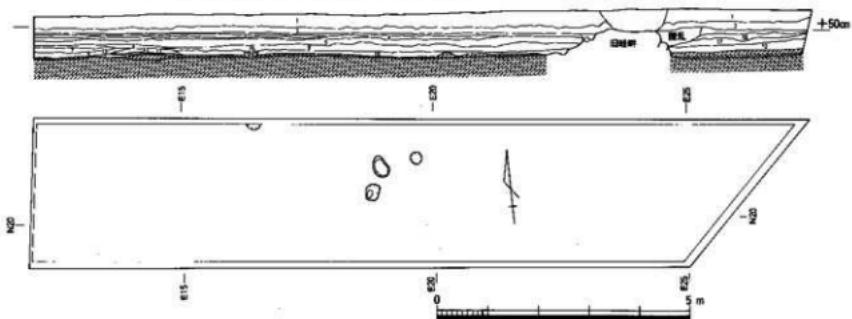
回廊施設の外側（北側）を走る溝であったと推定される。

また、40トレンチ南端部でも東西に走る浅い溝の北肩が検出された。溝の調査区内での幅は30cm程度、深さは15cm程度で、北側の溝よりも高い位置にある。埋土は灰色砂層であるが、肩や底の形状は凹凸が激しくやや不定形で、寺院存続期の遺構であるかどうかはわからない。

《37トレンチ》

西側の回廊に対して、東側の回廊はさらに不明確である。37トレンチでは、柱穴が地山上面で4カ所に確認された。金堂東辺からの距離は、最も近いもので6.7m、最も遠いもので9.8mであり、位置的にみて西側の回廊と対称に近い位置にある。そのため回廊または回廊に伴う足場の柱穴である可能性もあるが、西側とは異なり、周囲に溝等の遺構は存在せず、ただ平坦な地山面に柱穴があるだけである。柱穴は直径30~40cm程度で、東端のものだけが直径25cmとやや小さい。深さは30~43cmを測る。

- | | | |
|--------------------------|-----------------------|---------------|
| 1. 丸棒土 (グラウンド土) | 7. 淡黄褐色砂質土層 (木炭・瓦片あり) | 13. 淡褐色粘質土層 |
| 2. 田植耕作土層 | 8. 淡灰褐色土層 | 14. 白灰土 (竹穴) |
| 3. 明灰褐色土層 | 9. 暗灰褐色土層 (遺物多い) | 15. 流灰土層 (柱穴) |
| 4. 灰色粘質土層 | 10. 淡青褐色砂質土層 (墨土) | 16. 明白褐色粘質土層 |
| 5. 初色濃じり茶色粘質土層 | 11. 淡茶色土層 (砂地) | 17. 白褐色土層 |
| 6. 淡色濃じり茶色粘質土層 (金堂瓦礫り縁部) | 12. 黑褐色粘質土層 | 18. 褐色砂質土層 |



第26図 37トレンチ平面・断面図 (1/100)

5. 門

中門、南門の存在が想定される寺域南端部分は、J A笠岡吉田支所の敷地があるため調査していない。後述のように寺域南端にあたると考えられる位置に設定した16トレンチでは、時期不明の古道が検出された。古道は現在の水田畦畔に沿うようにトレンチ内で東にカーブしていたが、昭和初期まで村道として利用されていた段階でも、やはり同じようにカーブしていたらしい。この古道は寺院が存続して

いた段階から存在していたと推定され、そうであるとするならば、道は南門の外側を通っていたと考えるのが妥当であろう。したがって、かなり消極的な理由から推定せざるを得ないが、現在の東西道路が古道の位置を反映しているとすると、南門はちょうどその北側、J A敷地の南端付近に存在するということになろう。また、かなり以前のことになるが、農協（JA）が塔の南側にあたる敷地内において木造の便所建設を計画し、便槽を掘っている時に偶然柱根が1ヵ所確認されている。柱根は、柱の根本部分だけが遺存していたものであり、直径は推定50cm程度と思われる。柱根の具体的な出土状況は今となっては不明であるが、かなり太く、掘立柱であったとしても比較的規模の大きい施設に使用されていたと考えてよいであろう。位置的にみて門または回廊に相当する施設に伴うものである可能性もある。この柱根については付載1において後述している。

6. 築地と寺域の四至

寺域を画する施設を確認するために多数のトレチを設定したが、築地の存在を確認することができたのは西側のみであった。特に24トレチでは、明確に築地基底部を検出することができた。以下関連する各トレチごとに、寺域を画する施設周辺の状況を述べる。

①. 築地と寺域西端部の状況

24トレチにおいて、築地の基底部が検出された。この築地の西側にあたる位置には、かつて南北道が走っていた。この古道は、現在では細いあぜ道状に名残をとどめるのみであるが、昭和初期頃までは地域の幹線道路として利用されていたといい、寺院が存続していた時点からすでに何らかの形で利用されていた道であったと想われる。

《24トレチ》

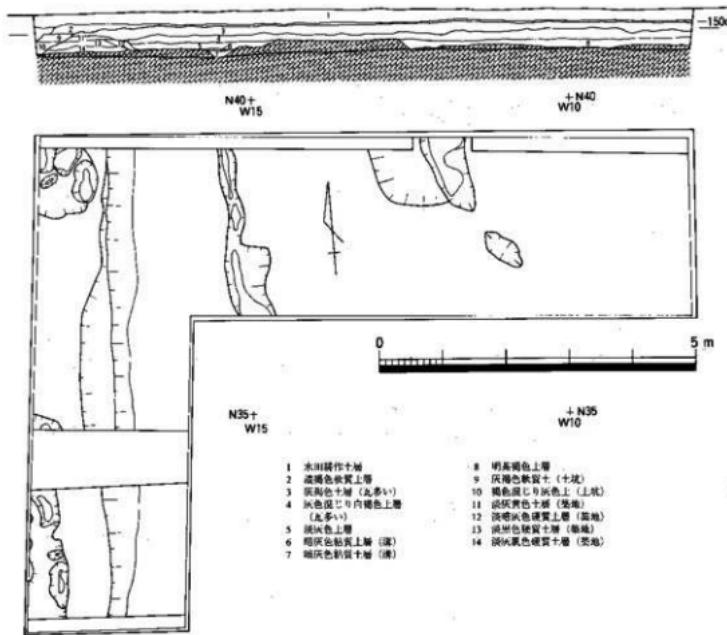
南北に伸びる築地基底部の東半部を確認した。その調査区内での方向は、ほぼ真北ラインに沿っている。築地基底部は地山上に直接築かれており、調査区内での幅は上面で1.0～1.3m、残存高25cmを測る。基底部の構造は、淡灰肌色土・淡黒色土・暗灰黄色土の3層の土層を版築状に積み上げ、その表面は基壇化粧のようなかたちで淡灰色土の硬質なを使って押さえている。この基底部の東側は、幅約2.3mにわたって浅い南北溝を形成している。溝の深さは10cm程度である。さらにその溝の中に幅30～40cm、深さ10cm程の小さな溝がある。築地基底部の上面には土壤が2ヵ所で検出された。いずれも底部は凹凸が激しく、形も不定形な土壤である。北側の土壤は北壁・西壁にかかるのであり、調査区内で南北1.1m、東西0.9m、深さ27cmである。いっぽう南側の土壤は南壁と西壁にかかり、南北3.4m、東西0.7m、深さ13cmを測る。両者の間隔は3.2mである。トレチから出土する平瓦は繩目叩きのⅢA類が中心であるがⅢB・ⅢC類のほか、ⅠC・ⅠE・ⅠG類などもある。また、土壤内からはⅢC類が出土している。他の場所ではほとんど見られない小形の瓦も数点出土した。

《25トレチ》

水田耕作土直下で地山が出土した。遺構・遺物は出土しなかった。

《4トレチ》

築地基底部の西端部と浅い溝が検出された。基底部幅は調査区内で上面0.6m、下端1.6mで、残存高25cmを測る。残存する基底部は盛り上ではなく、地山を削り出したものである。基底部の西側には、幅約2.5mの平坦な部分をはさんで浅い溝が存在する。溝は幅1.7～1.9m、深さ15cm程度であり、遺物はほとんど出土しなかった。溝の西側も、やはり平坦な地形である。溝の周囲には深さ10cm未満の浅いくぼみが確認された。トレチから出土した平瓦はⅢA類が多い。



第27図 24トレンチ平面・断面図 (1/80)

《16トレンチ》

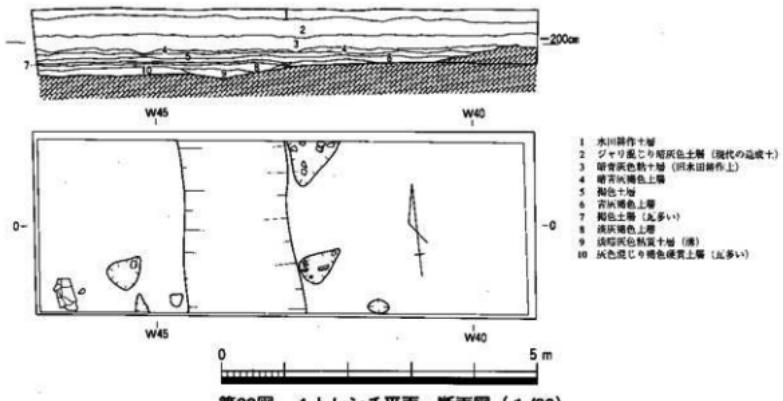
旧道が東に向かってカーブする部分が検出された。この部分での道のカーブは、やはり昭和初期にも見られたといい、かつての古道が南門に向かってL字形にカーブしていた名残ではないかと考えられる。しかし、ここで確認された旧道は、旧耕作土直下で検出されたものであり、新しい時期のものである可能性が高い。道の幅は約1.2mで、両端に等間隔で木杭が打たれている。道の両側はさらに深く削平されており、道部分だけが盛り上がったように残っている。築地関連遺構が検出されるべき位置であるが、かなり深く削平を受けていたため、何ら検出されなかった。

② 寺域北西端部の状況

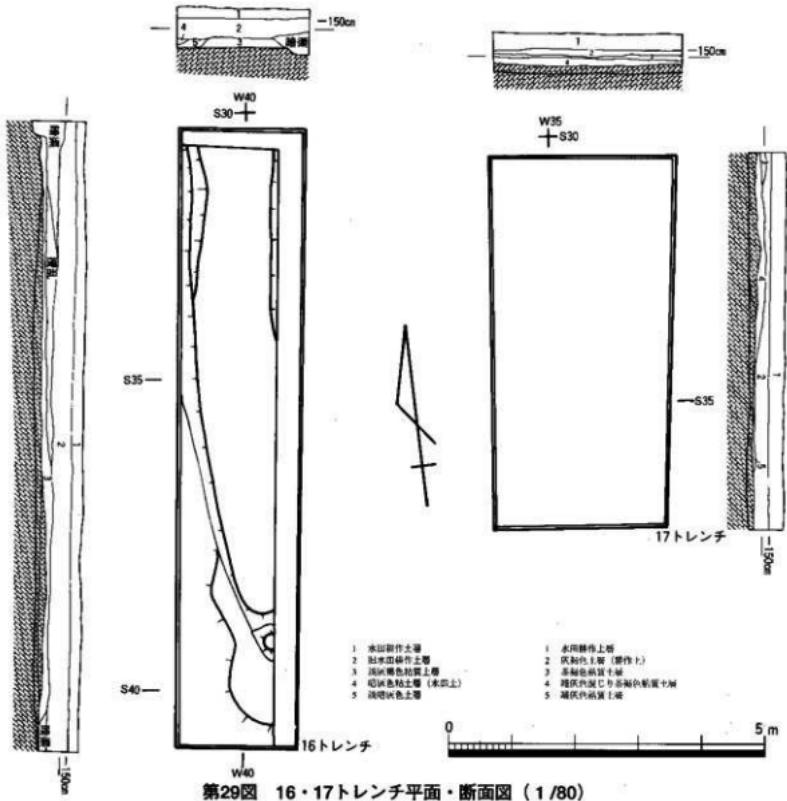
寺域北西端部では、瓦の廃棄場所や柱穴群が検出された。

《13トレンチ》

地山の上で南北溝と不定形な土壤を検出した。溝は、幅0.8~1m、深さ20cm程度で南北に走るが、途中でL字形に曲がり西へと続いている。西に折れ曲がる部分で溝はやや広くなり、幅1.7m、深さは最大で37cmになる。位置的にみて、築地内側（東側）の溝である可能性があり、その場合、溝の西側が築地基底部ということになる。基底部は、地山を削り出してつくられており、調査区内での幅約1m、上面に24トレンチと同じような不定形土壤と柱穴を伴う。不定形土壤は西壁にかかっており、南北2.6m、東西0.7~0.5m、深さは最大で約15cmを測る。柱穴は、明確なものは3ヵ所にあり、直径30cm程度のものである。また、溝の東側にも南北1.7m、深さ約18cmの土壤がある。



第28図 4トレンチ平面・断面図 (1/80)



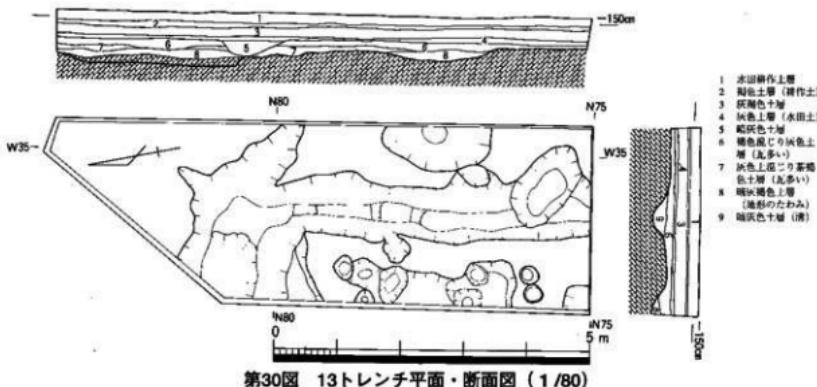
第29図 16・17トレンチ平面・断面図 (1/80)

溝の埋土は暗灰褐色土で多量の瓦を包含しているが、特に溝が西に折れ曲がるコーナー部分では、投棄された瓦が大量に出土した。その出土量はコンテナ15箱に及ぶ。出土した瓦のうち、平瓦ではⅢ類が大部分を占めている。さらに、溝の最も深くなる西壁部分からは、径20~70cmの石5つが積み重なった状態で出土した。瓦と同じく投棄されたものであると思われる。ちょうど南北の築地の北端部分にあたり、築地が途切れた所で内側の溝が寺域外へ向けて流れ出しているのであろう。

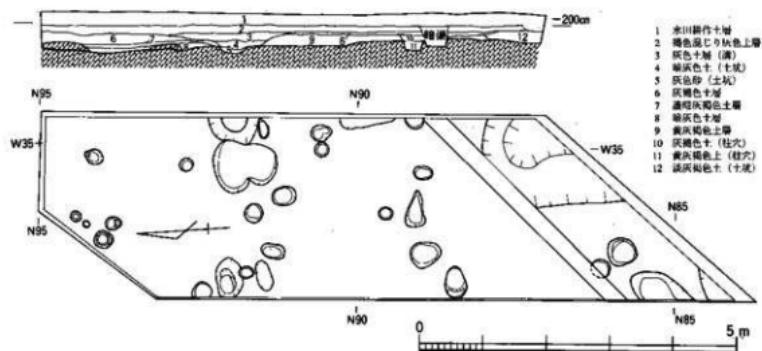
《14トレンチ》

浅い東西溝と柱穴群を検出した。溝は最大幅2m、深さ10cm程度である。位置的にみて寺域北限に関連する遺構である可能性もあるが、非常に浅い溝であること、他の遺構よりも上層で検出されたことなどから、むしろ寺院廃絶後に形成された可能性が高い。埋土からは、若干の瓦細片が出土した。

柱穴群は溝よりも1層下層で検出されており、径20cm程度の小形のものが多い。寺域の外側ではあるが、北からの入口にあたる位置であることから、何らかの役割を担った掘立柱の簡単な施設が存在していたものと考えられる。トレンチから出土した平瓦はⅢ類が多い。



第30図 13トレンチ平面・断面図 (1/80)



第31図 14トレンチ平面・断面図 (1/80)

③. 寺城北端部の状況

北側の築地は検出されなかったが、水田畦畔が東西に一直線に並んでいる部分で東西溝が検出された。このことから、水田畦畔が何らかの施設の痕跡であると想定される。

《11トレチ》

トレチ北端で、溝の南肩が検出された。溝の調査区内での幅は北端で0.5m、南端で1mであり、深さは約7cmを測る。底部は東から西に傾斜するが、北端部だけが深さ25cmであり特に深くなっている。肩の形状は明瞭で底部は平坦面を形成する。しっかりした形の溝だが、水田耕作による削平が地山まで及んでいたため耕作上直下で検出されており、明らかに寺院に伴う溝であるとは言い切れない。しかし、寺城北端を画す施設に関する可能性がある唯一の遺構である。溝の埋土は淡灰色であり、出土遺物は少ないが、軒平瓦ⅡA類、平瓦ⅢA類などが出土している。溝の南側には、後述する掘立柱建物があり、少なくともこの辺りまでは寺城に含まれるものと思われる。

《12トレチ》

11トレチの北側に設定した12トレチでは遺構は出土しなかった。トレチ南半では削平が地山まで及んでいたが、もともと地形が北に傾斜していたため、北半では包含層が遺存していた。斜面地の包含層からは比較的多量の瓦が出土した。おそらく寺城外に廃棄された瓦であろう。この斜面地と寺城北方の低丘陵との間は、東方の山地から流れ出る水の流路にあたっており、現在でも非常に水捌けが悪い。

④. 寺城東端部の状況

東側では、寺城を画す遺構を確認することができなかった。しかし、西側、北側の状況をみると、やはり、水田畦畔が南北一直線に並んでいる部分が何らかの施設の痕跡である可能性を想定してもよいと思われる。ただし、八幡神社の丘陵が寺城南半にくい込むように存在するため、寺城の形状を推定するのがさらに困難になっている。しかし、各トレチの状況から、寺城は地形に合わせて南にすばまる形で設定されていたと推定している。

《2トレチ》

土壤を検出したが、トレチ北側の部分がかつての水田耕作のため大きく削平されていたため、土壤の検出範囲は限られたものになってしまった。推測にすぎないが、この土壤は東西方向の溝であった可能性もある。土壤は南北0.9m、東西の検出幅0.7m、深さ約20cmであり、埋土は暗灰色粘質土である。

トレチの中を斜めに走る石列は、旧水田境の石垣である。また、南壁にかかった石群は、上層の包含層において同一平面上に散乱していたものであり、寺院と直接係わるものではなかろう。

トレチ南半において地山の上に堆積する黒灰色土は、多量の木炭と土器小片を包含していた。出土した上器の内容は土師質楕・皿が大部分を占めるが、須恵器の壺・甌なども混じっており、その出土量はコンテナ1箱に及んだ。しかし、ほとんどすべてが小破片であったため、近辺に土器などを廃棄する場があったものと推定した。トレチから出土した平瓦はⅢC類が中心である。

《3トレチ》

水田耕作土状の水分を含んだ粘土によって1m以上地上げされていた。遺構は確認できなかった。

《30トレチ》

トレチ端部に土壤がかかっているほかは、明確な遺構は確認されなかった。2トレチと同じく木炭や瓦・土器の小片を包含する灰色包含層があった。土壤はトレチの北西隅に30cm程度かかっているのみである。埋土は灰色層で、遺物は少ない。

《31トレント》

明確な遺構は検出されなかったが、土壤状に窪んだ地形のたわみが何ヵ所かにみられた。列石が検出されているが、上層の擾乱土層中のものである。地山地形は、トレントの西側でやや低くなり、ゆるやかな段差を形成していた。やはり木炭・土器小片を多量に包含する淡暗灰色粘質土があった。

《29トレント》

耕作土と若干の堆積層を除いた時点で地山の岩盤が検出された。遺物はほとんど出土しなかった。

《20トレント》

現在北東から南西方向にはしつている道に平行するように、低い階段状の地形が2段みられた。下(西側)の段は地山を削って作り出したもので、8cm程度の段差であるのに対し、上(東側)の段は明褐色の整地土を盛った後に形成されており、5~9cm程度の段差となっている。ふたつの段の間隔は、1.8~2mである。この段状地形がいつの時期に作られたものかは判然としないが、寺院に伴うものであるとするならば、寺域は地形に合わせて南にすばまる形で設定されていた可能性が高くなる。トレントからの出土遺物は非常に少ない。

《19トレント》

現在北東から南西方向にはしつている道に平行するように、わずかに地形の盛り上がる部分がみられた。これは、黄灰褐色の盛土と思われる土を幅約1m、高さ約10cmにわたって積んだもので、北東から南西へと伸びている。盛土の北側と南側はゆるやかに傾斜しており、それぞれ調査区外へと向かって低くなっていく。北側の傾斜は南側に比べると急であり、20トレントで確認された段状地形の上の段の延長上に位置する。トレントからの出土遺物は非常に少ない。

《18トレント》

特に遺構は検出されなかったが、トレント南端部で地形が急激に傾斜していた。一直線に伸びる溝と円形の穴は現代の暗渠である。トレントからの出土遺物は少ない。

④ 寺城南端部の状況

寺城南限については、門を確認しておらず、調査できる位置も限定されるため、最も不明確な状況である。前述したように、16トレントにおいて確認された南北道の東へのカーブが唯一の手掛かりと言つてよい。

《1トレント》

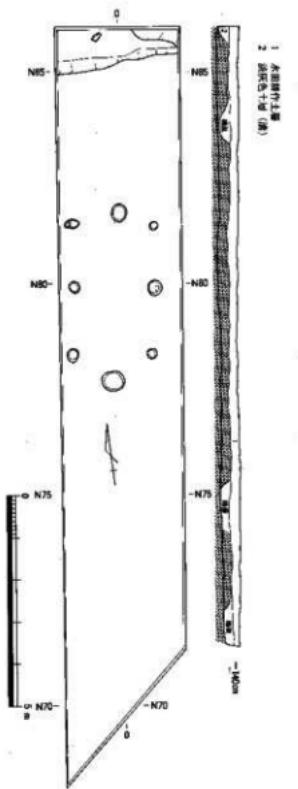
特に遺構は検出されなかった。トレントの中ほどに地山地形の段がみられたが、これは旧水田の形状を反映しているものと思われる。段の上側は地山まで削平を受けていた。瓦の出土量はやや多い。

《15トレント》

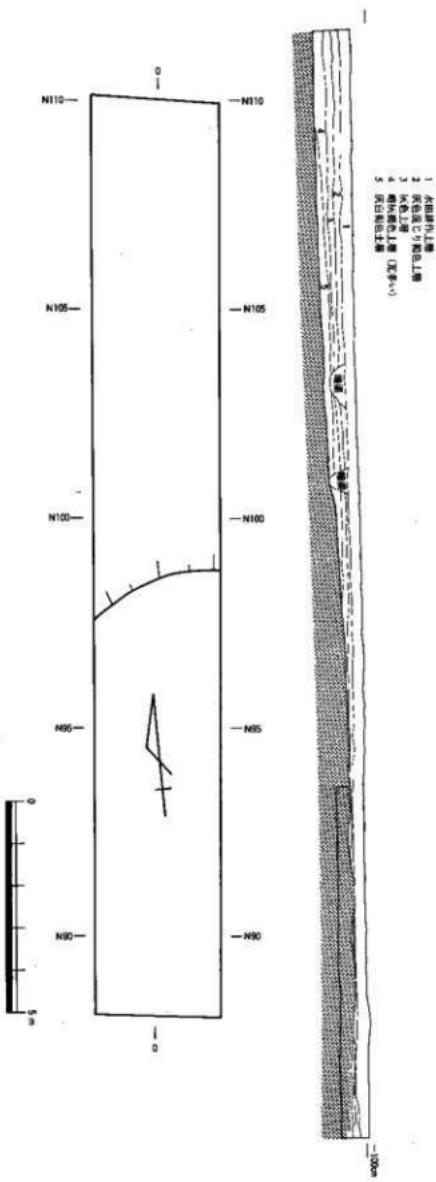
塔の真南の東西道路南側にあたる位置に設定したが、特に遺構は検出されなかった。地山地形が南から北に向けて比較的ゆるやかに傾斜しており、さらにトレント南端部分では溝状に窪み、底部は若干の平坦面を形成していた。平坦面の幅は1.5m程である。瓦の出土量はやはり多く、平瓦ではⅢA類のほかⅠD類も目立つ。

《17トレント》

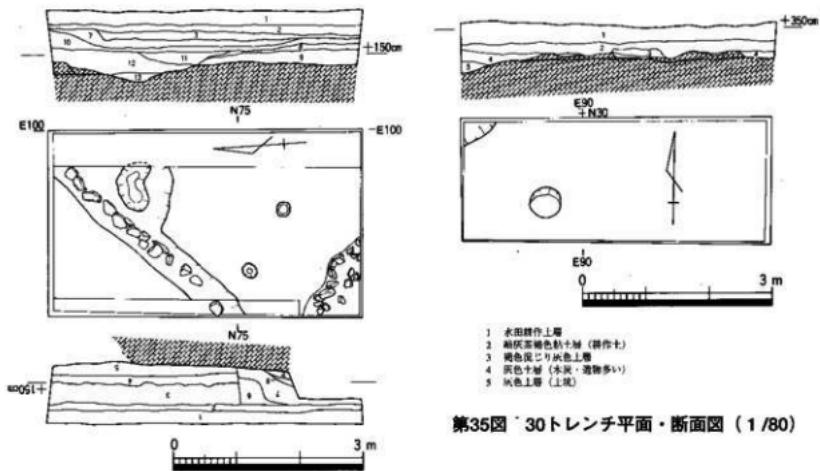
遺構は全く検出されなかった。1976(昭和51)年の調査区はこのトレントの東隣りにあたるが、やはり遺構は検出されていない。瓦の出土量も少ない。



第32図 11トレンチ平面・断面図
(1/120)



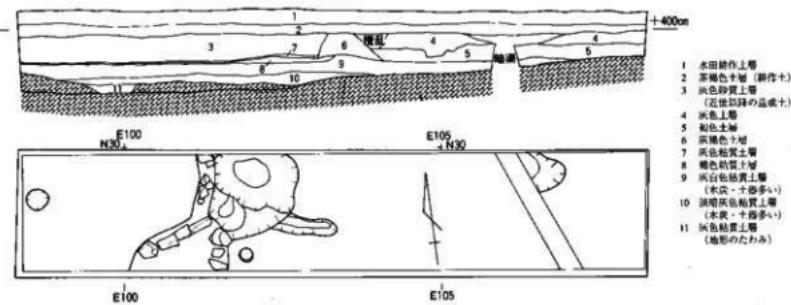
第33図 12トレンチ平面・断面図 (1/120)



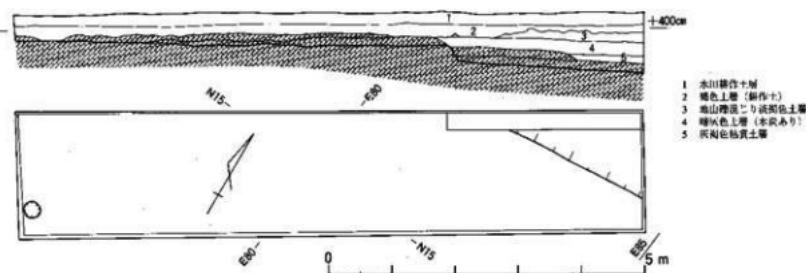
第35図 30トレンチ平面・断面図 (1/80)

- 1 水田耕作上層
- 2 黄褐色土層 (耕作土)
- 3 黄褐色土層 (近底土)
- 4 褐黃色土層 (底土上)
- 5 黑色粘土 (水田耕作土)
- 6 灰黑色土層
- 7 褐色風化土層
- 8 褐色風化土層 (土苔多い)
- 9 褐色風化土層 (土苔多い)
- 10 灰色斑じり褐色土層
(底土上に土苔あり)
- 11 黑色土層
- 12 褐色土層

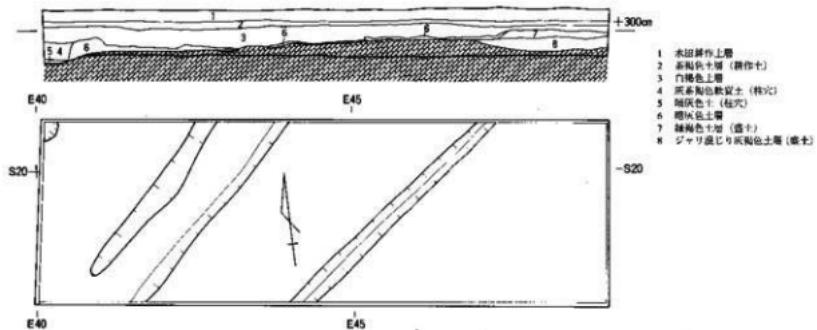
第34図 2トレンチ平面・断面図 (1/80)



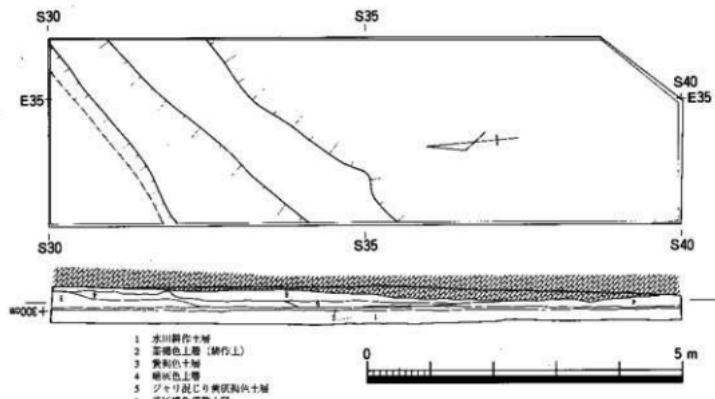
第36図 31トレンチ平面・断面図 (1/80)



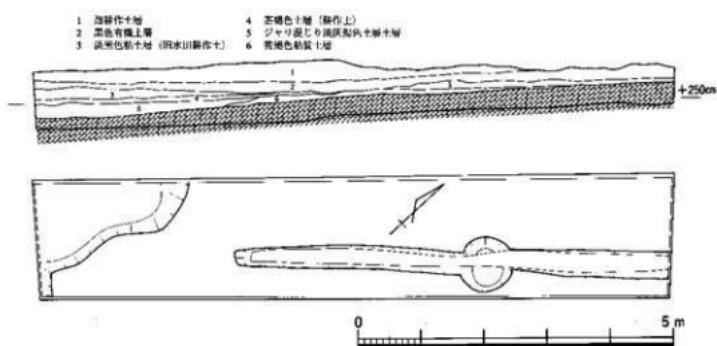
第37図 29トレンチ平面・断面図 (1/80)



第38図 20トレンチ平面・断面図 (1/80)



第39図 19トレンチ平面・断面図 (1/80)



第40図 18トレンチ平面・断面図 (1/80)

7. 挖立柱建物と溝

掘立柱建物・施設は、東方建物の南側（6・7トレンチ、38トレンチ）、寺城北半部（10トレンチ、11トレンチ、28トレンチ）、寺城北西端部（14トレンチ）などで確認された。しかし、全体のプランや規模がわかるものはあまりなく、詳細については不明な点が多い。また27トレンチでは単独の溝が確認されている。

①. 東方建物南側の掘立柱建物

東方建物の南側（6・7トレンチ、38トレンチ）では、多数の柱穴が検出された。多くが地山上面で検出されているが、38トレンチ東西溝の北肩にある柱穴だけは、第4期の盛土上面で検出されている。これらは数次にわたって建て替えた建物・施設の柱穴であろう。その性格には様々なものがあると思われるが、組み合わせは判然としない。しかし、ほとんどの柱穴が直径20~30cmの小型のものであることから、生活関連、あるいは工房的な性格を有する比較的小規模な建物・施設群であったと推定される。38トレンチでは、東壁にかかった柱穴から軒丸瓦V類の完形に近い個体ほか多数の瓦が出土している。

②. 寺城北半部の掘立柱建物

11トレンチ、寺城北限の溝から約3m南側で1棟の掘立柱建物が検出された。柱穴の心々距離は南北2間で3.05m、東西1間で1.85mを測る。南北両妻側の外側には、1本の独立した棟持ち柱を備える。柱穴はおおむね直径25cm程度のものであるが、南北に張り出した棟持ち柱掘形はひとまわり大きく、直径35~50cmである。深さは数cmから20cm程度のものまでまちまちである。建物の主軸はN2.2°Eである。地山まで削平されていたため、他の遺構は確認できなかった。

10トレンチ北端部でも小規模な柱穴が5つ確認された。そのうち東西に並んで検出された1組の柱穴は直径30~35cmの円形であり、柱痕跡は径10cm程度である。柱間の心々距離は2mを測った。

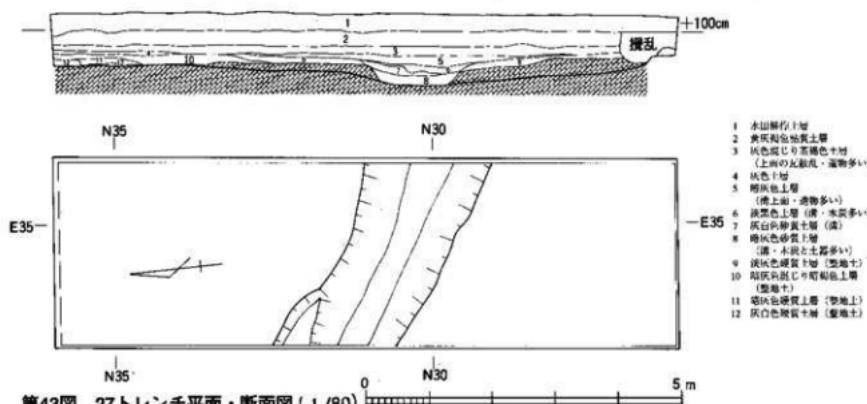
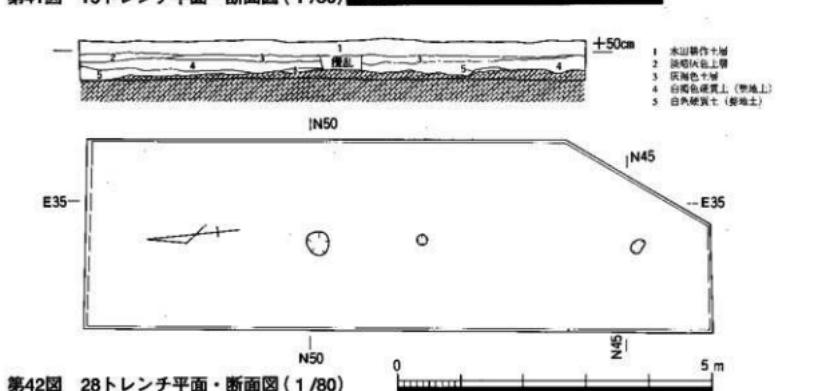
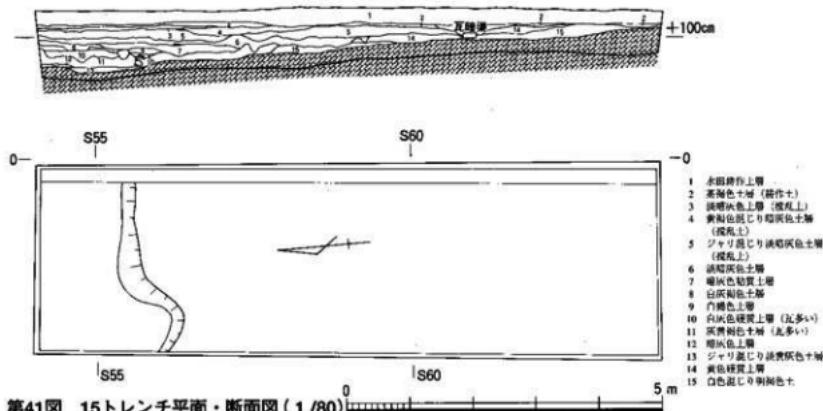
28トレンチで検出された柱穴は3つあり、その直径は北から40cm、16cm、26cmである。ほとんど南北一直線に並んでおり、心々距離は北側が1.7m、南側が3.45mである。南側の柱穴間の中間点付近は、ちょうど水田の暗渠の関係で地山が深く掘り込まれていたために柱穴の有無をはっきりと確認できなかったが、あるいは1.7m等間の柱穴列であった可能性もある。その主軸はN0.8°Eである。建物のような簡単な施設になるのかあるいは柵などになるのかは不明である。

③. 寺城北西外側の掘立柱建物

14トレンチでは、前述のとおり、上層で浅い東西溝、下層で柱穴群を検出した。柱穴群は地山からその1層上層にかけて検出されており、組み合わせは不明確だが径20cm程度の小形のものが多い。寺城の外側であったと推定されるが、寺院が占道に接する位置、すなわち北の入り口にあたる部分でもあることから、何らかの役割を持った掘立柱の簡単な施設が存在していたものと考えられる。

④. 27トレンチの溝

建物・施設に伴わない単独の溝が検出された。溝は東南東から西北西方向に向かっており、金堂の北側を廻る回廊の外側（北側）の溝のあたりへ向かって伸びている。この溝は、東方の谷筋から流れ出る水を寺城北西部へと流していた溝であったと考えられよう。溝の幅は1.6~1.8m、深さは35cm程度を測る。肩は明瞭で、底部は平坦であり、方位はおおむねN64.5°Wである。埋土は上層が木炭・瓦などを包含する暗黒色土であり、下層は遺物の比較的少ない灰白色砂質土をはさんで木炭・土器を大量に包含する暗灰色砂質土である。最下層の暗灰色砂質土からは木の根のような木質物が多量に出土した。また、軒丸瓦V類・軒平瓦IIA類なども下層から出土している。平瓦ではIII A類が目立つほか、IE類などもある。溝の両肩には淡灰色の硬質な整地土がみられる。



第3節 遺物

3年間にわたる発掘調査で出土した遺物はコンテナに563箱を数える。その内容は、瓦類550箱、土器類11箱、金属製品1箱、鉄滓・炉壁・ふいごの羽口1箱、その他数点である。これらの遺物はすべて寺院に伴う遺物であると考えられる。その他に、上層からごくわずかに鎌倉時代以降の遺物が出土しているが、基本的には寺院に伴わない遺物はない。

1. 土製品

① 瓦

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は、型式のわかる個体が115点あり、6型式に分類できる。

I類(第44図1~7)

内区主文は単弁8弁蓮華文。弁のほり込みは浅く、中房は高く突出している。蓮子の構成は1+5であるが、蓮子の表現が明瞭な個体と不明瞭な個体がある。この蓮子は均等な間隔で配置されていない。子葉もふくめて、蓮弁の中央に稜線がとおる点が特徴的である。間弁は三角形に近く、中房までとどかない。外区は直立した素文の高縁である。瓦当の直径は16~17cm程度。瓦当裏面はナデ調整を行って平滑に仕上げている。丸瓦部外面はナデ調整、両側縁と瓦当端面はヘラケズリ後ナデ調整。瓦当部は丸瓦部内面に少量の補強用粘土を使って接着しているだけなので、丸瓦部からはずれてしまった個体が多い。今回の調査では43個体が出土している。

いわゆる山田寺式瓦当文の系譜を引くものであるが、外縁が素文である。軒丸瓦Ⅲ類・軒平瓦Ⅰ類と並んで最も個体数の多い型式であり、当磨寺の軒瓦の中でも最古に比定できることから、創建瓦であると考えられる。金堂の創建時から塔建立着手時まで使用された型式であるため時期幅があり、製作技法と範の傷の特徴から時期的な変遷を追うことができる。

(第1段階)

最古相のものは明褐色を呈しており、焼きがあまい。胎土は最も粗く、直径5mm以下の石英等が顯著に認められ、一日で判別できる特徴的な胎土である。瓦当文はシャープに表現されており、中房の蓮子、蓮弁の稜線などが明瞭である。中房の突出は8mm程度に及ぶ。瓦当の厚さは中房で2.8cm程度である。最古相であると思われる1の瓦当だけが、他のものよりもひとまわり大きい。

(第2段階)

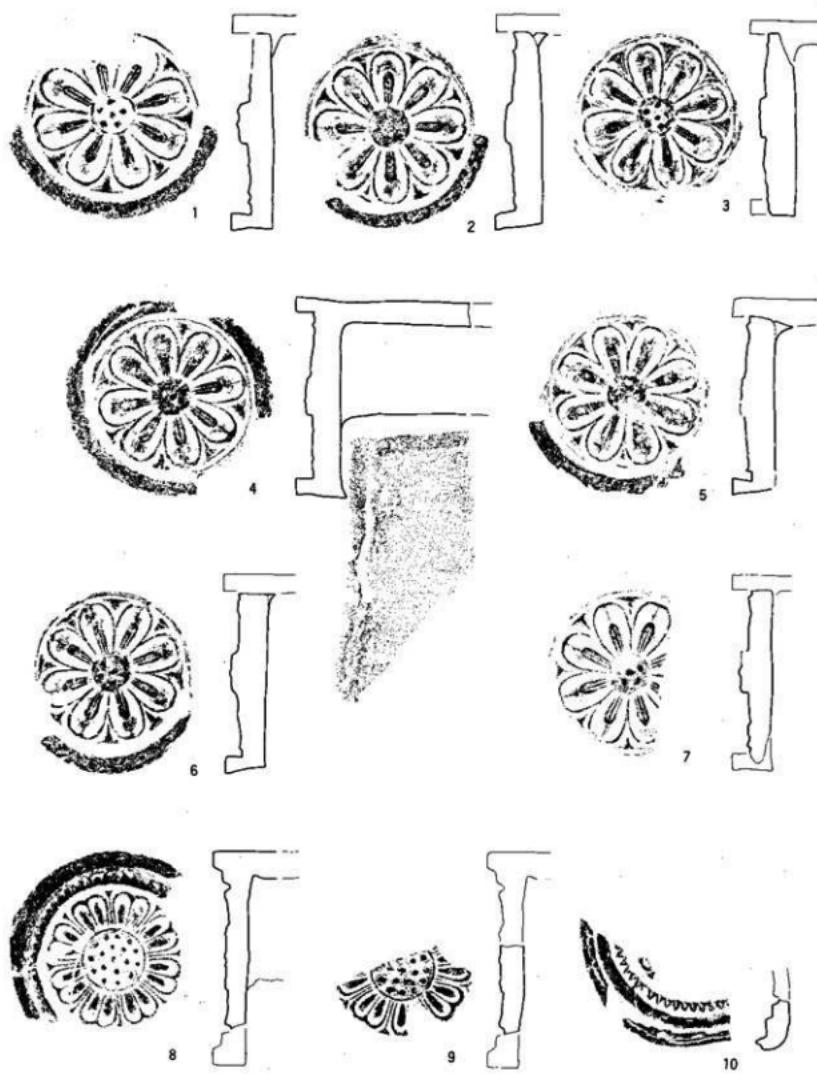
色調は濃青灰色になる。胎土は第1段階に次いで粗く、直径3mm以下の石英・長石などが顯著に認められる。軒丸瓦製作の際、文様部に指で触れるため圧痕が残り、結果的に瓦当文がナデ消されてしまっている点が特徴的である。特に中房の蓮子はほとんど識別できなくなるほど消されており、そのため中房の突出は5mm程度と低くなっている。瓦当の厚さは中房で2.8cm程度である。

(第3段階)

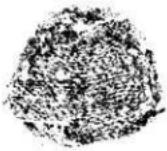
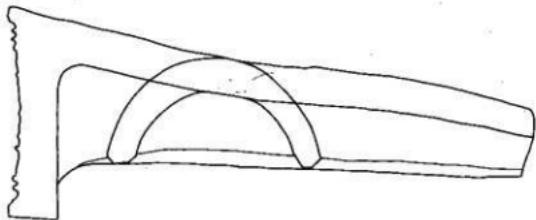
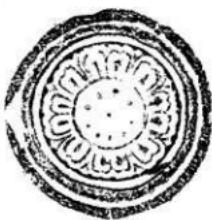
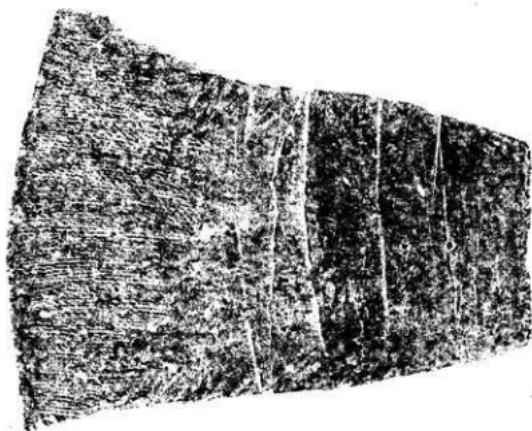
色調はやや淡色になり青灰色から淡青灰色を呈する。範傷A(第48図)が出現し、線状に表現される。指押さえのために瓦当文が消されている特徴は第2段階と同じである。中房の突出は3mm程度と低い。瓦当の厚さは中房で2.3cm程度である。

(第4段階)

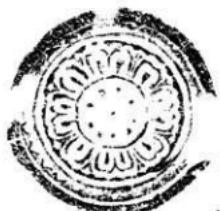
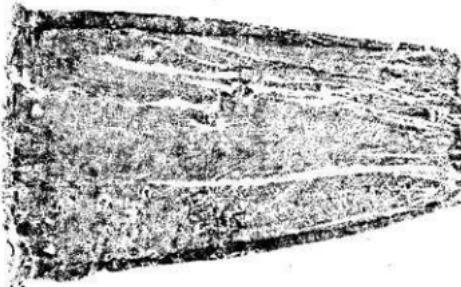
色調はさらに白色に近づき、淡青灰色または灰色・灰白色を呈する。胎土は比較的精緻で、若干の



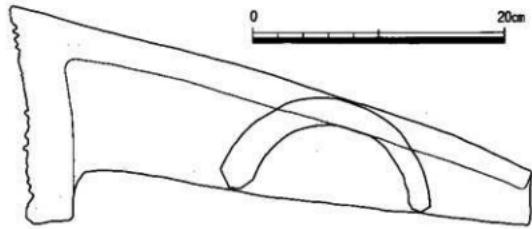
第44図 軒丸瓦実測図1 (1/4)



11
III類



12



第45図 軒丸瓦実測図 2 (1/4)

石英、長石などのほか、黒色の小粒を含む。範傷Aは大きくなる。指押さえのために瓦当文がナデ消される傾向はなくなり、中房の蓮子が復活するが、範の摩耗のためか全体に文様の表現は鈍くなっている。中房の突出は6mm程度と再び高くなる。瓦当の厚さは中房で2.2~2.4cm程度であり、最も薄いつくりとなっている。軒丸瓦II類と同様、丸瓦部内面の布目が非常に細かい。同段階の中でも、新相のものは1962(昭和37)年の塔の調査において多く出土している。

II A類(第44図 8・9)

内区主文は複弁8弁蓮華文。弁のほり込みは比較的深い。中房は低く突出し、外周にはかすかに圈線がめぐる。蓮子は1+6+11の構成で、これもかすかに圈線をともなう。間弁は先端が中房までとどいている。外区内縁には面違鋸齒文がめぐり、さらに外側には直立した素文の高縁がつく。瓦当裏面はナデ調整を行って平滑に仕上げている。丸瓦部外面はナデ調整で、両側縁にはヘラケズリを施している。丸瓦部内面の布目が非常に細かい。胎土は比較的精緻で、若干の石英、長石などの小粒を含む。焼成については、良好な青灰色のものと、やや焼きのあまい灰色・白褐色のものとがある。今回の調査では11個体が出上しているが、小破片が多い。

いわゆる川原寺式瓦当文の系譜を引くものであるが、I類と同様、外縁に素文の高縁がつく点が特徴的である。また、蓮子の数が異なること、内縁内側の圈線が失われていることなど、後出的な要素が目立つ。1962(昭和37)年の塔の調査において多く出土している。

II B類(第44図10)

外縁の素文高縁が2段になっている点がA類と異なる。個体数が少ないので詳細は不明。今回の調査ではこの1個体のみの出土である。

III類(第45図11・12)

内区主文は単弁と複弁を交互に4弁ずつ配する特徴的な蓮華文である。弁のほり込みは比較的浅い。中房は突出せず、外周に圈線をめぐらして蓮弁との境界をなす。蓮子は1+9の構成で、かたよりのある独特の配置をおこなう。単弁の左側の間弁は中房までとどかないものが多いが、右側の間弁は先端が中房までとどくものが多い。内区外側には圈線がめぐる。外区内縁は内側に傾斜し、そこに鋸齒文が施されている。鋸齒文はおもに細線で表現されているが、部分的に深い外向凸鋸齒文となっている個所がある。外区外縁は低く、丸瓦部に施されている繩目の叩き目がここにも残っている。関東廃寺における同型式の特徴は、内区外側の間線と内側の圈線との間に粘土塊が詰まっている部分がある(第48図D)ことで、すべての個体がこの特徴を備えている。瓦当の直径は16~17cm程度で、瓦当の厚さは4cm程度と厚い。瓦当の接合位置は低く、蓮弁の中ほどから中房圈線のあたりにあって、この部位で剥離したものが目立つ。瓦当部裏面と側面には繩目の叩き目がはっきりと残る。丸瓦部外面は繩目の叩き調整で、内面には布目が顯著に残る。両側縁と端縁にはヘラケズリを施している。完形の個体には、行基式の丸瓦がついている。胎土は比較的精緻であるが、直径2mm以下の石英などを含んでいる。焼成は、比較的良好な灰色のものが多数を占めているが、一部に焼きのあまい白褐色のものがある。今回の調査では44個体が出上しており、軒丸瓦I類と並んで最も個体数が多い型式である。軒平瓦I類とセットになるものと思われる。

この独特の単弁と複弁を交互に施す蓮華文の類例は、總社市の備中国分寺、国分尼寺において認められる。さらに、かたよった蓮子の配置(第48図C)や部分的な凸鋸齒文、間弁の特徴などが悉く一致していることから、両者は同范であると考えて差し支えないであろう。金堂周辺からの出土量が特

に多く、奈良時代の補修・改修時に採用された瓦当文であると考えられる。

IV類（第46図13）

III類とV類の間を埋める資料がこのたび1点出土している。内区主文は12弁蓮華文である。瓦当文は全体に凹凸がゆるやかで偏平であり、シャープな印象を欠く。弁のほり込みはますます浅くなる。子葉が蓮弁の先端にまでとどいているため、一見複弁12弁のように見えるが、もとはIII類の系譜を引いているものと考えられる。蓮子が1+9の構成であること、内区外側に圓線をめぐらすことなどもIII類に類似している。しかし、間弁は退化して小三角形の隆起となり、蓮弁の間だけでなく弁端にも配され、すでに単複弁の概念を喪失していることがうかがわれる。中房は平坦ではなくわずかに隆起しており、外周に太い圓線をめぐらして蓮弁との境界をなす。外区の内側には階段状に1段の段がつく。この段は、部分的に圓線のようになっている箇所がある。III類にみられた鋸齒文などはない。瓦当裏面に丸瓦部と一連の布目压痕が残っていること、また、瓦当裏面下部には丸瓦部を半裁して切り取った痕跡が残っていることなどから、瓦当部と丸瓦部を共土で作る一本造りであると思われる。胎土はやや粗く、石英・長石粒を多量に含んでいる。焼成は不良であり、褐色でもろい。このため、一見V類に類似している。

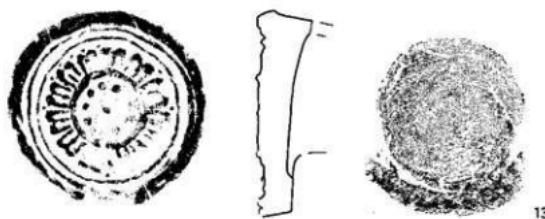
V類（第46図14~16）

内区主文は12弁蓮華文でIV類に似るが、複弁状の蓮弁の中に子葉が3つずつ配される点が最大の特徴である。弁のほり込みはなくなり、子葉と同じく隆起して表現される。中房は突出せず、平坦となる。その他の表現はIV類とほとんど同じである。圓線や蓮子などが厚ぼったく、シャープな印象を欠く。直径は15.5~16cm程度。瓦当裏面に丸瓦部と一連の布目压痕が残っていることから、一本造りであると思われる。今回の調査では15個体が出土しているが、そのうち7個体が東方建物周辺（6・7・23・38番地）で出土している。

外区の内側に階段状に1段の段がつくものと、つかないものとに分類することができる。14は段のつかないもので、外区はケズリによって段を消され、平滑に仕上げられている。中房の蓮子・蓮弁等の表現は比較的シャープで、瓦当の厚さは3cmと薄い。丸瓦部外面は板状工具による縦方向のナデで仕上げられており、両側縁にはヘラケズリを行わない。胎土はやや粗雑で、石英・長石の小粒を多く含んでいる。このほかに、青灰色の焼きの良い個体も見受けられる。いっぽう15・16は外区の内側に段のつくものである。瓦当文の表現が前者に比べて鈍いため、より新しい段階のものである可能性がある。瓦当の厚さは3.5~4cm程度。丸瓦部両側縁にはヘラケズリを行っている。胎土は粗雑で、大粒の石英を始めとして長石等を多量に含んでいる。焼成は多くが不良であり、褐色でもろい。

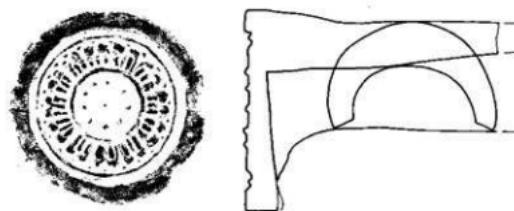
VI類（第47図17）

関戸庵寺では特異な型式の瓦で、今回初めて1点出土した。内区主文は単弁10弁蓮華文であるが、蓮弁の形状・製作技法などが他と大きく異なり、あたかも素人作りのように未熟なつくりである印象を受ける。弁のほり込みは深いが、子葉がない。また、その配置は割り付けによっておらず、形状・長さ・幅・中房への接続角度は各弁によって違う。したがって、蓮弁が10弁であることは偶然の産物かもしれない。中房は突出しており、2+4の蓮子を配する。間弁は弧を描くV字形で、中房までとどかない。外縁は直立した素文の高縁である。瓦筋は瓦当部と同程度の大きさであったらしく、全体に木目が顕著に残る。蓮弁や間弁の間が粘土塊によってつながっている箇所が多く見受けられるが、当型式の軒丸瓦の個体数が明かに少なく、類例もないことから、度重なる使用のために瓦筋が欠損し



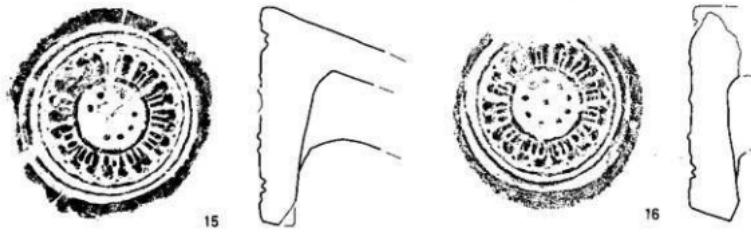
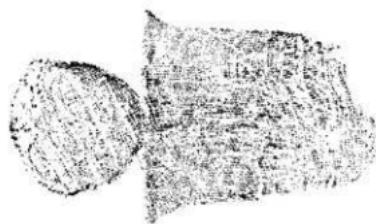
13

IV類



14

V類

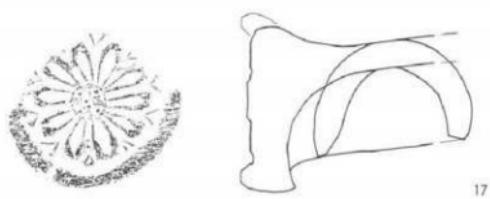


V類

V類



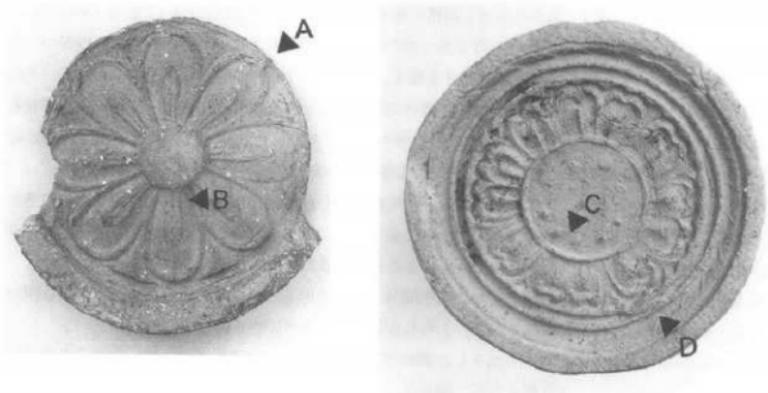
第46図 軒丸瓦実測図3 (1/4)



VI類

0 20cm

第47図 軒丸瓦実測図 4 (1/4)



第48図 瓦范と瓦傷の特徴

たというよりも、元来、瓦が粗雑なつくりであったと考えたほうが良いであろう。直径は14.5cmで、瓦当の厚さは4.4cmと厚い。丸瓦部内面の布日はほとんどが縦方向のヘラケズリにより消されている。外面も同じく縦方向のヘラケズリ調整。丸瓦部側縁の調整は行わない。胎土は比較的粗雑であり、石英・長石などの小粒のほか、黒色粒が目立つ。焼成はやや良好であり、表面は青灰褐色を呈するが、断面を見ると内部はまだ褐色の状態である。

単弁であること、外縁が素文の高縁であること、中房と蓮子の形状などは軒丸瓦Ⅰ類に似ているが、V字形の間弁などはむしろⅢ類に共通する要素である。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は、型式のわかる個体が64個体あり、4型式に分類できる。

I類 (第49~51図)

均整唐草文で、平城宮6663型式の並式。中心飾の左右に各3反転する唐草を配する。左第2単位の第3支葉先端に、ハート状のふくらみが表現される(第48図F)。いっぽう右第2単位の第3支葉先端は、こぶ状のふくらみを持つ部分で若干折れ曲がり、そのまま第3単位第1支葉へと連続している(第48図G)。外区に加えられた1本の界線は、上外部中央付近で外縁と一体化している。また、外区右脇区の2本の界線の間が、粘土によって縞状に埋まっており、瓦の欠損を物語っている(第48図H)。また、瓦筋が瓦当側面にかぶる形のものであったためか、左外縁のさらに外側に特徴的な段がついている(第48図E)。平瓦部凹面は繩目(縫目)の叩きを施す。凹面は斜方向の糸切り痕が明瞭に残るが、その上に縦方向のナデを施しているものがある。繩目の叩き日は瓦当文の外区にも残っており、唐草文を含めて瓦当の文様部一面に叩きが施されている例もある。また、金堂出土の軒平瓦Ⅰ類で凸面に幅1.5~2cmの朱線が認められるものがある。この朱線は瓦当面から16~19cmの位置にある。

胎土・焼成は軒丸瓦Ⅲ類とほぼ同じであり、淡灰色・灰白色・淡黒灰色の比較的均質なもののが多数を占める。今回の調査では34個体以上が出土しており、そのうち金堂周辺(9・26・32・33トレチ)からの出土が28点と多い。軒丸瓦Ⅲ類とセットになるものと思われる。

軒丸瓦Ⅲ類と同じく、同文の軒平瓦が、備中國分寺と国分尼寺において認められる。これらは関戸廃寺出土のものと諸特徴が一致しており、こちらも同范である可能性が極めて高い。

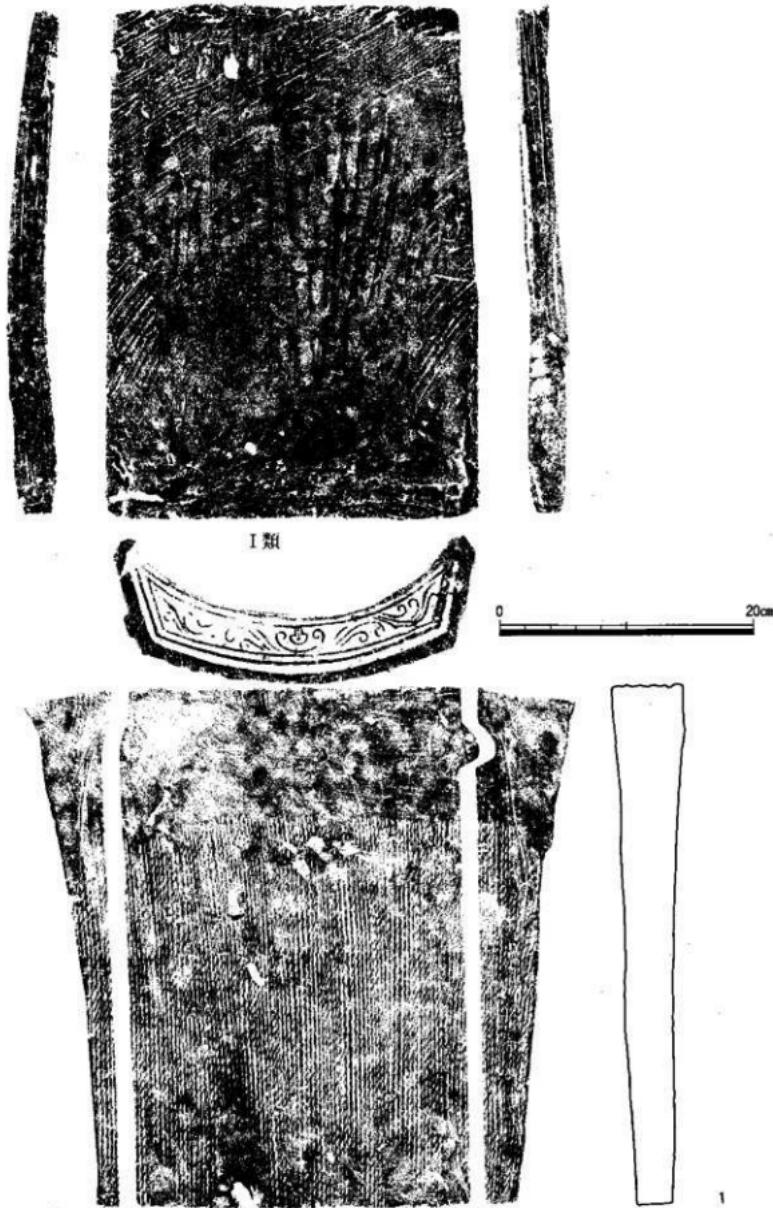
2・3は26トレチ・金堂北東角から出土した隅軒平瓦であり、端面に対して30~40°程度の角度で隅を切り落としている。胎土が乾燥する前に隅を切り落とし、その後平瓦部凹面を下にして安置していたため、結果として乾燥中に瓦当部の両端が少し垂れ下がってしまっている。

II A類 (第53図7)

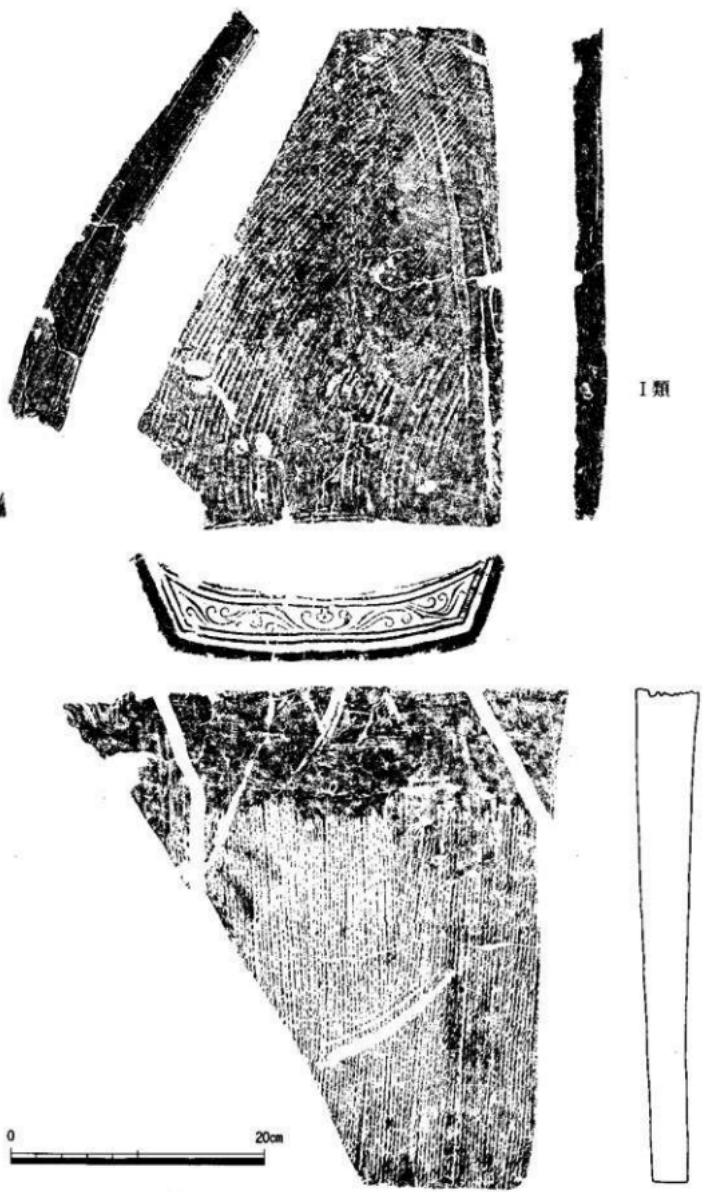
II類はI類と同じく均整唐草文で平城宮6663型式の並式。その中で、大形のものをII A類として今回新たに設定した。今回の調査では5個体以上出土しているが、いずれも小破片であり全体像のわかる個体はない。最も大きい破片の7は、過去の採集資料である。瓦当文はII B類と同文であるがII B類に比べてシャープな表現のものが多い。瓦筋は完全に瓦当部のなかで収まる大きさのものであるため、外側の界線が外縁と一体化するようなことはない。外区左脇区の界線下端が、范傷のため細線によってもう1本の界線とながっている。瓦当部の上側には横方向のヘラケズリが施される。胎土は粗雑であり、径5mm以下の石英粒等や砂粒を多く含む。やや焼きのあまい灰褐色のものが多い。

II B類 (第52図4~6)

II類の中で、小形のものがII B類である。他の軒平瓦と比較して全長が6cm程度小さいため、用



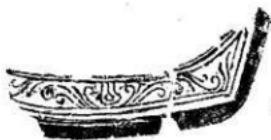
第49図 軒平瓦実測図1 (1/4)



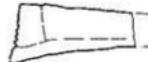
第50図 軒平実測図 2 (1/4)



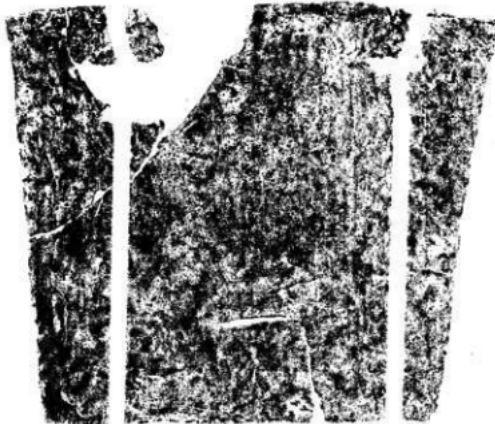
第51図 軒平瓦実測図 3 (1/4)



5



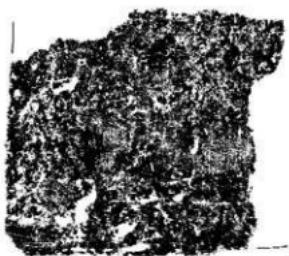
6



II B類

0 20cm

第52図 軒平瓦実測図 4 (1/4)



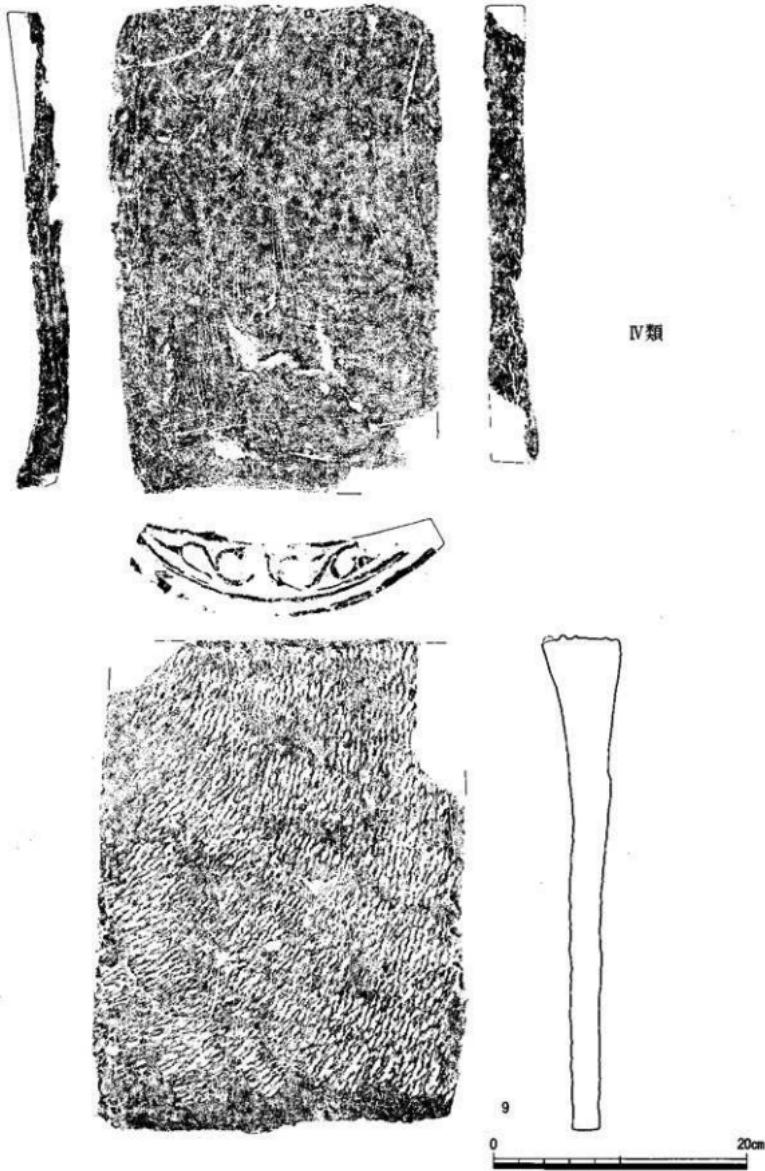
II A類



III類



第53図 軒平瓦実測図 5 (1/4)



第54図 軒平瓦実測図 6 (1/4)

途が異なっていた可能性もある。全体に瓦文の表現は鈍いものが多い。中心飾は弧を描いた三角形として表現され、イチョウの葉形をしている。I類と異なり、右第2単位の第3支葉は短く切れている。外区左脇区の界線下端が、范傷のため縦線によってもう1本の界線とつながる点はII A類と共通する(第48図I)。外側の界線が、上外部中央付近で外縁と一体化している。瓦当部上側は横方向のヘラケズリ成形。平瓦部凸面には叩き目が残っておらず、縦方向のヘラケズリのちナデ成形するものが多い。四面側の側縁もヘラケズリ調整。II類は瓦当部側面と下面の境界があいまいで、I類に見られるような明瞭な稜を持たない。胎土はI類に比べてやや粗く、直径2mm以下の石英・長石の小粒が目立つ一方、焼成は非常に良好になり、青灰色・濃青灰色を呈する須質のものが多い。今回の調査では6個体以上出土しており、うち3点が東方建物周辺(6・7・23・38トレンチ)から出土した。

III類(第53図8)

均整唐草文で、今回の調査で6点、1962(昭和37)年の調査で6点が出土している。中心飾は退化して逆「エ」字形となり、その左右に各4反転する肉厚の唐草文を配する。中心飾以外の唐草文は、すべて一つにつながっている。外区には1本の界線がめぐる。瓦当部上側が強い横方向ケズリ成形を受けた結果、斜め下方に傾斜している。瓦当部下側も若干の横方向ケズリ成形がなされており、平瓦部凸面には平瓦III C類と同様の粗い繩目の叩き目が顯著に残る。四面側の側縁をヘラケズリ調整する点はII B類と同様である。胎土はやや粗く、石英・長石のほか赤色粒が目立つ。焼成は不良で褐色を呈するが1962(昭和37)年の調査ではやや焼きの良い灰色のものも出土している。

IV類(第54図9)

扁行唐草文。左扁行唐草文で、上外部に施された界線は、完全に外縁と一体化している。下外部の界線は2本あり、下側のものはやはり外縁と一体化している。平瓦部凸面には、平瓦III類と同じものか、もしくは9のように非常に粗い繩目叩きが施される。四面側の側縁ヘラケズリ調整はほとんど行われない。胎土は粗く、直径5mm程度の石英・長石が目立つ。焼成は非常に悪く、暗褐色・暗緑褐色・黒色を呈するものが多い。今回の調査では7個体が出土。

(3) 丸瓦

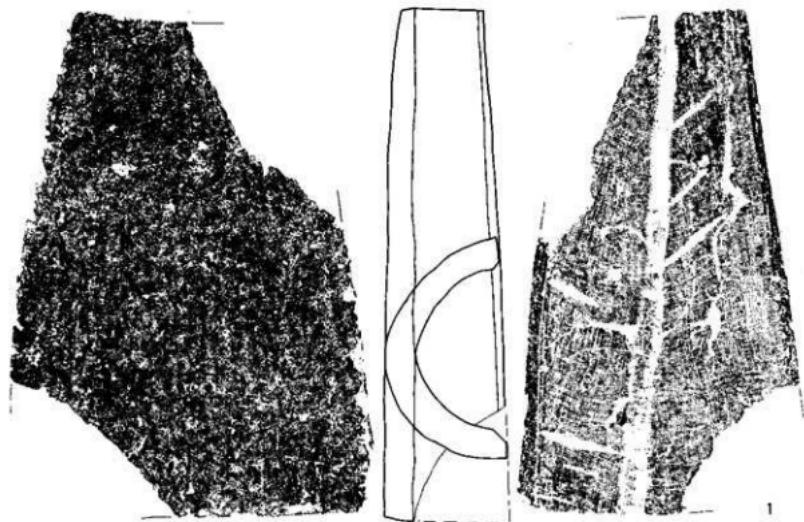
いわゆる行基式(I類)と玉縁式(II類)の2型式に分類しうる。I類のほうが圧倒的に多い。I類・II類とともに調整手法によってさらに細分することが可能である。

I A類(第55図1・2)

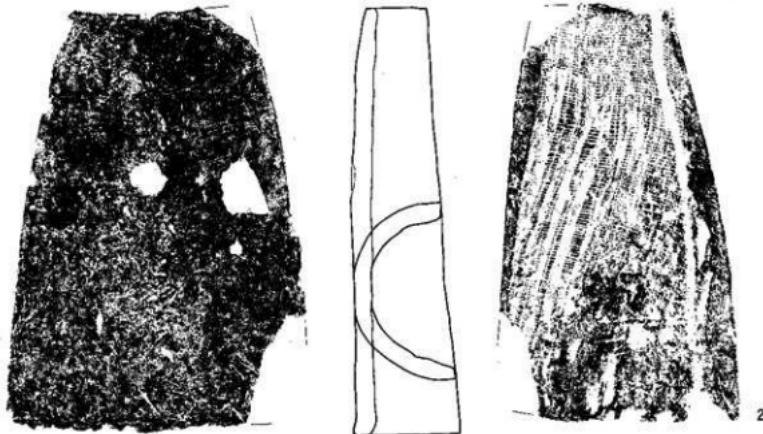
行基式丸瓦のうち凸面に回転ナデもしくは縦方向のナデを施すもの。関戸廬寺において最も数量の多い丸瓦である。胎土・色調から、軒丸瓦I類からV類までの各型式に対応するものがあると思われる。1は軒丸瓦I類の第2段階のものと同じ胎土を有する濃青灰色の丸瓦で、全長40.0cm。2は粗い布目を有する白褐色の丸瓦で、全長は33.9cmとやや小形である。どちらも四面側の側縁にヘラケズリを施す。

I B類(第56図3)

行基式丸瓦のうち凸面に平行叩きを施した後、櫛状工具でそれをかき消すように横位に調整する。平瓦II B類とセットになるものと思われる。数量的には少なく、金堂周辺からわずか数個体出土したのみである。胎土は精緻であるが1mm未満の石英・長石粒が目立つ。焼成は良好で淡青灰色を呈する。四面の布目が非常に細かい点は軒丸瓦I類の第4段階と軒丸瓦II類に共通している。側面、四面側側縁、凸面側端面・端縁に施されたヘラケズリは丁寧である。



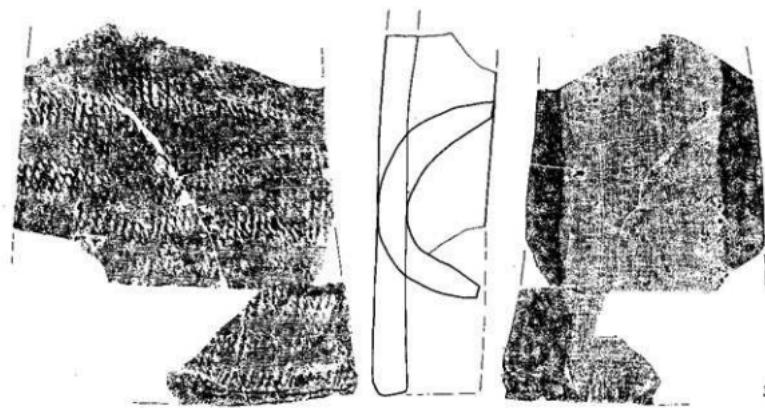
I A類



I A類

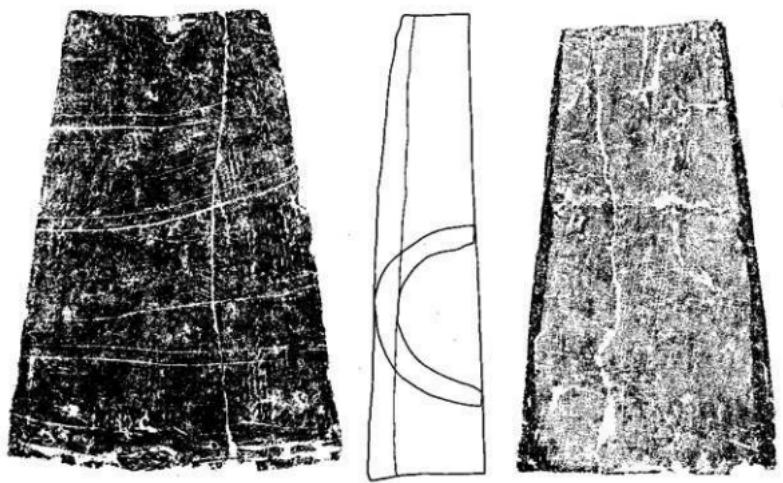


第55図 九瓦実測図1 (1/4)



IB類

3

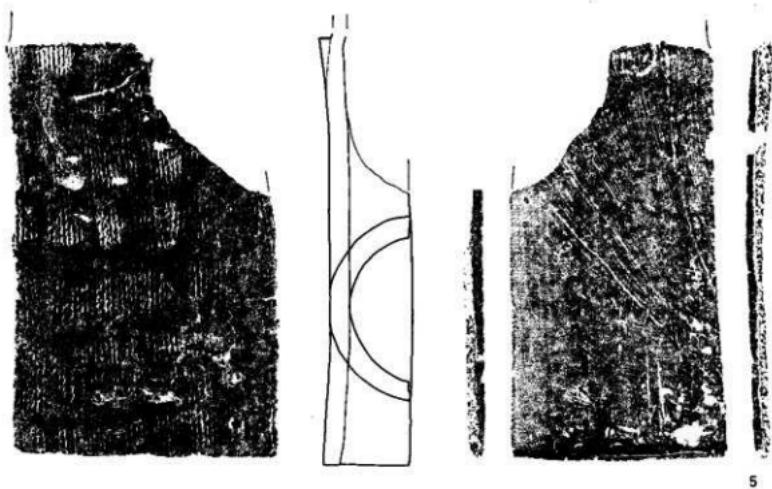


IC類

4

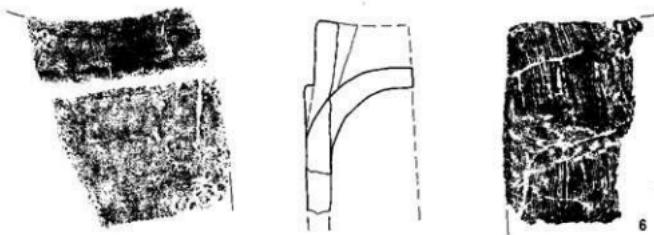


第56図 丸瓦実測図 2 (1/4)



II A類

5



II B類

6



第57図 丸瓦実測図 3 (1/4)

I C類（第56図4）

行基式丸瓦のうち凸面に縄目叩きを施した後、回転ナデでそれを消すように調整するもの。おおむね軒丸瓦Ⅲ類に対応するものと思われる。凹面に斜方向の糸切り痕が明瞭に残る個体が多い。色調・胎土も軒丸瓦Ⅲ類に近い。凹面側の側縁にヘラケズリを施す。4は全長36.4cmで灰色を呈する。

II A類（第57図5）

玉縁式丸瓦のうち凸面に縄目叩きを施した後、ナデでそれをかき消すように調整するもの。今回の調査では9・33トレン（金堂）、35トレン（塔）、13トレンからそれぞれ1個体ずつ、計4個体が出上している。ナデ調整によりII B類と区別がつかなくなっているものもあると思われる。5は9トレン出土の個体で、玉縁を欠失しているが、残存長33.4cmを測る。凹面側には斜方向の糸切り痕が明瞭に残り、端縁にはヘラケズリを施している。胎土はやや粗雑で砂粒を多く含んでいる。色調は青灰色から灰色を呈する。

II B類（第57図6）

玉縁式丸瓦のうち凸面にナデを施すもの。今回の調査では15個体が出土し、そのうち5個体が金堂（26・32・33トレン）、1個体が塔（35トレン）、6個体が東方建物（6・7・23トレン）で出土している。焼成不良な褐色のものが大半を占めている。完形のものがないため、全体像をうかがい知ることができない。6は6・7トレンの包含層から出土している。胎土に径4mm以下の小礫や石英・長石の小粒を含んでおり、焼成は不良で暗灰褐色を呈する。

（4）平瓦

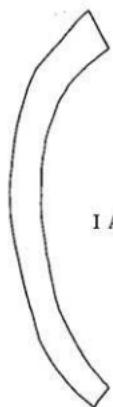
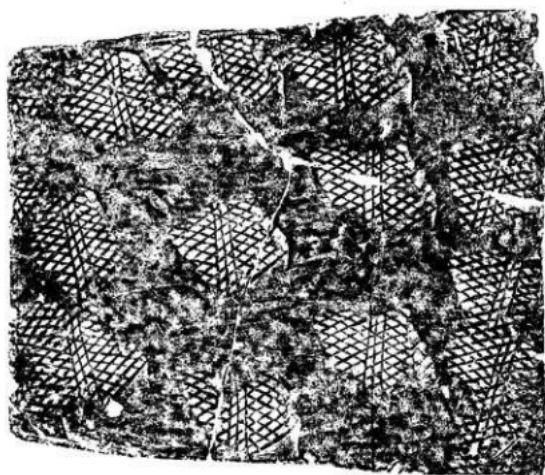
平瓦は、凸面に残る叩き目により格子目叩き（I類）、平行叩き（II類）、縄目叩き（III類）に大別され、さらにそれぞれが細分される。

I A類（第58図1）

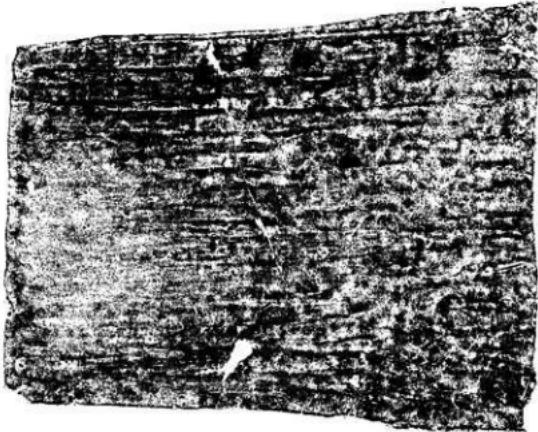
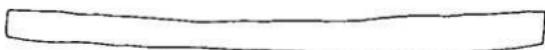
凸面に整った小形の斜格子目叩きを施すもの。斜格子目の長径は約1cm。金堂周辺で出土した大量の瓦のなかでも、最も数量的に多いものと思われる。叩きがほとんど全面に施されるものと、まばらに施されるものがある。凹面には模骨痕が顯著に残る。布目痕も残っているが、縦方向のヘラケズリ又はナデ調整によってかなりの部分が消されている。側面・側縁・端面にヘラケズリを施す。胎土・焼成・布目の特徴はおおむね軒丸瓦Ⅰ類に近いものがあり、そのなかでも第1段階から第4段階までの各段階に対応する個体があるものと考えられる。1は32トレンから出土したほぼ完形の個体で、縦方向のヘラケズリの後、まばらに叩きを施している。全長42.4cm、広端幅33.5cm、狭端幅28.3cm、最大厚2.9cmを測る。胎土はやや粗雑で大粒の石英等を含み、色調は青灰色を呈する。

I B類（第59図2）

凸面に斜格子目に一本線を加えた大形の叩きを施すもの。斜格子目間の間隔も他のものよりも広い。金堂周辺で最も多く、その出土量は平瓦I A類に次いでいる。また、塔周辺でも若干の出土を見る。叩き目は深く、ほとんど全面に施されているものと、まばらに施されているものがある。凹面には模骨痕・布目痕が顯著に残る。また、斜方向の糸切り痕やナデ調整の痕跡なども残っている。側面・端面にはヘラケズリを施すが、側縁・端縁にはほとんど施さない。胎土・焼成・布目の特徴はやはり軒丸瓦Ⅰ類の各段階に共通するものが多いが、最古相の第1段階に対応する個体は少なく、むしろ比較的新しい段階に対応するものが多い。2は26トレン出土の個体で、広端幅36.5cm、最大厚2.3cmを測る。胎土は粗雑で比較的大粒の石英・長石粒を多く含み、色調は濃青灰色を呈する。



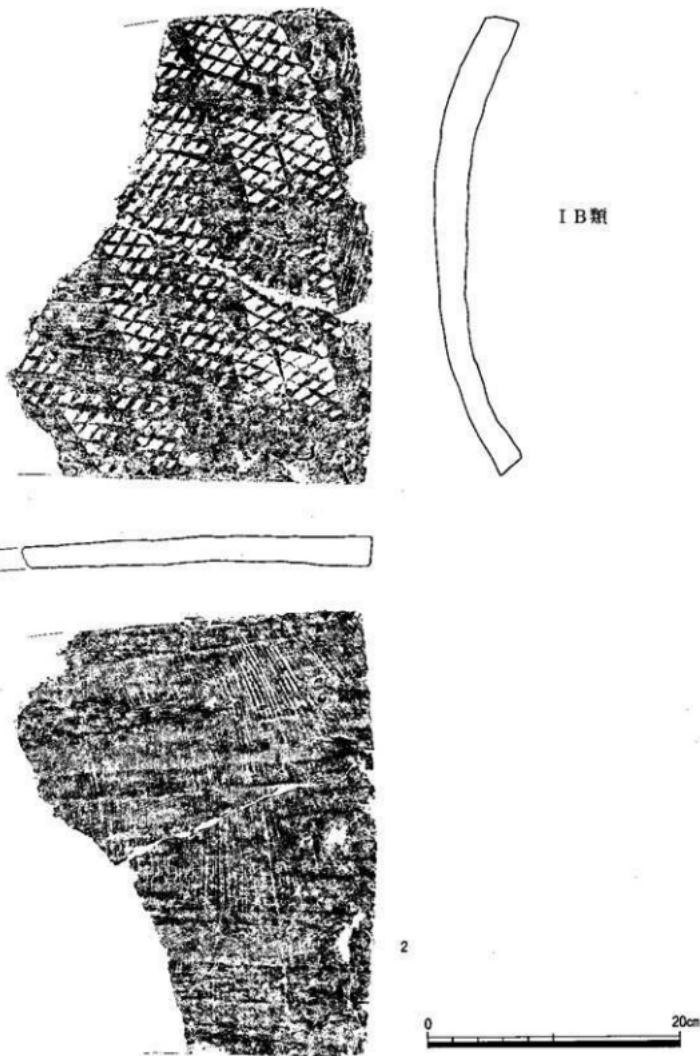
I A類



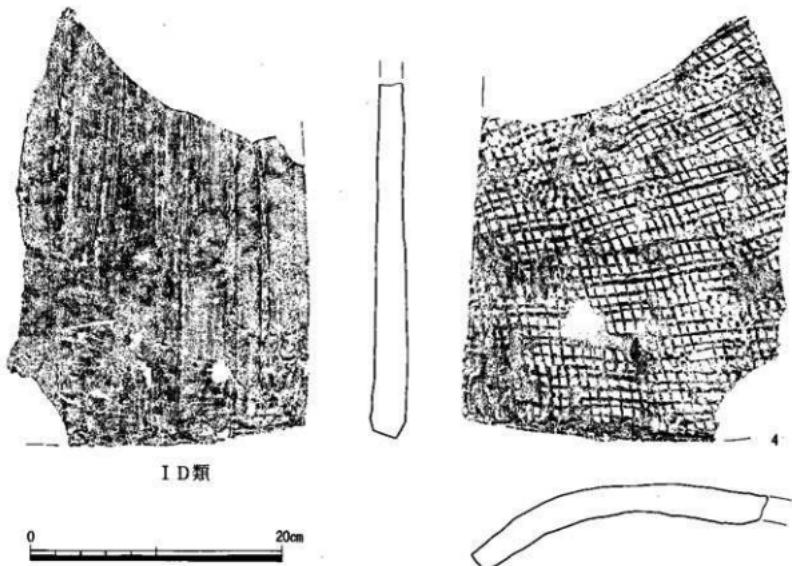
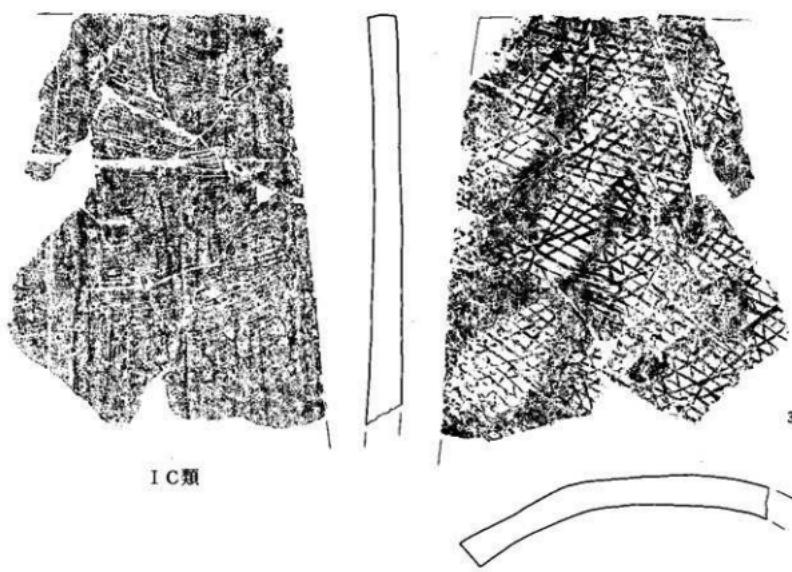
1

0

第58図 平瓦実測図 1 (1/4)



第59図 平瓦実測図 2 (1/4)



0 20cm

第60図 平瓦実測図3 (1/4)

I C類（第60図3）

凸面に平行線と不定方向線により構成される不整形な斜格子目叩きを施すもの。個体数は比較的小ないが、金堂周辺で一定量が出土する。叩き目は浅いがよく残っている。凹面には模骨痕・布目痕が顕著に残る。また、糸切り痕やナデ調整の痕跡なども残っている。側面・端面にはヘラケズリを施すが、側縁・端縁にはほとんど施さないなど、I B類に共通する要素が多く見受けられる。色調は多くが白褐色・灰白色を呈し、なおかつ凹面の布目が細かなものが多い。胎土・色調・布目の特徴から、おおむね軒丸瓦I類の新しい段階を中心とする時期に並行するものと考えられる。3は32トレンチ出土の個体で、胎土には石英・長石粒を多く含み、色調は濃青灰色を呈する。

I D類（第60図4）

凸面に正格子目に近い叩きを施すもの。塔周辺で最も多く、門の存在が想定される寺域南端付近（1・15トレンチ）でも目だっている。また、金堂周辺においても若干の出土を見る。叩き目は凸面全面に明瞭に残る。凹面には模骨痕が残っているが、ヘラケズリが顕著であり、布目痕は大部分が消されているか、全く残っていない。側面・端面・側縁・端縁にはヘラケズリを施し、さらに凸面端縁もヘラケズリで調整しているものがある。色調は青灰色から灰白色を呈するものが多く、凹面の布目は細かなものがほとんどである。おおむね軒丸瓦I類の第4段階から軒丸瓦II類を中心とする時期に並行するものと考えられる。4は35トレンチ出土の個体で、最大厚2.8cmを測る。胎土は比較的精緻で若干の砂粒を含み、色調は淡青灰色を呈する。

I E類（第61図5）

凸面に細身の小形斜格子目叩きを施すもの。金堂周辺をはじめ、寺域各所において数点ずつ出土しているが、いずれも小破片のため詳細は不明。凹面には模骨痕が残っている。色調は赤褐色と濃青灰色で、胎土の特徴は軒丸瓦I類の第1段階・第2段階に共通している。5は32トレンチ出土の破片で、凹面の広端縁に幅広のヘラケズリを施している。最大厚は2.9cmと厚ぼったい。胎土には大粒の石英・長石を多く含み、色調は凸面が淡褐色、凹面が暗灰褐色を呈する。

I F類（第61図6）

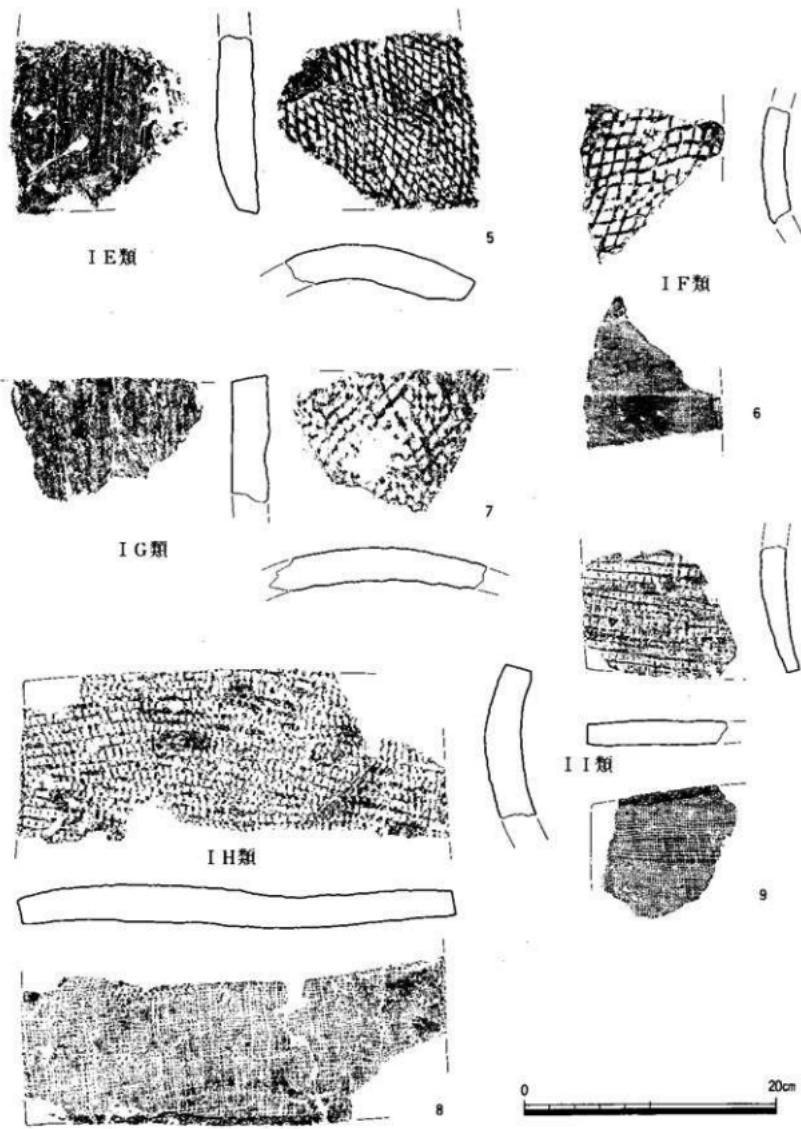
凸面に大形で他のものより影の深い斜格子目叩きを施すもの。32トレンチから小破片が1点出土したのみであり、詳細は不明。色調は淡青灰色で、胎土はやや粗雑であり、黒色粒が目立つ。

I G類（第61図7）

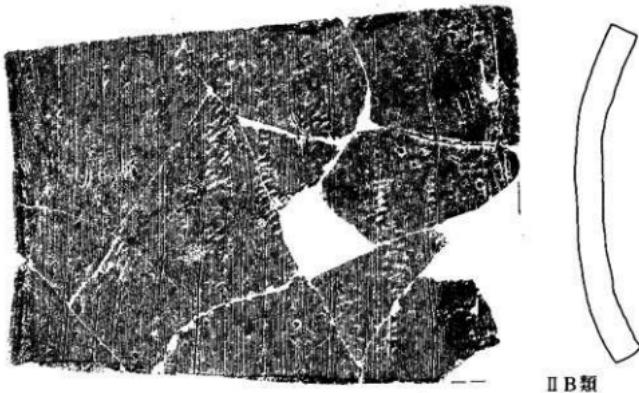
凸面にやや不整形な斜格子目叩きを乱雜に施すもの。東方建物の基壇最下層から1点出土したのみである。斜格子目叩きは、I A類やI D類に似た部分があるが、叩き目が雜然として見えるため、もとの形状は判然としない。凹面には模骨痕が残り、布目が一部縱方向のナデで消されている。端面・端縁にもヘラケズリが施されている。色調は青灰色で、胎土はやや粗く、径3mm以下の長石粒や黒色粒などを含んでいる。第1期東方建物に使用されていた平瓦であろう。

I H類（第61図8）

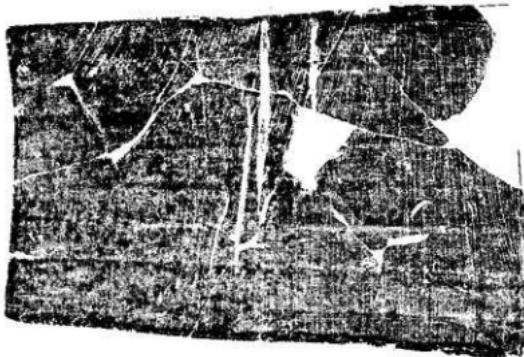
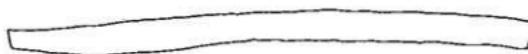
凸面に正格子目に近い小形の格子目叩きを施すもの。東方建物周辺から2点出土したのみである。叩き目は深く、凸面全面に施されている。凹面側の側縁には幅の狭いヘラケズリを行っている。凹面に模骨痕はなく、粗い布目がくっきりと残っている。色調は濃青灰色で、胎土は比較的精緻であるが、一部に径2mm以下の石英・長石粒などがある。東方建物に関連している平瓦であろう。8は、全長34.2cm、最大厚3.0cmを測り、ややひずんだ形状をしている。



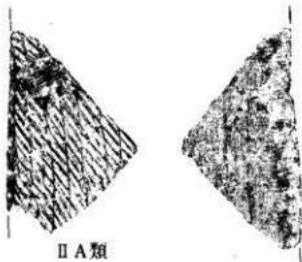
第61図 平瓦実測図4 (1/4)



II B類

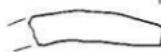


10

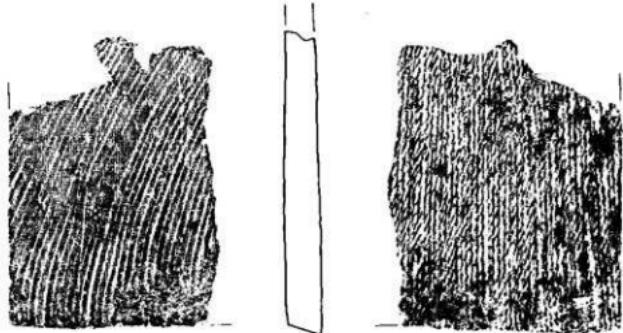


II A類

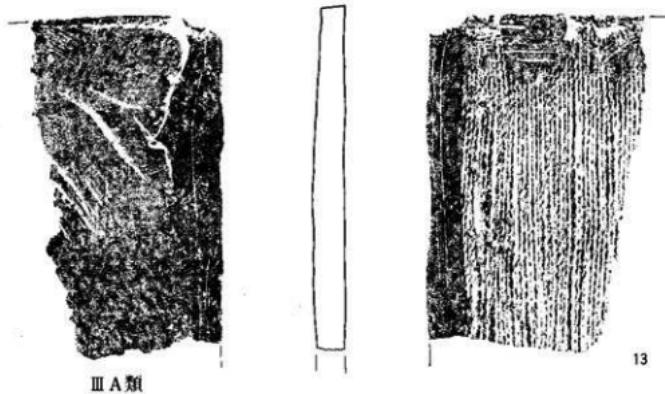
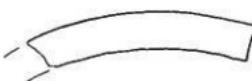
11



第62図 平瓦実測図 5 (1/4)



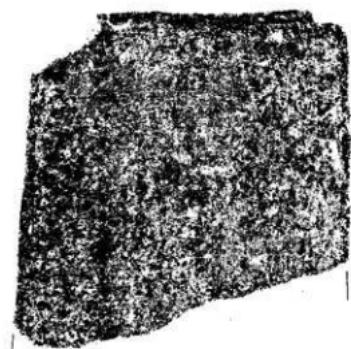
III A類



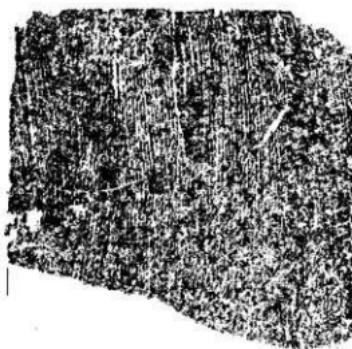
III A類



第63図 平瓦実測図 6 (1/4)



III B類



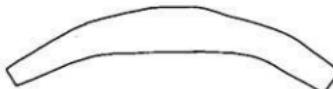
14



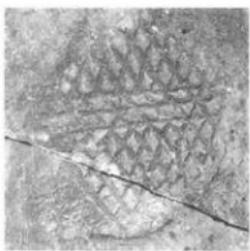
III C類



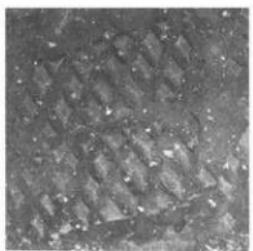
15



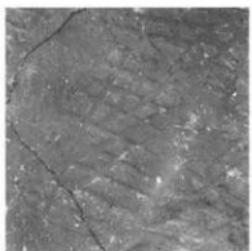
第64図 平瓦実測図 7 (1/4)



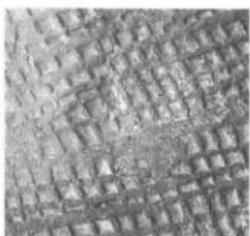
I A類



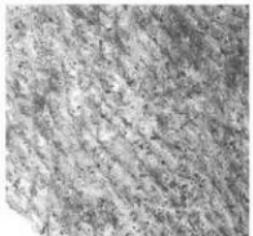
I B類



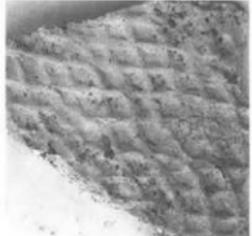
I C類



I D類



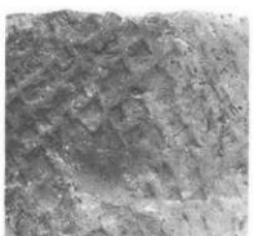
I E類



I F類



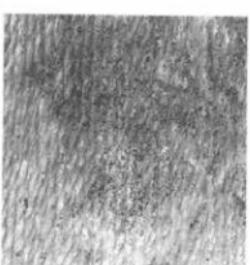
I G類



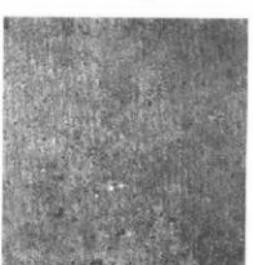
I H類



I I類



III A類



III B類



III C類

第65図 平瓦の叩き目 (1/2)

I 1類 (第61図9)

凸面に浅い正格子目印きを施すもの。26トレンチから1点出土したのみである。印き目は隅々まで施されているが非常に浅い。現状での最大厚2.2cm、側面厚0.95cm、狭端面厚1.05cmを測る。側面が非常に薄いため、通常の平瓦ではなく道具瓦である可能性もある。凹面には粗い布目が明瞭に残り、側縁・端縁には幅の狭いヘラケズリを施している。胎土はやや粗雑で、洋8mm以下の小蝶と、石英・長石の小粒・黒色粒を含む。色調は灰色を呈する。

II A類 (第62図11)

凸面に平行印きを施すもの。金堂周辺から1箱程度出土している。凹面には浅い模骨痕が残り、布目は非常に細かい。側面と凹面・凸面の側縁には丁寧なヘラケズリを施す。端縁にもわずかにヘラケズリがみられる。胎土は精緻であり、長石等の微細な粒を含む。色調はおおむね淡青灰色から白灰色を呈するが、一部に黒灰色のものもある。11は白色を呈しており、側面と両側縁にはきわめて丁寧なヘラケズリを施している。

II B類 (第62図10)

凸面に平行印きを施した後、櫛齒状工具でそれをかき消すように横位に調整するもの。櫛齒状工具の幅は約2.2cmを測る。金堂周辺から1箱程度出土しており、平瓦II A類よりも若干多い。凹面には模骨痕がかすかに残り、布目は非常に細かい。側面・側縁・凹面狭端縁・凸面広端縁には丁寧なヘラケズリを施す。胎土は精緻であり、石英・長石等の微細な粒を含む。色調はおおむね淡青灰色。丸瓦I B類とセットになる平瓦であると思われる。10は26トレンチから出土した個体で、全長40.3cm、広端幅約30cm、狭端幅24.3cm、最大厚2.4cmを測る。胎土には若干の黒色粒が混じっている。

III A類 (第63図12・13)

凸面に繩目印きを施す平瓦のうち、最も一般的なもの。繩目の粗さは軒平瓦I類と同程度である。金堂周辺をはじめとして、東方建物や築地など、あらゆる地点において高い割合で出土する。特に東方建物では出土する平瓦の大部分を占め、寺院全体での出土総量が最も多いという印象を受ける。また、金堂の基礎化粧に使用されており、奈良時代後半の建物改修時に使用されていたことがうかがえる。しかし、凹面の布目・色調・胎土などは各個体間の差が大きく、詳細な観察を行えばさらに細分が可能となるものと思われる。側縁・端縁にはヘラケズリを施すものと施さないものがある。凸面側の側縁を大きく斜めに削り落としている個体がまれにある。凹面には糸切り痕が顕著に残るものがある。色調が軒平瓦I類と同様の淡灰色・淡黒灰色のものは金堂周辺に多く、濃青灰色のものは比較的東方建物周辺や寺城北西端部の廃棄瓦溜り(13トレンチ)に多い。また、淡褐色で焼きあがりのものもろいものは、どちらの地点にも多い。12は9トレンチ出土の個体で胎土に若干の茶色粒を含み、色調は淡茶褐色から灰色を呈する。13は23トレンチ出土の個体で、凹面の布目が細かい。凹面側の側縁には幅広のヘラケズリを施している。いっぽう凸面側の側縁は斜めに削り落とされている。胎土は比較的精緻だが、微細な砂粒を含んでいる。色調は暗青灰色を呈する。

III B類 (第64図14)

凸面に細かな繩目印きを施すもの。平瓦III類の中では最も個体数が少ないが、東方建物の周辺で散見される。凹面側の側縁・端縁にはヘラケズリを施す。色調は淡褐色で、胎土は粗く、2mm以下の石英粒や茶色粒を多く含む。14は6・7トレンチ出土の個体で、狭端幅約24.5cm、最大厚1.8cmを測る薄手の平瓦である。胎土は粗雑で、石英粒等のほか茶色粒も多く含む。色調は淡褐色を呈しており脆い。

III C類（第64図15）

凸面に粗い縄目叩きを施すもの。金堂周辺からもいくらか出土するが、寺城北西端部の廃棄瓦溜り（13トレンチ）からの出土量が多い。凸面には軒平瓦Ⅲ類と同様の粗い縄目叩きが施されている。叩きの方向はおおむね側縁に平行しているが、若干斜方向になっている部分もある。また、多方向から乱雑に施されている個体もある。瓦の大きさ・布目の粗さなどは個体によってばらつきがある。凹面に糸切り痕が残っているものもある。広端幅と狭端幅の差があまりなく、中間部分の幅が最大になる個体がある。色調は青灰色のものと淡褐色のものとがある。胎土は非常に粗く、淡褐色のものは石英・長石粒を含み、青灰色のものは黒色粒と大粒のカサリ礫を含む。15は32トレンチから出土した個体で、全長35.6cm、狭端幅23.6cm、最大厚3.9cmを測る。凹面側の側縁・端縁にはヘラケズリを施している。胎土には黒色粒と径6mm以下の小礫を多量に含み、色調は灰色を呈する。

（5）鬼瓦

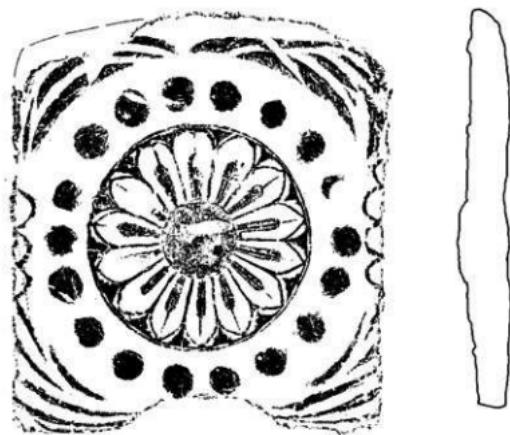
鬼瓦は26トレンチ、35トレンチから合計3個体分出土しており、2型式に分類できる。

I類（第66図1）

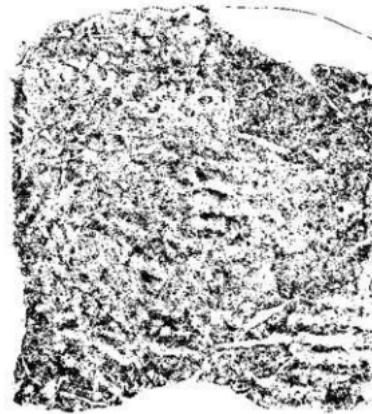
金堂北東角の軒先にあたる26トレンチで出土した。単弁14弁蓮華文を主文とする。蓮弁の形状は、山田寺式軒丸瓦の系譜を引く軒丸瓦I類と共通している。中房は高く突出しており、上半部に指の圧痕が残る。蓮子はきわめて不明瞭で、右下部の1カ所と中央の1カ所が辛うじて確認される程度である。軒丸瓦I類と同じく、子葉から蓮弁の先端にかけて、中央に1本の稜線がとおる。弁の形状は軒丸瓦I類とやや異なり、先端が尖っている。しかし、左上部の2枚の弁だけは先端が尖っておらず、間弁のほり込みもありまいなため、范が欠損していた可能性がある。蓮弁の外側には直径2.5cm程度の大粒の珠文18をめぐらす。珠文の高さは数mmから2cm程度とまちまちであるが、珠文の降起をより高く見せるため、後からさらに粘土塊を付着している部分が2カ所ある。外区には突線により表現された半円文と、意味不明の弧を描いた文様が展開する。両脇の半円文の数は右側では4、左側では3である。側面はケズリ調整、裏面はナデ調整である。縦33.0cm、横29.8cm、厚さ2.8cmを測る。上端辺は若干の丸みをもつ。胎土は比較的粗く、直径5mm以下の石英・長石粒が顕著に認められ、軒丸瓦I類の粗い胎土に酷似している。色調は灰白色。軒丸瓦I類と同じく創建期に比定される。金堂北東角にあたる26トレンチでは、軒丸・軒平瓦が横一列に並ぶような形で検出されたため、軒が倒壊した時点からあまり瓦が移動していないことが予想される。当鬼瓦はその軒平瓦の直上、北東角部分から完形に近い状態で出土しており、軒先に近い隅棟の先端に使用されていたと考えられる。

II類（第67図2・3）

三葉状の大きな鼻と耳をもつ鬼面文鬼瓦である。毛利光俊彦氏の分類する平城宮IV式B⁽¹⁾に近い。26トレンチ出土の破片数点を接合して右上半部2がほぼ完成した。同じ箇所からは右の耳部分と部位不明の小破片が出土しているほか、35トレンチでも左頭部の巻毛部分の小破片3が出土している。外形はアーチ形で、外縁に尖帯文を2重にめぐらす。頭には巻毛がみられる。鼻と瞳は高く突出させ、木葉形の耳を付している。眉間に固定のための釘孔が穿たれている。釘孔の径は2.0cmである。最も大きい破片の大きさは縦28cm、横23cm、厚さは凹部で3.7cm、瞳で5.6cmを測る。裏面・側面に縄目叩きが顕著に残る点は軒丸瓦Ⅲ類・軒平瓦I類と共に通する手法であるが、縄目がやや粗い点はむしろ軒平瓦Ⅲ類に近い。縄目叩きは裏面では横方向、側面では斜め右上がりに施されている。胎土はやや粗く、微細な砂粒が多くみられるが、大粒の石英等は少ない。色調は表面が白灰色から淡暗灰色、内部が暗灰



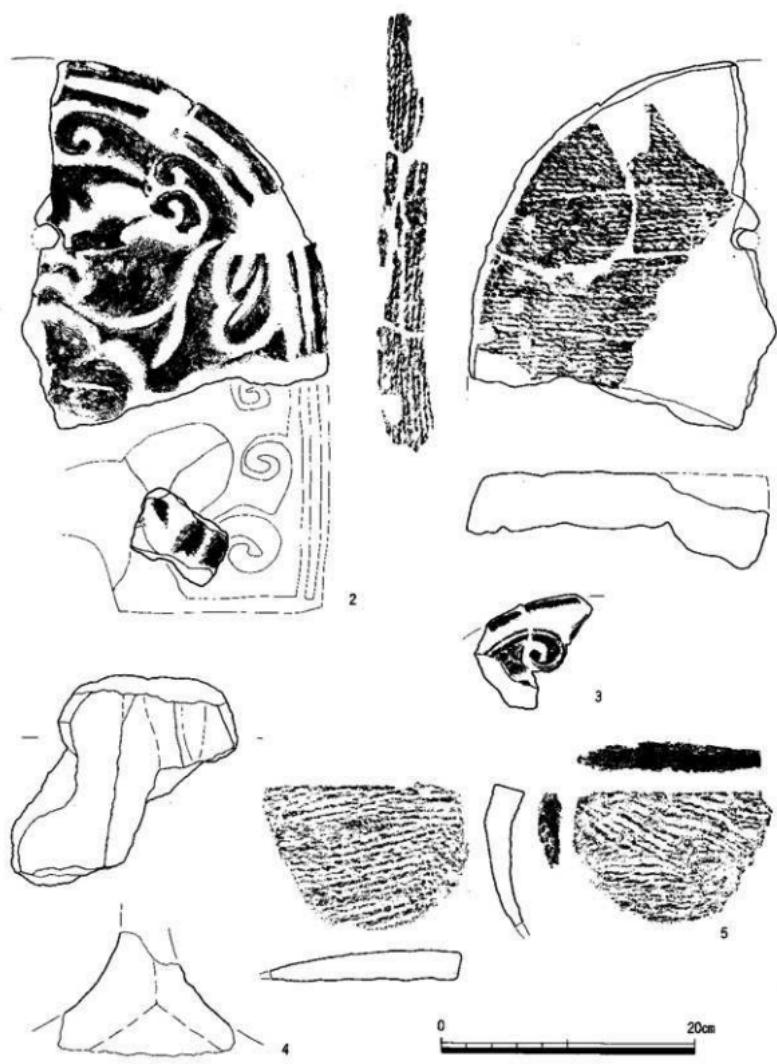
I類



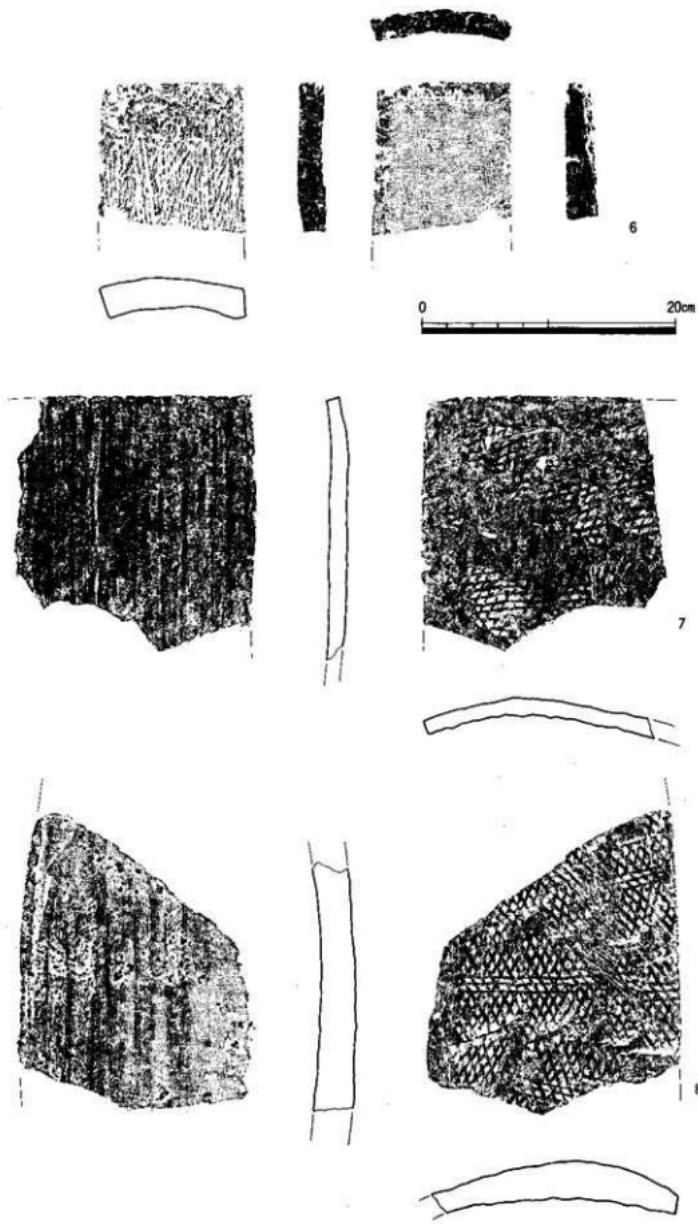
1



第66図 鬼瓦 I類実測図 (1/4)



第67図 鬼瓦 II類・鳥尾・面戸瓦実測図 (1/4)



第68図 道具瓦実測図 (1/4)

色を呈する。奈良時代後半の金堂改修に伴って設置されたものと思われる。備中国分寺出土の鬼瓦に類似しており、軒丸瓦・軒平瓦と同じく同范である可能性もあるが、両者はともに破片としての出土であるため、同范か否か確認するのは困難である。26トレンチ出土の個体は鬼瓦Ⅰ類と同じく金堂に使用されていたものと考えられるが、その出土状況と、Ⅰ類よりもひとまわり大きいつくりから、より高い部位の鬼瓦として使用されていたと推定される。

(6) 鳥尾 (第67図4)

鳥尾の破片が32トレンチの瓦溜りから1点出土した。縦17cm、横17cm程度の小破片であり、右側面の縦帯のあるあたりの破片である。ただし、外面は完全に剥離してしまっているため、文様は確認できない。腹部外面はナデ調整、内面は縦方向にヘラケズリを施している。胎土は粗く、石英・長石粒を多く含む。色調は背部が灰褐色、腹部が暗灰色である。

(7) その他の道具瓦 (第67~69図)

道具瓦として使用していた瓦の多くは、丸瓦・平瓦を打ち欠いて成形したものであったと思われるが、一部に焼成前に成形されたものがある。

5は東方建物基壇南辺包含層出土の面戸瓦である。平瓦を利用して成形しており、凹面・凸面とともに平瓦Ⅲ C類と同じ粗い繩目叩きで調整している。右側には端面が残っているが、左側は先細りに薄くなっている。胎土は粗く、大粒の小石や砂粒を多く含む。色調は褐色を呈し、非常に脆い。

6は10トレンチの溝から出土した熨斗瓦である。幅は約11cm、厚さは1.8~2.4cmで、凸面には平瓦Ⅲ A類と同様の繩目叩きがあることから、平瓦Ⅲ A類を焼成前に半裁したものと思われる。凹面の側縁・端縁には軽くヘラケズリを施すが、切断した側の側縁には行わない。凹面には布目痕・糸切り痕が残る。胎土は粗く、白色粒・黒色粒を多く含む。色調は淡灰色で、凸面には自然釉がかかる。

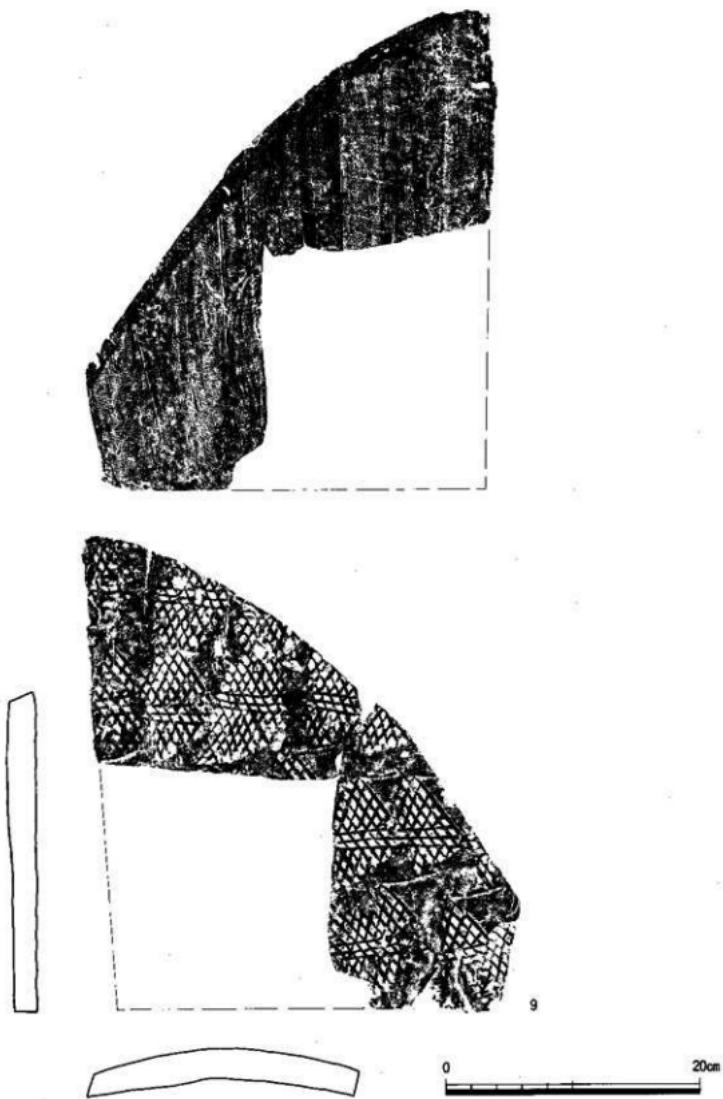
7は26トレンチ、金堂北東角の瓦溜りから出土した平瓦であるが、厚みが1.1~1.5cmと通常の平瓦の半分程度しかない。凸面は平瓦Ⅰ E類と同じ小形斜格子目叩きを施した後ナデ調整、凹面は布目を縦方向のナデ調整によって消している。また、凹面には模骨痕が顕著に残っている。胎土はやや粗雑で、石英粒を多く含んでいる。色調は青灰色で硬質である。

8は32トレンチ、金堂南側の瓦溜りから出土した平瓦で、通常の平瓦よりも横幅が狭く、中央部だけが特に厚い特殊な形状の瓦である。厚さは側面で1.6cm、中央部で3.2cmを測り、凸面には平瓦Ⅰ E類に似た小形斜格子目叩きを施している。凹面には模骨痕が顕著に残り、布目を一部ナデ消している。胎土はやや粗雑で、大粒の石英・長石粒のほか、黒色粒を多く含む。色調は暗青色で硬質である。7・8はともに全体の形状は不明であるが、特殊な部位に使用されていた瓦であると思われる。

9は26トレンチ、金堂北東角の瓦溜りから出土した隅切瓦である。平瓦Ⅰ A類の広端側の一隅を焼成前に切り落とした後、凹面側の側縁にヘラケズリを施している。隅切の角度は狭端側で約40°を測るが、その形状は直線ではなく若干の弧を描いている。凹面には模骨痕と布目が残り、一部に縦方向のヘラケズリを施している。色調は灰色であり、胎土は白色粒が多く混じるやや精良なものである。

註

- (1) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」『奈良国立文化財研究所学報第38冊 研究論集IV』1980年



第69図 半切瓦実測図（1/4）

第1表 軒丸瓦観察表

(単位: cm)

番号	型式	出土地点	瓦		内区		外区		色調	胎土	備考	
			直径	側厚	中筋幅	外筋幅	刮擦痕	刮擦跡				
1	I類	32-金堂雨落溝	16.6	3.4	3.2	13.3	-	1.46	1.4	明褐色	細緻・石英粒多い	文様表現シャープ
2	I類	33-金堂雨落溝	-	3.7	3.1	12.7	-	1.3	1.5	淡明褐色	細緻・石英粒多い	押圧により蓮子消失
3	I類	9-金堂瓦溜り	-	-	2.9	12.6	-	-	-	淡明褐色	細緻・石英粒多い	蓮弁の一部に押圧
4	I類	32-金堂雨落溝	16.0	3.9	3.1	12.5	-	1.43	1.5	濃青灰	細緻・石英粒多い	中房・蓮弁に押圧
5	I類	23-東方建物基壇上	-	3.65	2.9	12.3	-	1.37	1.8	淡青灰	細緻・石英粒多い	全面に押圧痕著
6	I類	8-回廊東側溝	-	3.33	3.0	12.2	-	1.48	1.2	青灰	細緻・石英粒多い	押圧により蓮子消失
7	I類	32-擾乱土層	-	-	3.0	-	-	-	-	青灰	細緻・石英粒多い	押圧痕はなし
8	II類	9-金堂瓦溜り	16.4	6.34	5.1	12.0	0.8	1.6	0.7	黄白褐	細砂・微細な白色粒多い	
9	II類	35-塔瓦溜り	-	-	5.1	-	-	-	-	淡青灰	微砂	
10	II類	32-擾乱土層	-	-	-	-	2.4	1.2	0.8	淡青灰	微砂	
11	III類	26-金堂瓦溜り	16.5	3.6	5.9	11.2	1.85	0.9	0.35	灰	細砂・黒色粒多い	完形・全長42.5
12	III類	26-金堂瓦溜り	16.8	3.65	6.0	11.3	1.8	1.0	0.25	灰	細砂・黒色粒多い	完形・全長43.0
13	IV類	6・7-西側廻廊地土	15.9	-	6.1	11.0	-	1.38	0.3	淡褐色	細砂	
14	V類	38-柱穴	15.8	2.71	6.0	11.5	0.6	1.7	0.5	淡褐色	細砂	
15	V類	6・7-壁石抜け跡	15.6	3.9	6.0	11.6	1.3	1.2	0.45	淡灰褐	細砂	
16	V類	6・7-包含層	16.9	4.38	6.0	11.8	1.2	1.6	0.3	褐	細緻・石英粒多い	
17	VI類	5-溝東側	14.6	4.53	3.0	11.1	-	2.0	1.2	青灰褐	細砂	

第2表 軒平瓦観察表

(単位: cm)

番号	型式	出土地点	瓦当			内区		外区		色調	胎上	備考
			上弦幅	下弦幅	瓦当厚	幅	厚	上厚	下厚			
1	I類	26-金堂瓦溜り	26.6	26.0	5.7	24.2	2.7	0.85	2.0	灰色	細砂・黒色粒多い	完形・全長41.1
2	I類	26-金堂瓦溜り	28.1	24.8	4.8	24.9	2.5	0.4	1.8	灰色	細砂・黒色粒多い	ほぼ完形・全長39.5
3	I類	26-金堂瓦溜り	(26.8)	25.6	5.06	24.6	2.65	0.4	1.85	灰色	細砂・黒色粒多い	
4	II類	過去の採集資料	-	-	7.19	-	-	-	-	淡灰褐	細緻	
5	II類	9-金堂瓦溜り	25.8	23.4	5.0	21.9	2.5	0.3	1.65	青灰褐	細砂・白色小粒多い	ほぼ完形・全長32.8
6	II類	23-包含層	-	-	5.0	-	2.4	0.4	2.1	濃青灰	細砂	
7	II類	23-包含層	-	-	4.0	-	2.25	0.3	1.6	黑青	細砂・黒色粒多い	瓦当面に自然粒
8	III類	35-塔瓦溜り	(21.8)	26.0	4.6	(21.7)	3.9	0.2	0.5	淡白褐	細砂・茶色粒あり	
9	IV類	26-金堂瓦溜り	-	-	5.8	-	4.7	-	1.2	淡黒	細緻・石英粒多い	ほぼ完形・全長39.0

②. 土器

土器は、寺域各所から合計11箱分出土している。特に金堂周辺では比較的多数の土器が出土しており、その出土量は4箱にも及ぶ。その他にも数ヶ所でまとまった量の土器が出土している。

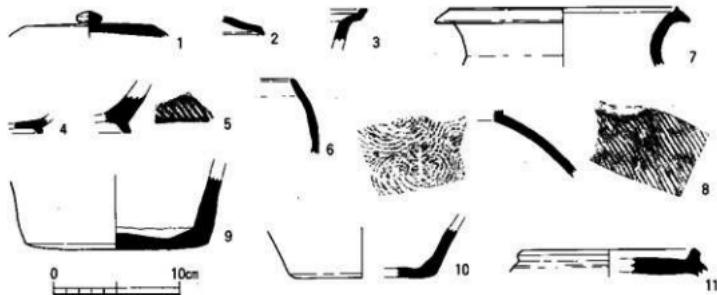
(1) 金堂・塔周辺出土の土器 (第70・71図)

金堂の周囲から多数の土器が出土している。塔周辺は調査区が小さかったためそれほど出土していないが、1962(昭和37)年の塔の調査でも残りのよい土器がかなり出土していることから、金堂と似たような状況であることが予想される。土器はほとんどが細片と化しているが、その中では土師質の椀と壺が最も多い。また、一部に須恵器も混じっている。

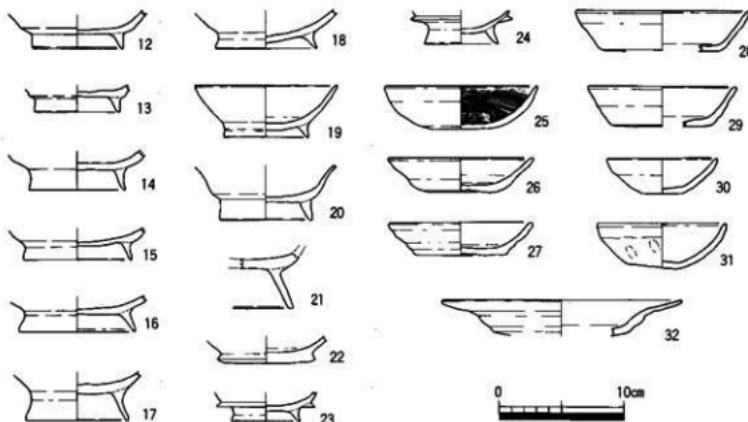
須恵器のなかで最も多いものは甕であるが、ほかにも壺・長頸壺・鉢などが出土している。11は台付壺の底部を反転して利用した転用窯である。体部を丁寧に打ち欠き、底部を水平に近い状態にして使用している。関戸廃寺では、1992(平成4)年の調査において西側築地の内側から円面窯の小破片が出土しており、窯は今回で2点目を数える。

土師質の椀はほとんどが輪高台であり、外反の度合が弱いもの(12~14・20)と強いもの(18・19)、高台の径が大きいもの(15・16)、高く立ち上がった高台をもつもの(17)などがある。また、14・16・18の高台は端面がなく、シャープに尖っている。22は関戸廃寺ではあまり出土しない平高台の椀である。底部はへら切りで、体部との境に明瞭な段をもつ。23・24の内面黒色土器は、体部下端にはほぼ水平方向に張り出した突帯をもつ特徴的な形態の椀である。器壁は薄く、高台端部はシャープに尖っている。突帯をもつ土器はこの2点のみであるが、胎土・焼成は他の土師質土器と近似しており、搬入品であるとは思われない。25の内面は全面にハケメ状調整を施し、外面は口縁部のみヨコナデ、底部は押圧調整である。底部と体部の境界は不明瞭である。30と31も同じく内面に幅広の板状工具痕跡が残り、外面は全面押圧調整である。27・32の体部はヨコナデによる凹凸が激しい。

これらの土器は大多数が瓦割りに混じっての出土であり、金堂・塔廃絶の時期に近いものが多いと思われる。特に土師質土器はかなりまとまった時期のものが出土しているが、毎戸遺跡出土土器の一部、奥坂遺跡No124建物出土土器などと類似しているものが多く、ほとんどが10世紀末から11世紀前半に位置付けられるものであろう。



第70図 金堂・塔周辺出土土器実測図 1 (1/4)

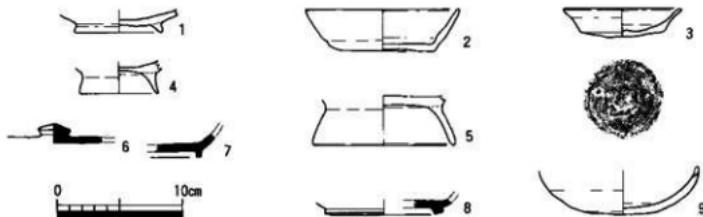


第71図 金堂・塔周辺出土土器実測図 2 (1/4)

(2) 東方建物周辺出土の土器 (第72図)

東方建物の周囲には建物廃絶に伴う瓦溜りがなく、土器の出土量は少ない。南側軒先の浅い雨落溝から若干の土師質土器が出土しているものの、総量は1袋程度である。しかし、生活関連の空間として利用されていた南側の38トレチや、西側の5トレチではややまとまった量の土器が出土している。

2は東方建物の南辺の包含層から出土した土師質壺で底部はヘラ切り後、指頭圧に近いナデ調整を施す。4・5は38トレチの溝から出土した土師質碗である。4の胎土・色調は1の碗に近い。5の高台は高さ3cmで若干内湾気味である。溝からは他にも土師質の壺・高台付皿・須恵器甕などが出土しており、その下限は10世紀末から11世紀前半になると思われる。これは、1979(昭和54)年の調査結果とも一致する。6~9は5トレチ出土の土器である。9の黒色土器はやや丸みを帯びた体部を持ち、内面はナデ調整で仕上げている。



第72図 東方建物周辺出土土器実測図 (1/4)

(3) 38トレンチ窯跡出土の土器 (第73図)

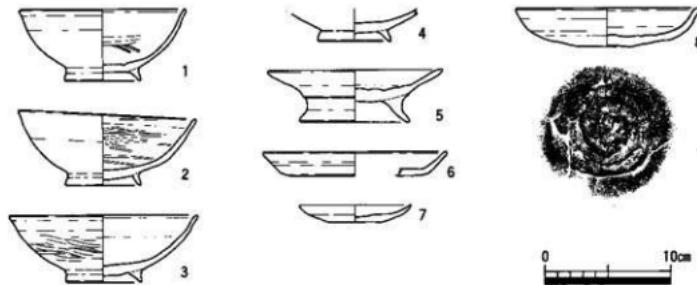
38トレンチでは、土師質土器を焼成したと思われる窯が出土している。窯跡の西半は調査区外であったため検出していない。図示した土師質土器以外にも細片が若干出土したほか、細い網目叩きの平瓦ⅢB類も出土している。ただし、この窯で瓦まで焼成したとは思われない。他の地点とは異なり、上器の残存率が高い。1と8の破片は、焼成室内と灰原の両方から出土している。その他のものは全て焼成室内床面からの出土である。

1の内面は工具使用ナデ後、上半部に太い横方向のヘラミガキを施している。外面は摩滅しているが、おそらく同様のヘラミガキが施されていたものと思われる。2はやや歪んだ器形をしており、内面には丁寧なヘラミガキが施される。高台は外反気味である。3の外面は太い横方向ヘラミガキの後、口縁端部のみヨコナデを施す。内面には工具使用ナデがみられる。これらの椀の口縁端部はいずれもヨコナデ調整のため、ごくわずかに外反している。5は高台付の皿である。内外面はヨコナデ調整であり、胎土・色調は1~4の椀に近い。高台は大きく外反し、その端面には乾燥時の台板の平行木目痕が残る。8は底部ヘラ切りの皿で、内面は一見ヨコナデにも見える丁寧な工具使用ナデで仕上げる。

この一群と同じ特徴を有する土器は寺院内の他の場所では発見されていない。椀は沖の店1号窯や鹿田遺跡I地点井戸⁽¹⁾21出土のものと比較的近い器形・法量を有しているが、口縁端部の外反が非常に弱い点などが若干異なっている。沖の店1号窯では熱残留磁気の測定結果から12世紀後半の年代が与えられているが、他の資料からみてもう少し古く位置付けられるとも考えられている。

したがって、本窯跡出土の資料もおおまかに11世紀後半から末までの時期を想定しておきたい。

窯が營まれた時期には、すでに金堂や塔をはじめとする主要な施設は廃絶していたはずであり、工房的な性格を持ち合わせた生活空間だけが辛うじて持続して使用されていたものと考えられる。

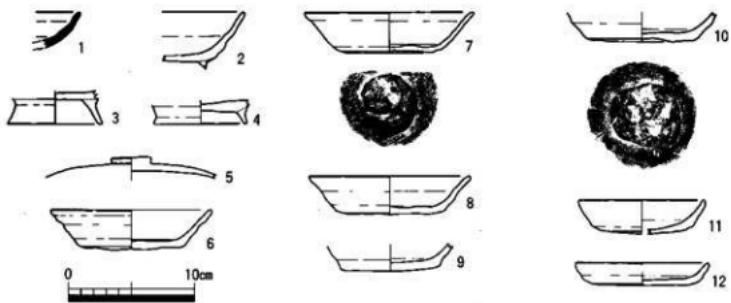


第73図 38トレンチ窯跡出土土器実測図 (1/4)

(4) 27トレンチ溝出土の土器 (第74図)

27トレンチの溝からは、瓦のほか、各種の土師質土器・須恵器の破片が2箱分出土した。特に下層からは、やまとまつた量の环を中心とする土師質土器が出土している。

6~11は土師質環である。6・8は底部をヘラ切り後ナデ調整、7・10はヘラ切りのままで、7~10・12は内外面を目の細かな板状工具によってヨコナデ状に調整している。その他の土師質土器にも不明瞭ながら工具によるヨコナデ痕がみえる。4・6~10・12は茶色粒が少し混じる精緻な胎土である。これらの土師質土器の多くは10世紀代のものであろう。

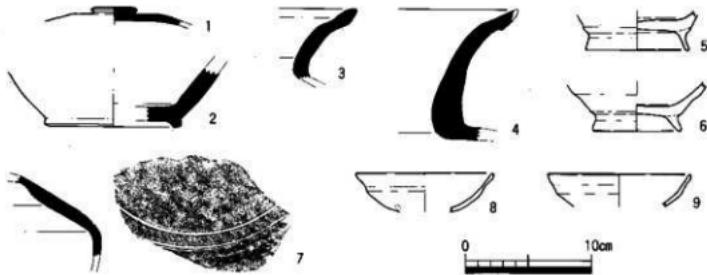


第74図 27トレンチ溝出土土器実測図（1/4）

(5) その他の土器 (第75図)

寺域東限に近い2トレンチ・31トレンチ近辺には廃棄されたと思われる土器の細片を多量に包含した層が存在する。特に2トレンチでは1箱分の土器が出土しているが、大きい破片は非常に少ない。器種は須恵器の壺・壺・甕、土師質土器の碗・壺・皿などさまざまである。これらの土器は寺院存続期間中、長期にわたって投棄されてきたものと思われる。7は西側築地の内側、24トレンチから出土している。8と9は寺域北西端部にあたる13トレンチから出土した土師質碗である。口縁端部はヨコナデが顯著であり、体部外面には指頭圧痕が残る。他の土器と比較してやや時期が下るものであると思われるが、2点のみの出土であり、その性格を具体的に位置付けるのは困難である。しかし、主要伽藍が失われた後も繼續して営まれていた生産・生活関連施設が完全に廃絶した時期を考える際のひとつの参考となるであろう。

寺域内からはこの他に鎌倉時代の土器などが数点出土しているが、いずれも細片であり、上位の包含層からの出土であるため、関戸磨寺に直接関係する資料にはならないものと思われる。



第75図 その他の土器実測図（1/4）

第3表 土器観察表
金堂・塔周辺出土土器

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴	色調	胎土
			L径	底径	高さ			
1	須恵器 坏	32-金堂瓦溜り	-	-	-	外表面回転ナデ	淡青灰	繊維
2	~ 坏	9-金堂瓦溜り	(8.7)	-	-	口縁部2割残存、内外面回転ナデ	淡青灰	繊維
3	~ 坏	32-埋乱土層	-	-	-	口縁部1割残存、内外面回転ナデ	淡青灰	繊維、黒色粒多い
4	~ 坏	32-金堂瓦溜り	-	-	-	底部1割残存	(内)淡青灰 (外)淡青灰	繊維
5	~ 壺	32-金堂瓦溜り	-	-	-	底部1割残存、外表面平行叩き、内面工具使用ナデ	淡青灰	繊維
6	~ 鉢	9-金堂北側堆積層	-	-	-	口縁部1割残存、内外面回転ナデ	灰色	繊維
7	~ 壺	32-埋乱土層	18.0	-	-	口縁部2割残存、口縁端上方への感張シャープ	暗青	繊維
8	~ 壺	32-金堂瓦溜り	-	-	-	肩部2割残存、外表面平行叩き、内面同心円当て具痕	暗青	繊維
9	~ 壺	32-金堂雨落溝	-	14.5	-	底部内面円盤状軸上無残時のユビナデ痕跡	(内)灰 (外)灰灰	粗砂
10	~ 壺	32-金堂瓦溜り	-	11.6	-	底部4割残存、内外面回転ナデ	灰	粗砂
11	~ 軸用碗	33-金堂南落溝	-	13.6	-	4割残存	(上)暗青灰 (下)淡灰	繊維
12	土師質 瓶	32-金堂瓦溜り	-	7.3	-	内外面ヨコナデ	淡灰褐	繊維、赤色粒あり
13	~ 梗	32-金堂瓦溜り	-	6.8	-	内外面ヨコナデ、内面被熱して黒化・焼土付着	淡灰褐	繊維
14	~ 梗	32-金堂雨落溝	-	7.6	-	内外面摩滅	(内)淡褐 (外)淡桃褐	粗砂、茶色粒多い
15	~ 梗	9-金堂瓦溜り	-	8.6	-	内外面摩滅	淡灰褐	繊維、茶色粒多い
16	~ 梗	26-金堂瓦溜り	-	9.2	-	内外面摩滅	淡白褐	繊維、大陸石炭あり
17	~ 梗	33-金堂雨落溝	-	8.1	-	内外面ヨコナデ	淡褐	粗砂
18	~ 梗	32-金堂雨落溝	-	8.0	-	内外面ヨコナデ	淡白褐	繊維、赤色粒あり
19	~ 国	33-金堂瓦溜り	11.4	6.8	4.1	口縁部8割欠損、内外面摩滅	淡灰褐	粗砂
20	~ 梗	32-金堂瓦溜り	-	7.4	-	内外面摩滅	淡灰褐	粗砂、茶色粒多い
21	~ 高台	32-金堂瓦溜り	-	-	-	内外面摩滅	淡灰褐	粗砂
22	~ 梗	32-金堂瓦溜り	-	7.8	-	外表面に発掘作業時の傷痕あり	淡灰褐	繊維
23	黒色土器 梗	9-金堂瓦溜り	-	5.5	-	内外面摩滅	(内)黒 (外)淡桃灰	繊維、茶色粒多い
24	~ 梗	9-金堂瓦溜り	-	5.6	-	内外面摩滅	(内)黒 (外)淡灰褐	粗砂、茶色粒多い
25	土師質 梗	32-包含層最下層	12.2	6.6	3.4	ほぼ完形、内面口縁部に煤付着	淡褐	粗砂
26	~ 坏	32-金堂雨落溝	11.6	6.2	2.7	3割残存、内外面ヨコナデ	白褐	粗砂
27	~ 坏	32-金堂雨落溝	11.4	7.4	2.6	3割残存、内面口縁部に煤付着、内面に燒土付着	淡白褐	繊維
28	~ 坏	32-金堂瓦溜り	13.8	9.6	3.2	2割残存、内面口縁部に煤付着、内外面工具ヨコナデ	淡灰褐	繊維、赤色粒
29	~ 坏	32-金堂瓦溜り	11.8	8.0	3.2	3割残存、内外面摩滅、工具使用ヨコナデ	白褐	粗砂、赤色粒多い
30	黒色土器 梗	34-塔南落溝	8.8	3.4	2.9	3割残存	淡褐	粗砂
31	土師質 瓶	21-塔東側の溝	10.2	3.9	3.5	口縁部5割欠損、口縁部に煤付着	淡灰褐	粗砂、黒色粒あり
32	~ 高台付	35-塔北溜り下層	18.9	-	-	2割残存、内外面ヨコナデ、内面に燒土付着	淡灰褐	粗砂、赤色粒多い

東方建物周辺出土土器

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴	色調	胎土
			L径	底径	高さ			
1	土師質 梗	6-7-化粧抜跡	-	6.8	-	底部9割残存、摩滅激しい	淡明褐	繊維、茶色粒多
2	~ 坏	6-7-基礎南辺 包含層	12.6	7.6	3.2	やや重み、9割残存、内外面ヨコナデ	淡灰褐	精良
3	~ 小瓶	6-7-振形1下部	9.4	6.6	2.3	口縁部3割欠損、底部ヘラ切り	淡褐	繊維
4	~ 国	38-溝	-	7.2	-	底部9割残存、摩滅激しい、高台端部は尖る	淡明褐	粗砂、茶色粒多
5	~ 高台	38-溝	-	11.4	-	高台4割残存、若干内湾気味、高台高3cm	淡灰褐	精良
6	須恵器 坏壺	5-包含層	-	-	-	天井部は平ら	青灰	繊維
7	~ 坏	5-包含層	-	-	-	高台2割残存	淡青灰	繊維
8	~ 坏	5-包含層	-	9.4	-	高台2割残存	青灰	繊維
9	黒色土器 梗	5-包含層	(12.6)	(5.8)	(3.8)	完形に近い、外表面摩	黒褐	繊維

38トレンチ発跡出土土器

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴	色調	胎土
			口径	底径	器高			
1	土師質 梶	焼成窓・灰原	13.2	5.8	5.7	完形に近い、外面摩滅	淡青緑・淡褐	細砂、若干の茶色粒
2	〃 梶	焼成窓内	14.0	6.0	5.7	完形に近い、外面摩滅	(内) 淡明緑 (外) 淡黄褐	粗砂、茶色粒多
3	〃 梶	焼成窓内	(14.8)	6.0	5.3	口縁部9割欠損、内面剥離	明褐色	細砂、若干の茶色粒
4	〃 梶	焼成窓内	-	5.9	-	内面工具使用の丁寧なナデ調整	橙褐	細砂
5	高台付属	焼成窓内	13.7	8.5	4.1	完形に近い、内外面摩滅	赤褐	粗砂、茶色粒多
6	〃 盆	焼成窓内	14.4	10.6	1.9	口縁4割残存、ヨコナデ調整	白褐	細砂、若干の茶色粒
7	〃 小皿	焼成窓内	8.6	4.4	1.3	ほぼ完形、序盤激しい、底部へラ切り	淡褐	粗砂、若干の茶色粒
8	〃 盆	焼成窓・灰原	14.4	10.5	3.1	完形に近い、外面剥離	淡褐	細砂、若干の茶色粒

27トレンチ溝出土土器

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴	色調	胎土
			口径	底径	器高			
1	須恵器 环	溝下層	-	-	-	内外面ヨコナデ	淡青灰	微砂
2	上師質 梶	溝底部	-	-	-	3割残存、内外面ヨコナデ	淡灰白褐	細砂
3	〃 梶	溝下層	-	7.6	-	外反する高台に広い窪面	淡灰白褐	粗良
4	〃 梶	溝下層	-	6.8	-	直立気味の高台	淡灰白褐	精良
5	〃 环蓋	溝下層	-	-	-	摩滅激しい	(内) 淡灰褐 (外) 明灰褐	粗砂、大粒の石英
6	〃 环	溝下層	(12.8)	8.2	3.1	口縁部9割欠損、内外面ヨコナデ	淡灰褐	微砂
7	〃 环	溝下層	13.4	7.7	3.2	4割残存	淡灰褐	微砂
8	〃 环	溝下層	(12.8)	7.8	3.1	口縁部8割欠損	淡灰褐	微砂
9	〃 环	溝下層	-	7.8	-	底部のみ完存	淡灰褐	微砂
10	〃 环	溝下層	-	8.8	-	底部のみ完存	淡灰褐	微砂
11	〃 环	溝下層	10.1	5.0	2.7	I縁部3割残存	白褐	細砂、茶色粒多
12	〃 盆	溝下層	10.6	10.0	1.8	II縁部2割残存	淡灰褐	精良

その他の土器

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴	色調	胎土
			口径	底径	器高			
1	須恵器 环蓋	2・包含層	-	-	-	つまみ部5割残存、内面大井部ナデ	青灰	細砂、大粒の石英
2	〃 杯	2・包含層	-	-	-	高台部3割残存、側部外面ナデ・内面ヨコナデ	青灰	粗砂、大粒の石英
3	〃 杯	2・包含層	23.0	-	-	II縁部3割残存、内外面回転ナデ	青灰	細砂
4	〃 杯	3・包含層	-	-	-	II縁部ほとんど欠損、側部内面に同心円状に凹痕	(内) 灰 (外) 暗青	灰細砂
5	土師質 梶	2・包含層	-	8.2	-	内外面ヨコナデ	淡灰褐	細砂、茶色粒多
6	〃 梶	3I・包含層	-	7.0	-	外反する早い高台、外面にヨコナデによる段がつく	淡灰褐	微砂
7	須恵器 杯	24・包含層	-	-	-	肩部に2条の回線を施し、その間に刺文文を配する	(内) 青灰 (外) 青灰褐	細砂
8	土師質 梶	13・坑	11.0	-	-	口縁部4割残存	淡黄褐	粗砂
9	〃 梶	13・坑	11.4	-	-	口縁部4割残存	白褐	微砂

註

- 「毎戸遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 1974年
- 「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年
- 本報告書「付載2」
- 「昭和55年度の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981年
- 『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988年
- 武田恭彰「古代土器生産についての一考察(2)」「古代吉備」第12集 1990年
- 橋本久和「瀬戸内の中世上器」「中世土器研究序論」 1992年

③瓦塔（第76図）

今回の調査であわせて、30点の瓦塔片が出土した。また、過去の調査等で出土し、郷土館に収蔵されていた資料で、不明遺物として分類されていたものの中から、2点瓦塔と判明したものがあり、関戸廃寺から合計32点の出土ことになる。この旧蔵品については、付載で取り扱うべきだが、比較検討のため、あえてこの項で記載する。

出土した瓦塔片はいずれも小破片で原形が推測できる状態でなく、また、胎土・焼成の状態から数固体があったことが類推される。

1～8は、いずれも屋蓋部と考えられる。1は、上面に縱向きに線刻が施され、貼り付けられた突帯により丸瓦を表現している。上面は、ナデ調整が行われているが叩き調整のこん跡が若干のこり、裏面は、叩き調整のうえを粗くなっている。丸瓦の間の角度は30°開いており、もとは全周に12本取り付けられていたと考えられる。このことから平面形は、十二角形もしくは円形を呈すると考えられる。焼成は、良好で、灰白色を呈する。

2は平面形は円形を呈し、端部は、約120°の角度で上方に反り上がっている。この反り上がりの屈曲部には、小穴がうがたれている。また、この小穴にむけて線刻が施されている。上面、裏面ともにていねいなナデ調整が施されており、しっかりととした作りではあるが、焼成は、若干瓦質に近い。

3も屋根の端部であり、2とほぼ同形であるが、若干器壁が厚く調整もていねいである。上面には縦方向に突帯を貼付けて、降棟を表している。突帯の先端部は、肥厚させて竹管により、2つの円孔をあけている。これは、降棟の先に置かれた鬼瓦を表現していると考えられる。また端部の反り返り部分には、2と同様に排水のための小穴があけられている。この穴が、突帯の中間にあけられたと考えると突帯10本でちょうど全周するようになる。平面形は、円形もしくは、丸みをもった十角形が考えられる。焼成は、瓦質に近い。

4は円形の屋蓋部の端部である。上面には少し角張った粘土ひもを貼付け丸瓦を葺いた状態を表していると考えられる。粘土ひもは、そのまま張り付けるのではなく、上面に置いて、両側から他の粘度で貼付けており、貼りつけた上をていねいになでて仕上げている。この取付方法のため突帯の下には、若干の空間が出来ている。また、突帯の脇には、縦方向の線刻が1条施されている。突帯の先端は、軒先より前へ出ており、軒丸瓦を意識してか、十字の形に切り込みを行っている。

焼成は、非常に良好である。他に同一固体と思われる軒先部小片が1点ある。

5は、4に酷似した突帯の先端部と考えられる。4と異なり、十字の切り込みも深く、ていねいである。屋根への取り付きは、軒先より前へ出ず、ちょうど軒先の面とそろっていたと考えられる。胎土・焼成は、4に酷似しており、同一固体の別の階層の屋根に取り付けてあった可能性が高い。

6は、1、3などと同様に上面に丸瓦を表す粘土突帯の貼付けがあったものがはがれ落ちたと考えられる。また、軒先部分には、軒先の平瓦が葺かれた状態を表したと考えられる線刻表現が見られる。上面には、花弁の一部と見られる線刻の一部も確認される。

他に比べ微砂が多く2mm大の石英粒も若干含む。焼成も非常に悪い。

7、8は、いずれも軒先部分と考えられ、軸部の壁への取り付き部分のこん跡が確認される。この取り付きは、いずれの破片も軒先から約5cmである。軒先の平面形は他と異なり、直線的である。

屋蓋部と思われる破片は、他に4と同一形態の軒先部分と、7、8と同様に軸部への取り付き部分と思われる部分が各1点出土している。

9～16は、軸部と考えられる破片である。

9は、斗供部分を表現しており、縦に伸びる突帯は柱を表していると考えられる。斗供と思われる部分は、これ一点だけである。器壁は、出土中最も厚く、焼成も良好である。内・外面ともにナデ調整が行われている。

10は、軸部の上端部と考えられる破片であり、断面台形の粘土突帯をT字形に貼り付ける。内外面ともに叩きの痕跡が残り、作りもありていねいではなく、焼成もよくない。突帯で区画された中に先端の丸い工具による線刻を施しているほか、方形の透かし窓があるが、小片のため不明である。器壁は、若干内傾しており、横方向の突帯により上部構造物を受けていたとも考えられる。なお、突帯付け根で復元半径250mmを測る。

11は、出土した中で一番焼成はよく、非常に焼き縮まった感があり、他に同様の焼成のものはない。胎土も精製されており一際目立つ存在である。縦に突帯を貼り付け、ヘラ状のもので切れ込みを入れている。表面には、針状の工具により縦横に線刻が施されている。また透かし窓と思われる切れ込みが一ヵ所設けられている。

12は、10と胎土・焼成が類似しており、同一個体とも考えられるが内傾角度が異なる。また、線刻も先端のとがったヘラ状のものが使用されている。突帯には、上下方向に小穴が明けられている。

13は、横方向に突帯を巡らせ、その上方には、縦方向の線刻を施す。内面は、叩き調整の同心円の当具痕が残る。外面はナデ調整を行っている。突帯には、小穴を開けている。焼成は、瓦質である。

14は、突帯を縦横に巡らせ、突帯の上には、ヘラで刻み目を入れている。突帯の左右には、透かし窓が開けられている。外面には、針状のもので縦方向に条線を刻んでいる。焼成は、若干悪い。

15は、14と類似し、横方向に突帯を巡らせ、ヘラで刻み目を入れている。また、同様に針状のもので縦方向に条線を刻んでいる。焼成は、良好である。突帯の上下で透かし窓の位置がずれる。

16は、突帯で区画された中に蓮弁を思わせる花弁を表す線刻がある。突帯は、横を貼り付けた後、縦を貼付けている。内外面ともに、ていねいなナデ調整を行っており、横方向の突帯には、13と同様小穴が開いている。胎土は、よく精製されており、焼成は、瓦質である。

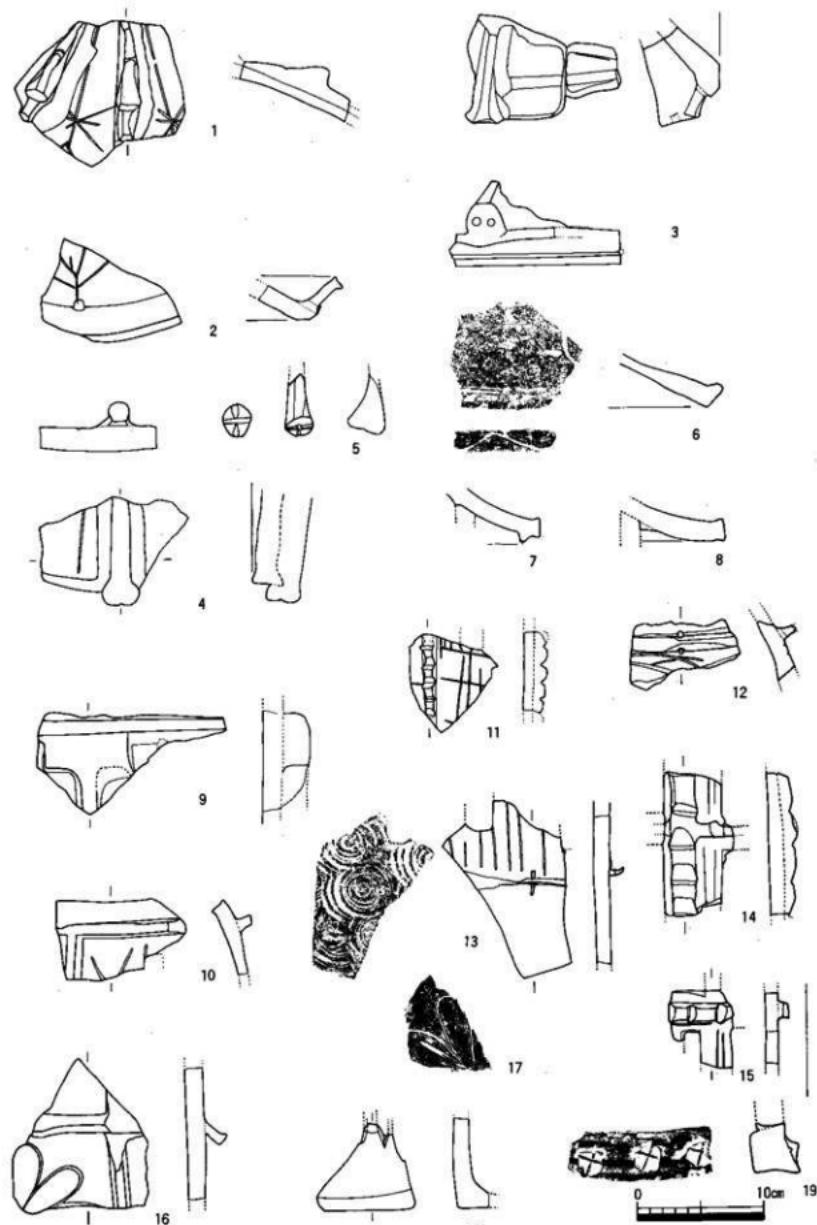
17は、胎土・焼成とともに16と酷似している。また、外面には、同様に花弁を線刻している。

18は、基底部と考えられる部位である。胎土は、砂粒が多く、焼成も少し悪い。上端部には、透かし窓の切り込みが集中しており、この小破片にも係わらず3つの窓が確認される。

19も、基底部と考えられる。元は、この上部に軸組が取り付いていたと考えられるが、はく離し、痕跡としてスサ痕が残る。外面及び底面にあたる部分は、ていねいなナデ調整が施され、外面には、十字のスタンプ文が若干右に傾いて押されている。スタンプは、直径20mmの円形で、十字を陰刻したもので押されており、まるで5をスタンプ代わりにした様な大きさ、文様である。

これら瓦塔の出土場所は、そのほとんどが、金堂と塔の間に位置する32トレンチ及び35トレンチからの出土である。32トレンチからは2、4、5、6、7、8、9、10、11、13、14、15、17、18が、35トレンチからは、1、3が出土した。この2カ所のトレンチ以外では、19が、4トレンチから、12が平成4年度調査で塔の西36mで検出した瓦溜りから、また16は郷土館に旧蔵されていたものである。図化しえなかった破片においても、そのほとんどが同様に32、35トレンチからの出土であるが、それ以外に、東方建物及び26トレンチの瓦溜りで各1点出土している。

32トレンチからの出土は、いずれもが2次的な移動により形成されたと思われる瓦溜りに混じて出土



第76図 瓦塔実測図 (1/4)

している。この2次的移動は、建物廃絶後間もなく行われた整理によるものと思われ、瓦の破損も余りなく、また、他の時代の遺物の混入もない。35トレンチからものは、塔の基壇化粧のすぐ外側の瓦溜りから出土した。32トレンチ同様瓦絶に伴う整理により形成されたと思われる。

これらの出土状況からは、瓦塔がもともと設置されていた場所を特定することはできない。しかしながら、このいずれのトレンチからの出土も遠くからの移動ではなく、ごく近い場所からの移動と考えられるため、いずれにせよ塔、金堂いずれかに設置されていたことがうかがわれる。

今回出土した瓦塔の特徴は、小破片で形状を類推しがたい面があるが、推測できるそのほとんどが、平面形が円形を呈するものである。円形の瓦塔は、ほとんど類例がなく、研究例では福岡県トギバ窯跡出土の星蓋部及び新潟県能登国分寺の軸部が知られるのみである。

ところが今回の出土に関し、資料の整理を行っていたところ、岡山県下でも、下記2遺跡で円形もしくは、八角形と考えられる資料が須恵磨寺、吉井磨寺で出土していることが確認できた。

いずれも表掲資料であるが、今回の例とほぼ同様の形態である。

瓦塔の出土例は、そのほとんどが関東、北陸、東海に集中しており、西日本での出土はごくまれな遺物である。また、関東等での出土例は、瓦、軒裏、斗供等をきちんと表現した形で作られており、非常にリアルである。このため研究事例は、斗供等の形態の変遷をとらえて編年を試みている。

しかし、西日本での事例は土製の塔・建物といった感じで、きちんと表現されておらず、かつ小破片が数点出土するといった状況である。このため、今回の出土例を含め、西日本の出土例は、編年考察がなされていない。

また、小破片での出土では、瓦塔と認識できない場合が多いと考えられる。このため、今後の調査で、より多くの資料が確認されてくると考えるが、ここでは、これから研究にゆだね、以下にこれまで、手元の文献上で確認できた、岡山県下の出土例を列記し、今後に期待したい。

県下瓦塔出土遺跡及び記載文献等

江見磨寺	岡山県立博物館特別展「岡山県の原始・古代」 1974年
須恵磨寺	宇垣匡雅「西谷遺跡」附載 長船町教育委員会 1985年
吉井磨寺	同上
備中国分寺	岡山県文化課葛原參事のご教示による
神力寺	間壁忠彦、間壁義子「岡山の遺跡めぐり」『岡山文庫』31 1970年
积塔様	倉敷市史

参考文献

- (1) 高崎光司「瓦塔小考」「考古学雑誌」第74巻 第3号 1989年
- (2) 善端直「北陸の古代瓦塔」「文化財学論集」1994年
- (3) 「小建築の世界」「飛鳥資料館図録」第12冊 奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館編集 1994年
- (4) 「木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報」第51冊3 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年

2. 金属製品

① 青銅製品

風招（第77図）

風招は、32トレンチ（塔と金堂の中間地点）の上層で出土した。

この層は、比較的新しい時期の整地により形成されたものと考えられ、この風招がいずれの建物に備わっていたものか不明だが、塔もしくは、金堂のいずれかで使用されていたものと考える。

風招は、約4割失われているが、ほぼ全形を復元し得る状態である。

大きさは、横幅124mm（推定復元）、高さ72mm（同）、厚さ0.5mmである。

形態は、上縁がまるい山形で左右の裾先が下方に広がる扇型を呈している。下縁は、双円弧状に割り込まれ、その割り込みがつくる突出は、鋭角で短く、左右の裾先を結ぶ線より下に伸びる。

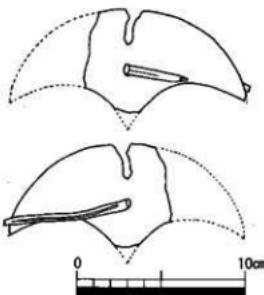
上縁中央部は、上縁部から21mmさがったところまで、欠損していた。これは、舌と接続するためにつけてあった釣り手の環の接合部がはずれたためにできた欠損と思われる。

また、ほぼ中央にせん孔し、一方の端部が細くとがった断面8の字型の銅管を差し込み曲げている。これは、環の欠損後、作られたものと考えられ、この管でちょうどヘアピン状に曲げ、挟みとめて、風鐸に再度取り付けたと考えられ、現状では、横向きになっているが、本来的には、上に伸び風鐸の舌に繋がっていたと考えられる。

風招の類例は、少なく、形態についての検討も余りされていないが、岩本正二・西口寿生両氏による検討考察によれば、形態の分かる例として8遺跡からの出土品及び、工芸品5点により、考察を加えている。⁽¹⁾これによると、風招を形態から2形式に分類されている。一つは、まるい山形の上縁の左右の裾先が直に垂れ、下縁が、双円弧状に割り込まれ、その割り込みがつくる突出は、鋭角で短く、左右の裾先を結ぶ線をこえることはない。また、環は、本体上縁中央につくりつけられているものでA形式としている。もう一つは、また、丸い山形をなす上縁裾先が外側に反転するのが特徴で、下縁中央の突出部がふくらみをもち、全体が開いた花弁状を呈するものであり、環が、本体につくりつける方式でなく、上縁に小円孔を穿ち別の金具を鉛留めにする小円孔に直接遊環を通して釣り下げる方式を取るものB形式としている。A形式には、金銅灌頂幡、銅板法華説相図、古法華山石仏、飛鳥寺瓦窯出土平瓦に描かれたものと山田寺塔跡、伊丹廢寺出土例が属するとしている。

江浦氏が両氏の分類をうけて、管原遺跡出土例と山城国分寺出土の2点のうちの1点を、もう1形式、C形式としている。これは、B形式例が両側の裾先が外反するのに対し、やや外反するものの直に垂れる。また、環が上方に向かって円形に突出する形態をしたものである。

これらによると今回の出土例は、A形式に属すと考えられるが、突出が左右の裾先を結ぶ線より、下方にくる点が異なる。ただし、これについては、風鐸の形態が時代とともに縦幅が短くなり、円弧状のくり込みが小さくなり、突出が左右の裾を結ぶ線にそろってたものをA形式の最新形式として山



第77図 風招実測図（1/3）

村廃寺出土例をあげている。この山村廃寺出土例は、突出が左右の裾を結ぶ線より若干下に出ていることを考えると閔戸廃寺例は、これに続く、一段階新しい形式としてとらえることができる。

なお、この風招については、不見識から当初分からずいたが、対策委員の亀田先生より風招の可能性のご指摘をいただき、奈良国立文化財研究所、飛鳥資料館において、山田寺等の資料を実見させていただき、風招との認識に至った。

奈良国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所、飛鳥資料館の各先生方には、ご多忙にもかかわらず、資料を実見させていただくとともに有益なご助言を得た。記して深謝の意を表す次第である。

出土例

奈良山田寺、兵庫伊丹廃寺、奈良山村廃寺、大阪野中寺、和歌山三栖廃寺、京都高岡廃寺、島取

伯耆国分寺、兵庫但馬国分寺（以上1）、山城国分寺、奈良苔原遺跡（以上2）埼玉高岡廃寺（3）

工芸品

正倉院伝来の鏡屏に伴う風招、法隆寺献納宝物の金銅製灌頂幡大幡第1節に浮き彫りされた天蓋にかかるもの、奈良長谷寺の銅板法華説相図に描かれた多宝塔初層の軒先に懸かるもの、兵庫古法華山石仏に浮き彫りされた三層塔に懸かるもの、奈良飛鳥寺瓦窯出土半瓦凸面のヘラ描き裁画（以上1）

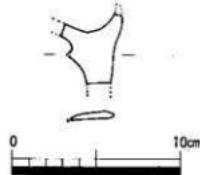
不明青銅製品（第78図）

金堂東北角の基壇化粧の瓦の間から出土した。

この基壇化粧は、奈良期に一度改修をおこなっており、この改修時に紛れ込んだと考えられる。

表面は、サビによりかなり痛んでいる、また、小破片で元の形状は推測しかねる。強いて言えば光背もしくは、九輪の一部の可能性があることを指摘するにとどまる。

同様の遺物は、今回これ以外に全く出土しておらず、今後の研究を待ちたい。



第78図 不明青銅製品実測図
(1/3)

引用・参考文献

(1) 岩本正二、西口寿生「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第1号 1977年

(2) 苔原遺跡調査会「苔原遺跡」1982年

(3) 高橋一夫「5日高町高岡廃寺」「埼玉県古代寺院跡」埼玉県県史編さん室 1982年

上縁裾先が外側に反転するが、下縁中央の突出部がない特異な形態。

② 鉄製品

寺域内の各所で、鉄釘を中心とする鉄製品が出土している。内訳は、鉄釘153点・鎌状鉄製品4点・不明鉄製品3点である。特に金堂周辺の瓦溜りからの出土量が多い。

鉄釘（第79図）

鍛造の角釘で、大小様々な大きさのものがある。金堂周辺（9・26・32・33トランチ）から108点、塔周辺（34・35トランチ）から10点が出土しているが、これは、金堂・塔に使用されていた建築用材が瓦溜りに混じって出土するためである。それに比して東方建物（6・7・23トランチ）ではわずかに3点しか出土していない。しかし、その南側の38トランチ溝周辺では、溝内を中心として10点が出土している。釘の大きさは様々で、3cm足らずの小形品から20cmを越える大形のものまである。頭部はほとんどがL字形に折り曲げられた形状をしているが、一部に例外もある。断面は正方形または長方形を呈する。腐食が激しく、木目痕が残るものはほとんどない。

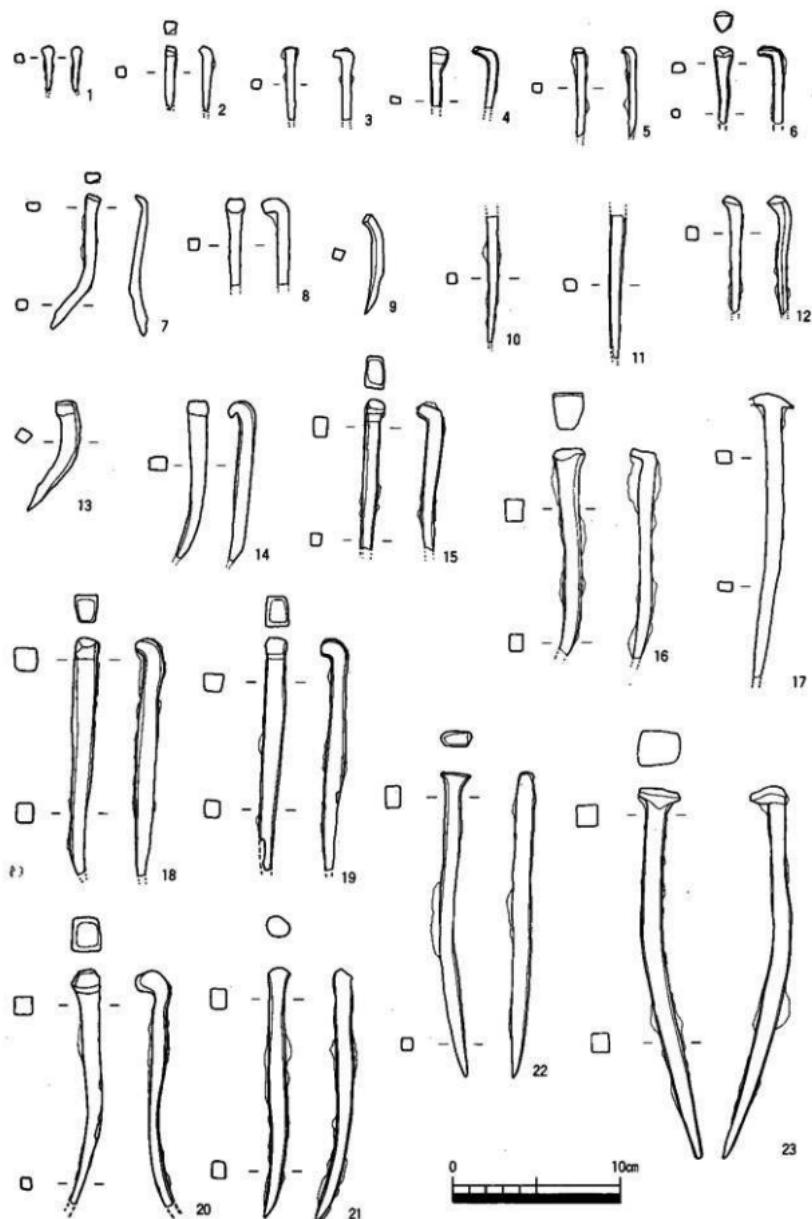
小形のもの（1～6）は長さ6cm以下で、細部に使用されていたものと思われるが、数量的には多くない。中形のものは長さ6～10cm程度で最も多い。断面幅が1cm以下の細身のもの（7～11）と、太くしっかりとしたものの（12～15）とに分かれる傾向がある。大形のもの（16～23）は長さ10cm以上で、数量的にもやや多い。23は特に大きいが、長さ20cmを越えるものはこの1点だけである。また、17は大形品のなかではめずらしく細身で、17・22の頭部はT字形に近い。

鎌状鉄製品（第80図24・25）

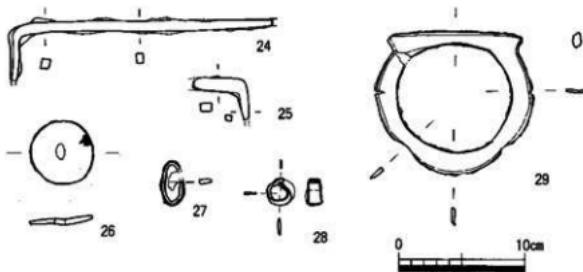
断面がほぼ正方形の鉄棒の両端をL字形に折り曲げたものである。24は残存長21cmで、針部の長さは4cm程度である。いっぽう25は針部長2cm程度とやや短い。

不明鉄製品（第80図26～29）

26は38トランチの包含層から出土した薄い円盤状の製品である。縦4.99cm、横5.08cm、厚さ4～5mmを測る。中央には紡錘車状に孔があるが、鍛のため孔の形状はよくわからない。片面の一部に木目痕が付着している。27は東方建物の基壇盛土上面から出土した長梢円形の環状鉄製品である。縦3.45cm、横1.95cm、幅約1.0cm、厚さ3～4mmを測る。28は9トランチ、金堂北側の瓦溜りに混じって出土した指輪状の製品である。薄く細長い鉄板を環状に丸めて作られており、環の最大径2.28cm、幅1.3～0.8cm、厚さ1～2mmを測る。鉄板の幅は中ほどが広く、両端にいくにしたがって細くなる。これらの小形の環状鉄製品は、何らかの製品の付属物であると思われる。29は東方建物基壇上の足場穴上位から出土した用途不明の環状鉄製品で、縦11.4cm、横12.5cmを測る。一端はやや直線的な棒状で、その下に刃物状に薄く尖ったC字形の鉄板がつく構造である。棒状の部分は厚さ7.9mm、幅1.06mm以上で、両端が横に突出している。刃部状の部分の幅は広い部分で1.89mm、狭い部分で1.19mm、厚さ4mmを測り、先端部が若干波打ったように湾曲している。幅が狭くなる部分が2個所にみられ、その部分では先端部の湾曲はみられない。全体に華奢なつくりであるため、強い力・重い重量を支えるような使用法はなされていなかったと思われるが、如何なる用途を持つもののかはわからない。



第79図 鉄釘実測図 (1/3)



第80図 錐状鉄製品・不明鉄製品実測図 (1/4)

番号	計測最大値(cm)			重量(g)	出土場所	備考
	残存長	断面幅	頭部幅			
1	26.9	5.5×4.5	8×6	1.5	15トレンチ	ほぼ完形
2	38.3	7.6×6.7	7×8.5	3.1	32トレンチ	
3	43	6.5×7	12×9	5.0	5トレンチ	
4	36.5	6.5×6.4	8.8×17.5	5.5	32トレンチ	
5	53	8.4×6.4	8.3×9.5	5.2	32トレンチ	
6	46	11×8	11×8	5.4	9トレンチ	
7	83.9	9×7.4	9.5×8	12.1	26トレンチ	完形
8	51.2	7.4×7.5	10.5×15.4	7.6	38トレンチ	
9	58.5	6.2×7	—	4.9	38トレンチ	
10	76	8×6	—	8.0	32トレンチ	
11	85.2	9.8×9	—	14.1	33トレンチ	
12	69.4	9.4×8.3	12.4×15	9.8	32トレンチ	
13	70	10×10	12×16.2	11.8	9トレンチ	
14	93.3	10.9×10	12×15	18.1	38トレンチ	ほぼ完形
15	89	8.5×12	12.5×17.5	26.5	6・7トレンチ	全体に横方向木目痕
16	124	1.1×13.5	20×23	59.6	32トレンチ	
17	169	10.5×96	22.9×11	31.4	9トレンチ	
18	140	14×14	15.5×16	51.5	32トレンチ	完形
19	138.3	11×11.4	14×17.5	48.8	27トレンチ	ほぼ完形
20	140.5	12.4×11	17.5×21.5	59.6	9トレンチ	ほぼ完形
21	153	10×12.5	—	59.5	33トレンチ	完形
22	164	10×11	19×10	57.8	32トレンチ	完形
23	219	15×14	26.7×22.5	108.9	33トレンチ	完形

第4表 鉄釘観察表

3. その他

墨書き（第81図）

金堂と塔との間の空間（32トレンチ）の搅乱土層中から、墨書きのある砾が1点発見されている。砾の形状は偏平で三角形に近く、縦3.43cm、横3.6cm、厚さ1.09cmを測る。文字はかなり薄く、読みづらいものの、かろうじて「土中」と読むことができる。

書かれている文字の意味、他の遺物・遺構との関係などは不明である。関戸廃寺からは円面鏡・転用鏡などが出土しているが、文字資料としてはこれが唯一の例である。

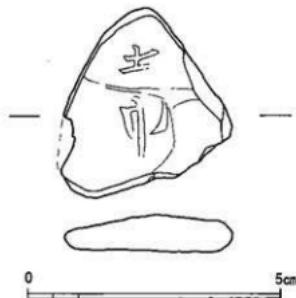
鉄滓・炉壁

調査区の各所から鉄滓・炉壁が出土した。その総量は約140点、7318.6gにおよぶ。トレンチごとの出土量の内訳は第5表のとおりであり、特に東方建物周辺からの出土が目立っている。また、6・7トレンチ、38トレンチには焼土遺構が存在することからしても、東方建物周辺の空間が、寺院内において鍛冶等を行う工房としての役割を果たしていた時期があったものと思われる。これに対して15トレンチでは鉄滓の出土量が多い反面、炉壁は出土していないことから、寺院の南外側に鉄滓等の廃棄場があったとも考えられる。

2トレンチ、30トレンチ、31トレンチから出土したものは、瓦や土器とともに廃棄されたものであろう。鉄滓・炉壁は他にも金堂周辺や27トレンチの溝底部など、寺域内の至るところから出土している。また、金堂基礎の最下層からも鉄滓が1点出土している。

ふいごの羽口

1トレンチの搅乱土層中から、ふいごの羽口の破片が3点出土した。いずれも細片であるため図化していないが、外面は淡黄褐色、内面は赤茶褐色を呈するものである。



第81図 墨書き実測図（1/1）

出土位置	種別	出土量(g)	出土位置	種別	出土量(g)
1トレンチ	炉壁	137.9	2トレンチ	炉壁	263.5
	鉄滓	335.5		鉄滓	228.4
5トレンチ	炉壁	369.8	6・7トレンチ	炉壁	404.0
	鉄滓	666.0		鉄滓	323.1
9トレンチ	鉄滓	75.6	10トレンチ	炉壁	8.9
13トレンチ	炉壁	65.3	14トレンチ	炉壁	55.1
	鉄滓	187.8		鉄滓	344.9
15トレンチ	鉄滓	1304.3	18トレンチ	炉壁	306.0
				鉄滓	309.9
23トレンチ	鉄滓	315.1	26トレンチ	炉壁	31.3
27トレンチ	炉壁	315.7	30トレンチ	炉壁	269.1
	鉄滓	160.2		鉄滓	208.1
31トレンチ	炉壁	42.6	32トレンチ	鉄滓	111.1
35トレンチ	鉄滓	52.2	38トレンチ	鉄滓	427.2

第5表 トレンチ別炉壁・鉄滓出土量一覧表

第4章 考 察

第1節 発掘調査の成果

1. 寺域の規模

関戸廃寺の寺域を画する施設として、西側では築地（4・24・13トレンチ）、北側では溝（11トレンチ）が確認された。

西側の築地は、現在も畦としてその名残をとどめているが、この畦の西側に古道の存在が想定される。すなわち、関戸廃寺は当時山陽道の通っていた北の小出川流域と、南の笠岡湾とを結ぶ南北主要道の東側に接する形で造営されていたということになる。

北側の東西溝は、確実に寺域を画する施設に相当することが確認されたわけではないが、ちょうど溝のある位置で東西の畦が一直線にそろっていることもあり、寺域の北限を反映している可能性は高い。寺院の北方約30mには東から舌状に伸びる低丘陵が存在するが、この低丘陵のすぐ南側の空間は、東の山地から流れ出る水の流路に当たっているため低湿であり、現在でも非常に水捌けが悪い。寺院存続期においても、おそらく居住空間として使用することは困難だったであろう。やはり寺域の北限は東西溝の近辺とするのが適当であろう。なお、水田耕作のために地山が深く削平されており、遺物の出土量もさほど多くないため、この位置に築地があったかどうかは不明である。

いっぽう、寺城南限と東限に関する遺構は、今回の調査では確認できなかった。しかし、南限については、16トレンチで検出された旧南北道が、トレンチ南端で東へと折れ曲がっていることから考えて、現在の東西道路が寺城の南側を走る古道の名残である可能性が強い。

また、東限については、畦の形状から考えて、30トレンチと31トレンチの間に位置する南北の畦が何らかの施設の痕跡であるとみるのが妥当であると思われる。寺城北限に関わる東西の畦がまさにその南北畦の位置まで伸びていることも、このことを示唆している。ただし、寺城南半では東から低丘陵がせまっているためそれだけのスペースを確保することができず、寺城は南にすばまる形で形成されていたものと思われる。寺城東端部では、廃棄されたとみられる遺物を除けば瓦の出土量は少なく、築地が存在していなかった可能性も想定される。

以上の点から寺城を復元すれば、関戸廃寺は南北が推定約130m、東西は北端で約130m、南端では推定約70mの5角形の敷地であったことになる。そして、少なくとも主要道に接する西側の一辺は築地によって画されていたことが判明した。寺院の西側には南北道が走っていたため、特に西側からの景観が重視されたであろうことは想像に難くない。塔の東側に位置する東方建物を建てる際にも、あえて地山地形の整地を行わず、塔よりも2m近く高い位置に設定している。これらのことから考えて、寺城南側の正門とは別に、西門のような施設が存在していた可能性も考えられる。寺城中央付近をはしる現代の東西道路は、金堂の北側を巡る回廊の名残であると考えができるが、この東西道路が南北の主要道に接続する位置が、西門を想定するのに最も妥当な場所であろう。また、この道は27トレンチの東側で階段状に折れ曲がって不自然なクランクを形成しており、この部分も何らかの意味を持っている可能性もある。

2. 伽藍の変遷

これまでに確認された主要な施設は、金堂・塔・東方建物（複数の時期にわたる建て替え）・回

廊・築地などである。ここでは、出土遺物から見て收れる各施設の変遷の状況を明らかにしておきたい。まず、最もその様相が明らかとなっている金堂と塔について述べる。

関戸廃寺の創建は、白鳳時代後半に行われた。このとき用いられた軒瓦は、軒丸瓦Ⅰ類である。金堂では、軒丸瓦Ⅰ類のなかでも第1段階から第4段階までの各段階のものが同程度出土しているのに対し、塔では、軒丸瓦Ⅰ類のなかでも第4段階のものが圧倒的に多く、次に軒丸瓦Ⅱ類が多い。このことから、金堂に次いで塔の造営が開始されたのは軒丸瓦Ⅰ類第4段階の製作されていた時期であったと思われる。

その後、金堂と塔は奈良時代後半に大幅な改修を受けたようである。金堂では、軒瓦の半分程度が新規の軒丸瓦Ⅲ類と軒平瓦Ⅰ類に差し替えられ、基壇化粧も修復もしくは新設している。いっぽう塔でも、軒平瓦Ⅰ類が導入されて新たに屋根を築いている。これとセットになるはずの軒丸瓦Ⅲ類があまり使用されなかった理由としては、金堂に比べ軒丸瓦の老朽化がさほど進んでいなかったこと、そして、瓦当文をもった軒平瓦が初めて登場したため、これだけをあえて新規のものに差し替えたことが考えられる。しかし、すべての軒平瓦が差し替えられたわけではなかった。金堂にせよ塔にせよ、軒平瓦の出土総数は軒丸瓦の半分程度である。さらに、金堂における軒丸瓦Ⅲ類と軒平瓦Ⅰ類の出土総数に着目すると、北東角にあたる26トレチからの出土点数が半分以上を占めている。この北東角部分では、その出土状況からみても、軒瓦のほとんどが奈良時代後半に差し替えられたものであったことがわかる。これと対照的な状況を示すのが金堂南面の32トレチである。軒丸瓦Ⅲ類と軒平瓦Ⅰ類の出土量に対して、軒丸瓦Ⅰ類の出土量が圧倒的に多い。すなわち、南面では差し替えられた瓦の数が比較的少なかったということになる。

金堂と塔が廃絶した直接の契機は、前述のとおり火災であったと考えられる。瓦溜りに混じって出土した土器から、その時期は11世紀前半であったことがうかがえる。以上のように金堂と塔は初期の段階に連続して造営され、その後は同じような変遷をたどって廃絶に至っていると言えよう。

この金堂と塔をとりまく形で、回廊の存在が想定される。しかし回廊に関してはやや不明確な面があり、特に東側の部分では、その位置は推定の域を出でていない。また、礎石が存在していたか否かも不明であり、関連するトレチからは多少の瓦が出土しているものの、金堂や塔の瓦が転落したと思われるものを除けば、瓦葺きの回廊であったとするにはやや量が少ない。回廊の外側（北側）を走る溝（10トレチと40トレチ）は、比較的金堂の瓦が入り込みにくい位置にあるが、ここでは合計4箱程度の瓦が出土している。その中には軒丸瓦Ⅲ類と軒平瓦Ⅰ類がみられ、平瓦ではⅢ類が目立っている。しかし、仮に回廊が瓦葺きであったとしても、奈良時代後半にはじめて造営されたのではなく、すでに存在していた回廊に新たに瓦を葺いたか、瓦の差し替えを行ったと考えたほうがよいであろう。

門に関しては、現在のところ遺構は全く確認されていないが、寺域南端部の1トレチと15トレチでは比較的多量の瓦が出土しており、その近辺に門が存在していたことが想定される。軒丸瓦ではⅠ類とⅡ類があり、平瓦ではⅢA類とⅠD類が目立つ。ⅠD類は塔において最も多く出土する平瓦であるため、門（特に南門）が塔の建立された時点からさほど遠くない時期に造営された可能性を指摘しておきたい。

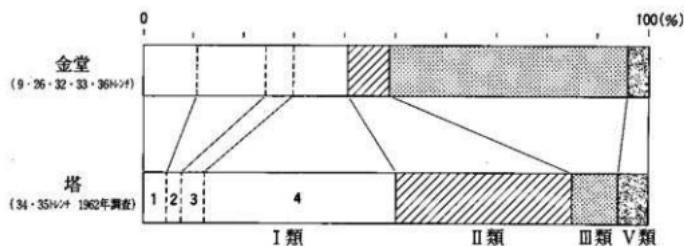
次に、複雑な変遷をたどった東方建物について見てみよう。まず、今回検出された基壇が構築される以前の時期、第1期については、#アトレチ出土のわずかな瓦により判断せざるを得ない。出土した平瓦は繩目叩きのⅢA類を主とし、ⅠD類なども若干混じるものであった。このことから、第1期建

物は奈良時代以前に建立されていたということだけはわかる。第2期の礎石建物に関しては、具体的な遺物からその時期を判断することはできないが、第1期建物が奈良時代のある時点で廃絶してから、第3期建物が造営される時までの間に基壇が構築されていたことになる。第3期の礎石建物は、桁行6間以上、梁間4間の大規模な建物である。基壇の周辺からは、軒丸瓦V類と褐色で焼き上がりの脆い平瓦III類が多く出土していることから、その造営の時期は、軒丸瓦V類が製作された奈良時代末から平安時代初頭のことであったと思われる。さらに、第3期建物の基壇化粧を埋め殺しにするかたちで第4期盛土が構築された。盛土南端部には溝が走っており、この溝からは多量の土器が出土している。上器は10世紀末から11世紀前半のものを下限としており、東方建物とそれに伴う施設が、金堂・塔と近い時期に廃絶したことを物語っている。その後、第4期盛土上に土師質土器を焼成する窯が構築されたのは11世紀後半から末のことであった。これと相前後する時期に、第3期建物基壇の上部が削平され、鍛冶等の作業用空間として利用されたことが、基壇上に残る焼土遺構から推定される。このように東方建物は複雑な変遷をたどっており、その廃絶の後も、作業・生活関連空間として最後まで利用されている。奈良時代末から平安時代初頭に造営された第3期の礎石建物は、金堂・塔と並ぶほどの大規模な施設であったが、その配置はすでに金堂や塔との関連性が薄く、ここにきていわゆる講堂が完成したというよりも、むしろ寺院をとりまく社会情勢の変化のなかで、東方建物の果たす役割も少しづつ変化していたと考えることができよう。

最後に築地であるが、少なくとも寺域の西端を画する瓦葺きの築地が存在していたことは確かである。出土する瓦のなかでは縄目叩きの平瓦III類の占める割合がかなり高いため、築地に関しては、あるいは本格的な完成をみるのは奈良時代以後のことであったのかもしれない。

11世紀前半に金堂・塔を中心とする諸施設が火災で失われたのを契機に、当寺院の衰退は急速に進んでいった。その後寺院は、おもに生活に密着した部分だけを引き継いで存続していたが、12世紀前半頃には完全に廃絶してしまったものと思われる。

なお、金堂と塔との間の空間からは瓦塔の破片が多数出土しているが、現段階ではそれが塔の存続しているうちに設置されたのか否か、また、塔との位置的な関係はどうであったのかなどは不明である。



第82図 金堂・塔周辺出土軒丸瓦割合の変遷

第6表 軒丸・軒平瓦等一覧表

	軒 丸 瓦		軒 平 瓦		道 具 瓦
	型 式	個体数	型 式	個体数	
1 ドレンチ	I類	2	I・II類 III類	1 1	
2 ドレンチ	V類	1			
4 ドレンチ	III類	1	I類	1	
5 ドレンチ	VI類	1			
6・7 ドレンチ	I類	1	I類	1	面戸瓦 1
	III類	1	II A類	1	
	IV類	1	IV類	1	
	V類	6			
8 ドレンチ	I類	1			
9 ドレンチ	I類	8	I類	4	
	II類	1	II B類	1	
	III類	6	I・II類	2	
	V類	2	IV類	1	
10 ドレンチ	III類	1	I類 III類	1 1	錫斗瓦 1
11 ドレンチ			II A類	1	
12 ドレンチ	III類	1	IV類	2	
13 ドレンチ	III類	1			
15 ドレンチ	II類	1	II B類 I・II類	1 1	
21 ドレンチ	III類	1	II B類	1	
22 ドレンチ			III類	1	
23 ドレンチ	I類	1	II B類	2	
24 ドレンチ			I・II類	1	
26 ドレンチ	I類	3	I類	14	鬼瓦 I類 1
	III類	19	IV類	1	鬼瓦 II類 1 隅切瓦 1
27 ドレンチ	V類	2	II A類 I・II類 IV類	1 1 1	
32 ドレンチ	I類	16	I類	3	
	II類	4	III類	1	
	III類	6	IV類	1	
33 ドレンチ	I類	3	I類	7	
	III類	4	II A類	1	
	V類	1			
34 ドレンチ	V類	1	I類	2	
35 ドレンチ	I類	4	I類	1	鬼瓦 II類 1
	II類	4	III類	2	
	III類	2			
36 ドレンチ	II類	1			
37 ドレンチ	I類	4			
	V類	1			
38 ドレンチ	III類	1	II A類	1	
	V類	1	II B類	1	
昭和37年調査	I類	29	I類	19	
	II類	19	II B類	1	
	III類	4	I・II類	1	
	V類	3	III類	6	
			IV類	2	
平成4年調査	I類 III類	2 3	II B類	1	
採集資料	II類	1	II A類 IV類	2 2	

第2節 瓦当文について

(1) 軒丸瓦I類

関戸廃寺の創建瓦に位置付けられる。いわゆる山田寺式軒丸瓦の系譜を引いているが、外縁に圓線がめぐらない。また、これと組み合う軒平瓦もない。中房から蓮弁の先端までまっすぐに伸びる1本の稜線が特徴で、各地に分布する山田寺式軒丸瓦のなかでも、特に「西琳寺式」と呼ばれる系列の特徴を備えている。⁽¹⁾また、西琳寺跡では外縁に圓線をもたない個体も確認されており、⁽²⁾西琳寺系列の一群は関戸廃寺創建瓦の伝播のルートを考える上でも注目される。

吉備地域において山田寺式の系譜に連なる軒丸瓦を出土する例は、関戸廃寺の他にはない。このことは、関戸廃寺の創建が吉備の他の寺院跡とは異なり、独自に畿内勢力の影響を受けて行われた可能性を示唆している。

(2) 軒丸瓦II類

主に塔跡から出土する。白鳳時代後半に位置付けられるが、軒丸瓦I類に比較すると個体数が少なく、金堂に次いで塔を建てる段階において採用されたものと考えられる。いわゆる川原寺式の系譜を引くものであるが、やはり素文の外縁がついている点で異なっている。吉備地域では、川原寺式の系譜を引く瓦当文は備前東部、美作、備中南西部、備後の一部において導入され、備前・備中の中枢部にはみられないという特徴がある。その反面、備中には外区を重鉢圓文と連珠文、内区を重弁蓮華文で飾る「備中式瓦」が分布している。

関戸廃寺の所在する備中南西部において、川原寺式の系譜を引く軒丸瓦は、関戸廃寺の他に後月都寺戸廃寺（現在の井原市）において採集されている。⁽³⁾そして、この地域では今までに備中式瓦は見つかっていないため、その分布圏外になるものと考えられており、この事実が畿内の勢力との連結を物語るものとして評価されている。⁽⁴⁾特に備中國後月郡周辺には屯倉比定地もあり、当地域の首長勢力が中央政権と一定の結び付きを保っていたこともうかがわれる。

(3) 軒丸瓦III類と軒平瓦I類

関戸廃寺において、軒丸瓦I類と並び最も個体数の多い型式であり、特に金堂周辺から多く出土しており、奈良時代後半に金堂をはじめとする寺院の補修・改修を行った時点で採用された瓦当文であると思われる。同型式（同范）の組み合わせが備中國分寺と国分尼寺で出土しており、国分寺では天平盛期、国分尼寺ではそれより若干後出する奈良時代後半、さらに760年代に位置付けられている。瓦当文の対比から関戸廃寺のものがより後出と考えられるため、同型式が関戸廃寺の屋根を飾ったのは、それ以後のことであったと考えられる。また、関戸廃寺では、備中國分寺と同文の可能性がある鬼瓦も出土しており、これもほぼ同時期のものと考えて差し支えないであろう。関戸廃寺から出土したこれらの軒丸・軒平・鬼瓦の特徴は、綱目の印き目が瓦当部側面、場合によっては外区外縁にまで明瞭に残っている点で、ここに同寺特有の個性を見いだすことができる。

備中國分寺は、備中國府と緊密な関係を保持していた可能性が強く、したがって、関戸廃寺においても備中國府との関係が想起される。高橋美久二氏は、備中國府系古瓦を主体的に出土する遺跡に矢部遺跡・毎戸遺跡などの駿家に比定される遺跡のほかに、栢寺廃寺のような「国府寺」と呼ぶべき性格の寺院があるとしている。⁽⁵⁾しかし、関戸廃寺はそれらには該当せず、独自に国府との関係を保っていた状況がうかがわれる。特に奈良時代における関戸廃寺の金堂の改修は、屋根瓦の半数近くを新規

のものに差し替え、基壇化粧にも手を加えるという大規模なものであり、この改修工事が備中国府の援助を受けて行われた可能性も考えられる。

(4) 軒丸瓦IV類・V類

軒丸瓦III類・軒平瓦I類までの瓦当文が畿内、あるいは備中国府といった外部からの影響を強く受けて成立していたことと対照的に、それ以後の瓦当文は前代の文様を引き継ぎながらも独自の変遷をとげている。特に軒丸瓦V類は、大規模な第3期東方建物建立の際に採用されたと考えられ、この時期（奈良時代末から平安時代初頭）における寺院造営者の力の高まりをうかがうことができる。

しかし、その後は小規模な補修用軒平瓦III類・IV類が製作されるにとどまり、やがて寺院は廃絶している。

註

- (1) a. 石田茂作「西琳寺」「飛鳥時代寺院址の研究」 1936年
b. 大阪府教育委員会「西琳寺跡範囲確認調査概要」 I 1978年
c. 藤井寺市教育委員会「藤井寺市及びその周辺の古代寺院」下 1987年
d. 羽曳野市教育委員会「西琳寺跡」「羽曳野市埋蔵文化財調査報告書」32 古市遺跡群X VI 1995年
- (2) 註1 d 文献
- (3) 永山卯三郎「岡山県に於ける奈良時代の礎石及古瓦の調査報告」下『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第6冊 岡山県史蹟名勝天然記念物調査会 1926年
- (4) a. 出宮徳尚・葛原克人・河本清「古代寺院址」近藤義郎編『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年
b. 伊藤晃「初期寺院と瓦」近藤義郎・河本清編『吉備の考古学』 福武書店 1987年
c. 伊藤晃「寺院の創建」「岡山県史」第2巻 原始・古代 I 1991年
- (5) 高橋護・葛原克人・松本和男「備中」角田文衛編『新修国分寺の研究』第4巻 吉川弘文館 1991年
- (6) 渋哲夫「国分寺跡・国分尼寺跡」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下 山陽新聞社 1992年
- (7) 註5文献
- (8) 註6文献
- (9) 高橋美久二「山陽道古瓦の系譜」 註5文献

第3節 建立氏族について

関戸廃寺の造営者に関してこれまで具体的に触れられたことはあまりないが、笠岡周辺が「笠臣」の本貫候補地の1つであるという説に基づき、笠臣氏との関連を強調する考えが流布している。その他の論考としては、小田郡の郡大領の地位を世襲した小田臣氏を妥当とする説がある⁽¹⁾。そこで、今までの発掘調査で明らかになった関戸廃寺の特質をふまえ、建立氏族の性格について整理しておきたい。

関戸廃寺は、古代の行政区画では備中国小田郡甲努郷に位置している⁽²⁾。甲努郷は現在の笠岡市北部に位置しており、高梁川の支流である小田川と、さらにその支流の尾坂川によって開かれた小平野を中心としている。

ところで小田川の下流域は下道郡を中心とする地域で、津宇・窪屋・賀夜の各郡とあわせてひとつの大きなまとまりを形成している。これらの地域はいわゆる備中式瓦当文の分布圏であり、白鳳期創建の寺院が比較的多数存在する。これに対して、小田川上流域である小出郡・後月郡ではやや異なる内容をもっている。すなわち白鳳期創建の寺院は、小田郡には関戸廃寺、後月郡には寺戸廃寺しかなく、しかもともに中央系の瓦当文を導入している点で共通している。元来、後月郡周辺には様々な屯倉想定地があり、当地域の首長勢力が独自の回路で畿内の勢力との強い結び付きを維持していたことをうかがわせる。

では、この小田郡・後月郡地域内において、関戸廃寺を建立した氏族は、どのような位置を占めていたのであろうか。

まず、古墳時代の様相を確認しておきたい。当地域では、当初立った首長墳はほとんど認められなかったが、5世紀半ば頃になると突如として大形の首長墳が築かれるようになる。笠岡市走出と山口にまたがる半独立丘陵上に形成された長福寺裏山古墳群⁽³⁾がそれである。前方後円墳・双つ塚古墳(墳長62m)、造出付の円墳・仙人塚古墳(墳長43m)、前方後円墳・東塚古墳(墳長50m弱)の順に築造されたこれらの古墳は、備中南西部で最大級の規模を有しているが、5世紀末には早くもその系譜が断絶してしまう。その他の古墳時代前半の首長墳としては、矢掛町東川面の方墳・西岡谷2号墳(一辺約20m)や、同町東三成の前方後円墳・中山2号墳(墳長約30m)、奥迫の古墳(墳長約20m)など、井原市木之子町の木ノ子村古墳、芳井町櫛江の前方後円墳・櫛江2号墳(墳長20m)などがある。

6世紀以降では、矢掛町南山田の小迫大塚古墳⁽⁴⁾が目立った存在である。一辺27mの方墳で、全長10.5mの横穴式石室を作っている。小迫大塚古墳の築造年代は7世紀代になると考えられている。いっぽう西部の井原、笠岡方面では、笠岡市走出の小池古墳⁽⁵⁾が最も目立っている。小池古墳は円墳で、全長11.8mの横穴式石室をもっている。このほかには、矢掛町の毎戸古墳、内田小屋谷古墳、向山古墳、井原市の宮端上古墳、御室古墳、山手1・2号墳などの比較的大形な古墳がある。

以上の状況から、古墳時代における備中南西部は、長福寺裏山古墳群という例外を除けばむしろ突出した首長勢力はみられず、それぞれの小勢力がまとまった平地ごとに分立している様子が見てとれる⁽⁶⁾。その小勢力のなかでも特に注目されるのが、古墳時代に安定した首長勢力を保ち続け、古墳の総数も多い矢掛町東部、すなわち後の小田郡実成郷・草壁郷を中心とする地域である。当小地域は古代においても卓越しており、東三成廃寺や白江跡などが知られている。東三成廃寺は矢掛町東三成に

あり、平城宮式の系譜を引く瓦当文が採集されている。白江遺跡は矢掛町中にあるが、圓場整備事業に伴ってトレンチ調査が行われた同遺跡では、円面鏡等の官衙を想させる遺物が出土し、調査者によって小田郡衙の可能性が高いことが指摘されている。元米矢掛町内には小田郡衙跡といわれてきた地点が何カ所かあったが明確な根拠を欠いており、他に郡衙を想定できる遺跡も発見されていないため、現段階ではこの白江遺跡が郡衙跡の有力な候補である。白江遺跡は、小田郡草壁郷に位置している。ところで、東三成庵寺から丘陵を隔てた西側には下道氏墓所があり、下道郡に接する実成郷周辺が下道氏の本拠地の一角であったことがうかがわれる。このため當実成郷・草壁郷地域の首長勢力も下道氏と深い関わりを有していたものと考えられる。

このように見ていくと、関戸庵寺が、その小田郡東部の実成郷・草壁郷地域から距離的にも地理的にもかなり離れた位置にあったことがわかる。すなわち、同じ小田郡内でも関戸庵寺を建立した西部の首長勢力と東部のそれとが各々異なった特質を有していたと考えられるのである。

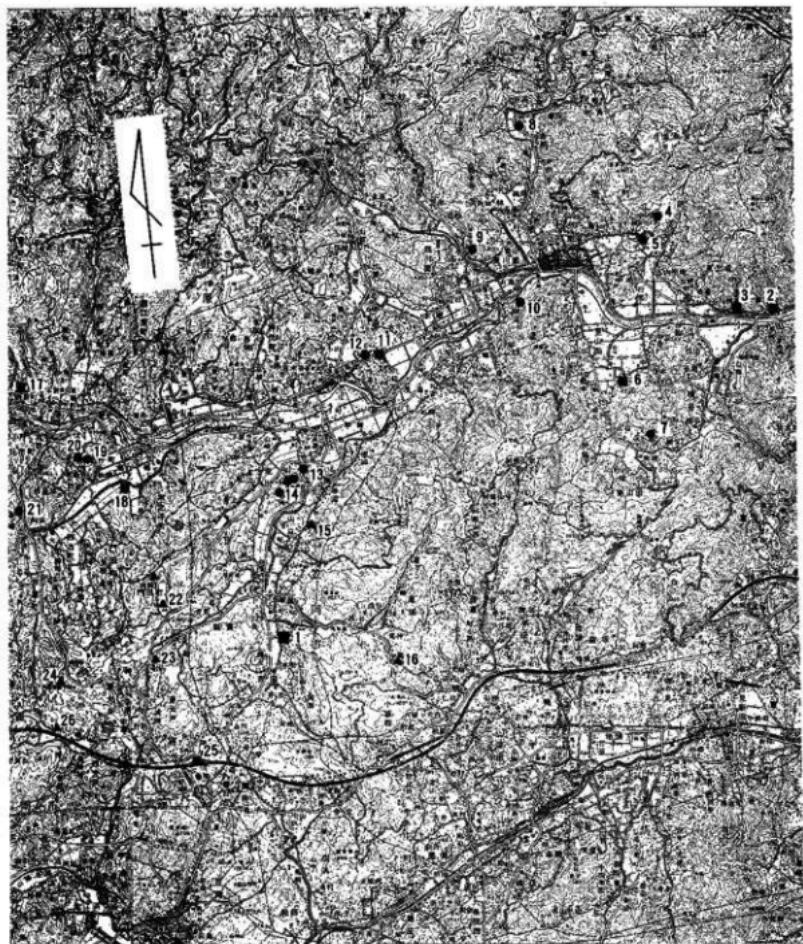
関戸庵寺のある甲努郷を中心とする地域は、5世紀末に長福寺裏山古墳群の築造が断ててからは自立った古墳はなくなるものの、6世紀以降は小池古墳をはじめとして笠岡市内で最も古墳が集中して築かれる地域である。また、笠岡市北部の甲努郷、出部郷に相当する地域には、鍛冶屋遺跡⁽³⁶⁾、鐵塊遺跡⁽³⁷⁾などの製鉄遺跡が多数存在しており、備中南西部における古代製鉄遺跡の集中地帯を形成している。関戸庵寺を建立した氏族は、これらの鉄生産を掌握しつつ甲努郷地域に台頭してきた中クラスの首長勢力だったのではないか。そして、7世紀後半には畿内勢力と直接的に結び付くことによって関戸庵寺を建立するに至っている。また、8世紀後半には備中國分寺、ひいては備中國府との緊密な関係をもとに寺院の大規模な改修を行うなど、その勢力基盤の背景には常に畿内勢力の影がある。そして、その後奈良時代末から平安時代初頭頃までは、大規模な建物の造営を行った立場にあったことが伺われる。

笠臣について

笠臣についての論考は数多くあるが、未だその本拠は明らかではない。ただ、「日本書紀」仁德天皇67年条にある「川嶋河（現在の高梁川か）の派」という表現から、備中のいずれかの地に比定されるという見解は一致している。また、その祖先伝承は吉備一族の反乱伝承とは異なり、大王に対する忠誠を強調するものである点も特徴的である。その名が中央政界に登場するのは大化元（645）年9月、笠臣垂が古内皇子の謀反を事前に密告して功を立てた時からであり、この事件を契機に、笠臣は急速に中央官人として榮達の道を歩んでゆく。さらに、天武天皇13（684）年、八色の姓制定の際には朝臣の姓を賜り、8・9世紀にかけて数多くの中央官人を輩出している。この中央での笠臣の活躍が、本拠である備中國の一族の政治的地位に一定の影響を与えていたとするならば、彼らは7世紀後半以降の関戸庵寺建立氏族に近い特徴を有していたことになる。しかし、実際には笠臣を関戸庵寺造営者に結び付ける具体的な根拠はない。

小田臣について

小田臣は確実に小田郡に比定される豪族である。「統日本紀」大平勝宝元（749）年4月甲午条ほかに登場する小田臣根成は、大仏に銭一千貫・車一両・錠二百柄の知識物を進めて外從八位上から外從五位下に昇っている。また「類聚符宣抄」天暦8（954）年7月23日の式部省符、同年12月29日の官



1. 関戸庵寺
2. 東三成庵寺
3. 下道氏墓所
4. 奥迫の古墳
5. 中山2号墳
6. 白江遺跡
7. 小追大塚古墳
8. 内田小原谷古墳
9. 西岡谷2号墳
10. 向山古墳
11. 每戸遺跡
12. 每戸志積
13. 小池古墳
14. 長福寺・義山古墳群
15. 山口製鉄跡
16. 尾坂製鉄跡
17. 寺戸庵寺
18. 稲土神社
19. 山手2号墳
20. 山手1号墳
21. 向山古墳
22. 幸之介・六方遺跡
23. 鉄堤遺跡
24. 銚村遺跡
25. 鋼治屋遺跡
26. 晴木遺跡

0 5 km

- 寺院・官衙・その他
- 古墳
- ▲ 製鉄遺跡

第83図 関連遺跡等分布図 (1/100,000)

宣旨では郡大領であった小田逐津の替わりに「白丁」の小田臣豊郷を任じたとあり、官人歴のない白丁の豊郷が大領を引き継いでいることから、小田臣は郡大領を世襲する譜代の名族としての地位を占めていたと考えられている。⁽¹⁾さらに、「朝野群載」にある康和2(1100)年正月1日の「采女加階申文」では、従五位上の采女であり朝臣の姓をもった小田朝臣幸子が登場することから、小田臣が独自の回路で中央政府と結びついていたとも言われている。

以上の点から小田臣は小田郡内で大きな力を持っていたことは間違いないが、白鳳期以前の動向が明らかではなく、小田郡衙の候補地が小田郡東部に所在することもあるため、現段階では関戸廃寺建立氏族の一候補として止めておきたい。

以上、関戸廃寺の建立氏族に関して整理してみたが、未だこれを特定するには早急と言わざるを得ないのが現状である。今後、小田郡・後月郡内で古代の寺院・官衙遺跡の考古学的調査が進展し、新たな事実が判明してゆくならば、さらに考察を深めることが可能となるであろう。

註

- (1) 吉田晶「吉備と律令体制の成立 第3節美作・備前・備中の国と郡」『岡山県史』第3巻 古代 II 1988年
- (2) 「奈良朝平安朝時代」「増訂小田郡誌」上巻 1941年
- (3) 鎌木義昌編『長福寺裏山古墳群 附関戸廃寺跡』 1965年
- (4) a. 「古墳文化の発達」「矢掛町史」本編 1982年
b. 葛原克人「巨墳の造営」『岡山県史』第2巻 原始・古代I 1991年
- (5) 註4 a 文献
- (6) a. 間壁忠彦・間壁蘋子「高梁川以西の山陽道周辺」「日本の古代遺跡」 23 1985年
b. 葛原克人「備中地域の古墳」近藤義郎編『岡山県の考古学』 1987年
- (7) 『岡山県遺跡地図』第6分冊 1979年
- (8) a. 藤田憲司・伊藤晃「小迫大塚古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 1986年
b. 亀山行雄「7世紀の古墳」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下 1992年
- (9) a. 新納泉「古墳の変貌」註4 b 文献
b. 註8 b 文献
- (10) 「原始編 第4章古墳時代 4笠岡市域の遺跡」「笠岡市史」第1巻 1983年
- (11) 桑田俊明「白江遺跡ほか」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」80 1992年
- (12) a. 註2文献
b. 「条里制の展開」註4 a 文献
- (13) 「古代寺院と山陽道」註4 a 文献
- (14) 註11文献
- (15) a. 梅原末治「備中国小田郡に於ける下道氏の墳墓」「考古学雑誌」7-5 1917年
b. 高橋謙「下道氏の墓」註8 a 文献
- (16) 「鍛冶屋遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」70 1988年
- (17) 安東康宏「笠岡市における最近の発掘調査」「古代吉備」第18集 1996年
- (18) a. 岩本次郎「古代吉備氏に関する一考察—特に記紀系譜形成過程を中心として—」「ヒストリア」26

- b. 石井英雄「上代地方豪族吉備氏に関する一考察」「白山史学」6・7合併号
 - c. 中山薰「笠氏についての一考察」「岡山史學」第15号 1965年
 - d. 平野邦雄「吉備氏と和氣氏」近藤義郎・上田正昭編『古代の日本』第4巻 1970年
 - e. 鳥越憲三郎「吉備本國の歴史」「吉備の古代王国」 1974年
 - f. 吉田晶「吉備と大和 第3節吉備の国造と県」 註1文献
 - g. 吉田晶「吉備地方における国造制の成立」「吉備古代史の展開」 1995年
- (19) 門脇禎二「吉備と律令体制の成立 第1節吉備と壬申の乱」 註1文献
- (20) 井原市木之子町には鴨別命・県守・笠臣・三枚臣らを主祭神とする県主神社があり、小田都
・後月郡地域が笠臣の有力な本貫候補地の1つであることに間違いはない。
岡山県神社庁編『岡山県神社誌』1981年
- (21) 註1文献

付 載

付載 1 関連資料紹介

付載 2 昭和54（1979）年の発掘調査報告

付載 3 平成 4（1992）年の確認調査報告

付載1 関連資料紹介

現在ではそれほどでもないが、何年か前までは、関戸廃寺周辺を歩くと瓦などの出土品が畦や石垣などの至るところに見られたという。そんな中で、特筆すべき遺物も何点か発見されている。ここでは、それらの関連資料を紹介するとともに、関戸廃寺周辺の注目される何カ所かの地点についてもあわせて述べておきたい。

1. おもな遺物

①. 碇石（第84図）

関戸廃寺の近辺には、廃寺で使用されていた礎石と思われる大形の石がいくらく確認できる。現在塔跡の東側には数個の礎石が無造作に積み重ねて置かれているが、その中に、上面に舍利孔のような凹みを持つ礎石がある。この礎石は、昭和33年以前には八幡神社の石鳥居の下に置かれていたものであり、塔心礎の可能性が指摘されていたが、1962（昭和37）年の発掘調査によって、塔心礎は別にあることが判明している。

礎石の上面はやや台形に近い形をしており、最大径74×92cmを測る。他の礎石の上面が平坦であるのに比べると若干凹凸があり、中心から少しづれた位置に舍利孔のような凹みがある。凹みは径21.5cm、深さ16cmであるが、底部径は2cmしかなく、逆円錐形に近い形状をしている。礎石の厚さは43cmを測る。石材は流紋岩である。

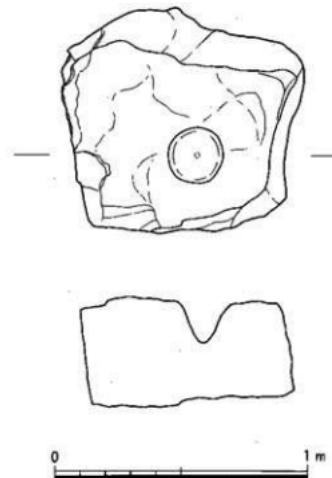
その他の礎石は流紋岩製が3点、花崗岩製が1点である。それぞれの礎石がもともとどこにあったのかはわからない。

②. 柱根（図版49）

かなり以前のことになるが、ある時農協吉田支所が敷地内に便槽を掘っていると、柱根が出土したという。この柱根は、現在まで笠岡市立郷土館に保管されていたが、その具体的な出土状況は明らかではない。

柱根は円筒形の柱を半裁したような形で遺存しており、残存長70cm、横幅38cmを測り、直径を推定復元すると50cm程度となる。外面は若干の火を受けて炭化している。芯にあたる部分はさらに強く火を受けており、焼けて空洞化している。片側端部は炭化が著しく、比較的平坦な面が形成されているのに対して、反対側の端部はむしろ腐食がすすみ、不定形な形状をしている。

かなり太く、比較的規模の大きい施設に使用されていた柱と考えてよいであろう。位置的にみて門または回廊に相当する施設に伴うものである可能性もあるが、出土状況が不明であるため、原位置を保っていたかどうかかも判らない。



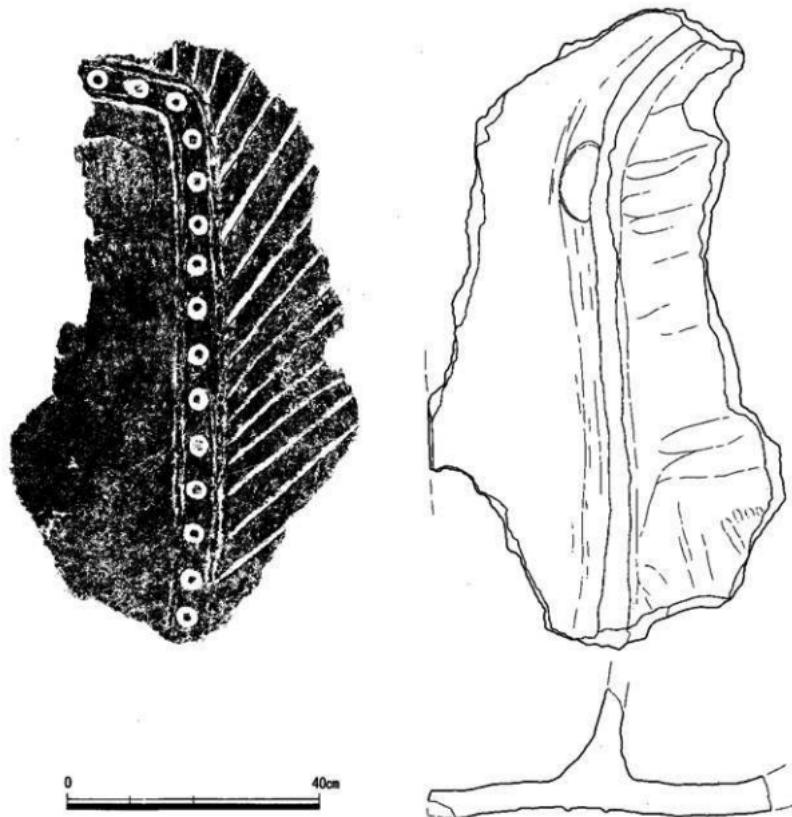
第84図 磚石実測図（1/20）

③. 鳥尾（第85・86図）

古くからの採集資料が2点ある。「同一個体の両側面と考えられる断片が3点ある。」とする文献があるが、残る1点については所在不明である。

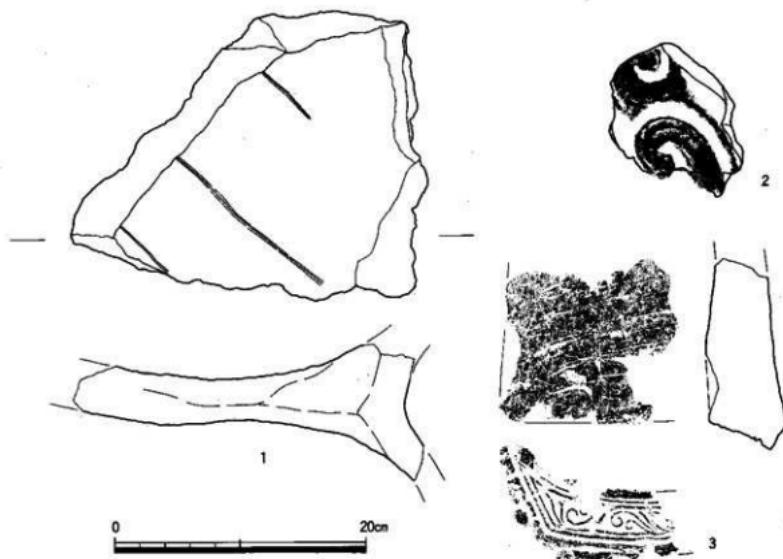
大きい方の破片は、地元の名家戸川家の庭に昔から置かれていたという右側面の破片である。縦100cm、横55cmを測り、胴部下端には降り棟の丸瓦をおさめる透し穴の上端部がある。透し穴以下と頂部は消失している。

縦帯は、断面三角形の突帯を4.5~6.5cmの間隔で2条貼り付け、その間に型押しした長径3.5cmの連珠文を6.5cm間隔で配する。鰯部には不等間隔に沈線を刻み、その上側のみヘラケズリを行って段型を表現している。鰯部の幅は、端面がわずかに残っている部分で縦帯から22.5cmを測る。鰯部の内側は無文で、縦方向のナデ痕跡が残る。胴部も無文で、ナデで仕上げている。胴部内側はやや調整が粗雑で、横方向のヘラケズリを施し、下端部のみ縦方向のナデ調整である。縦帯の屈曲部下側には、



第85図 鳥尾実測図1 (1/8)

径15.5cmのほぼ円形の剥離痕跡がある。また、径14.5cmの同様の剥離痕跡が腹部の上方にもある。これらの痕跡は円形の粘土塊がそこに付設されていたことを示しているが、痕跡の大きさからして、それは瓦当であった可能性もある。腹部の痕跡のほうは、その状況から2つの粘土塊が横に並んで付設されていたものと思われるが、痕跡の部分だけが暗褐色を呈している。いっぽう胴部の痕跡のほうは、周囲と同様淡褐色を呈している。胎土は粗く、石英等の粒が目立つ。全体の色調は、胴部・鋸部が淡褐色、腹部が茶褐色、胴部内側が淡暗褐色である。以上の胎土・色調は軒丸瓦I類に近似している。小さいほうの破片は28レインを設定した田で畦の石垣修理中に出土したもので、左側面の縦帯のあたりの部分である。縦23cm、横27.5cmを測る。鋸部には7~9cm間隔で3条の浅い沈線が刻まれているが、全体に摩滅しているため、ヘラケズリの有無は確認できない。鋸部内側はナデ調整である。胎土は粗雑で、石英粒が目立つ。色調は鋸部外側が白褐色、内側が淡灰色、腹部が暗褐色を呈する。前述の大きい方の破片とは同一個体にならないものと思われる。



第86図 硬石実測図2・その他(1/4)

④. その他

鬼瓦(第86図2)

塔跡東側の側溝設置時に鬼瓦II類の破片が発見されている。備中国分寺出土例からみて、口の左側にある巻毛の最下段と2段目にあたるものと思われる。最下段の巻毛には2条の浅い凹線状のラインが入っている。裏面が剥離てしまっているため、厚さはわからない。胎土はやや粗く、微細な砂粒・黒色粒が多くみられる。色調は淡黒色を呈する。

相輪（第87図）

塔跡の近辺で出土した青銅製丸輪の破片である。1962（昭和37）年の調査でも報告されている。外径33cm、内径24.4cmを測り、轂の一部であると思われる。重量がかかるため折れたためか若干上下に湾曲しており、規則正しい円弧を描いていない。幅4.95cm、厚さ1.45cmであり、断面は台形に近い。内側下端部は鋸放しのままであるが、外側下端部はこれを削って形を整えている。覆輪との連結部にあたる幅は付け根から折れて失われているが、付け根の部分で幅4cm、厚さ1.33cmを測る。

その他には、本編で述べたが、採集資料の軒平瓦II A類（第51図7）、1962（昭和37）年の調査で出土していた瓦塔の一部（第76図16）などがある。

2. 関戸廃寺周辺の状況（第88図）

①. 瓦の散布

周辺の地区への瓦の散布は広範囲に及び、各所で暗渠や石垣にも利用されていたようである。Aの地点は、廃寺の北側にある低丘陵の上で、現在畠として利用されている土地であるが、丸瓦の破片3点が採集されている。Bの田はツイジという名で呼ばれており、かつて多量の瓦が出土したと言われている。古道の東側にあたる土地である。Cの地点は、寺域の東方約140mの斜面地である。軒丸瓦II A類（第86図3）1点が採集されているが、その他の遺構・遺物等は全く確認されていない。この他にも、丘陵上にある八幡神社の境内から古瓦が出土したことがあるという。

これらの地点は、いずれも寺域の想定範囲外であり、必ずしも廃寺に関連しているわけではないであろうが、参考までに記しておく。

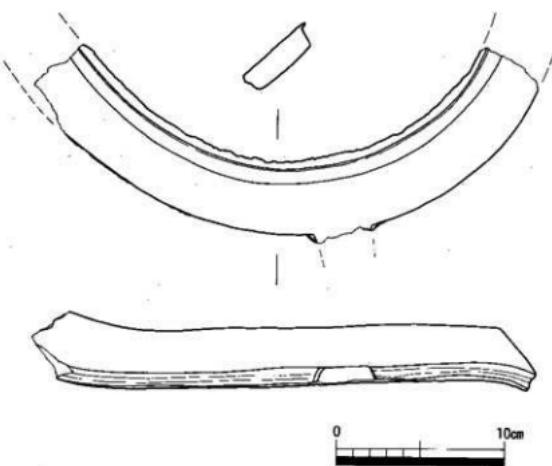
②. 井戸

Dの地点は、寺域西側を南北に走る築地の内側に位置する。この辺りに井戸があり、水田耕作の障害となつたため、埋め直したことがあるという。

③. 古墳（図版50）

Eは、関戸廃寺の周辺で確認されている唯一の古墳、関戸八幡山古墳であり、関戸廃寺の東南東約140mに位置している。立地は、北西方向に向けて舌状に張り出した八幡山の丘陵の西側斜面にあり、石室の前端は八幡山を巡る道とその側溝により破壊されている。

墳丘は丘陵斜面をカットして構築されている。墳端が後世の削平を受けているため、全体の形状は



第87図 相輪実測図（1/3）

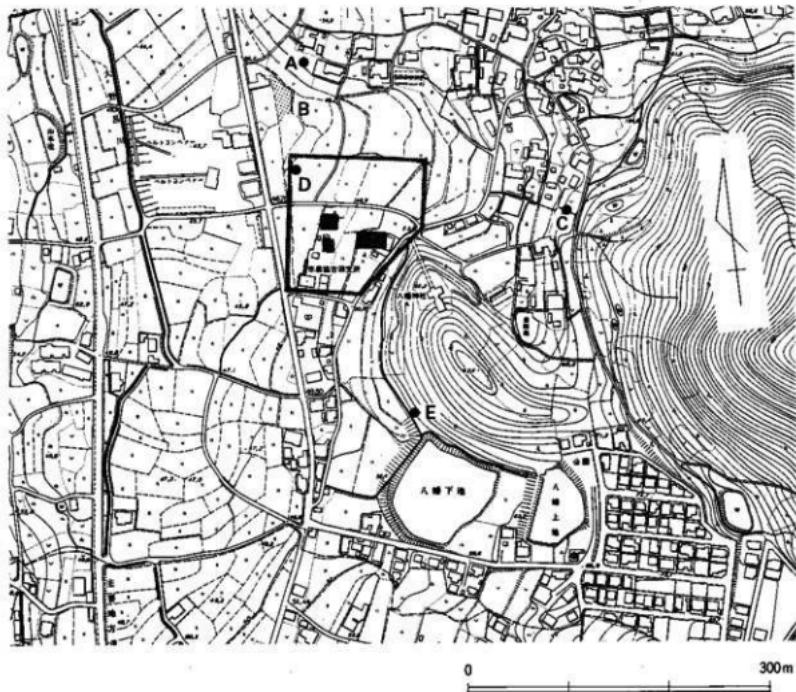
明瞭でないが、径10m程度の規模であったと思われる。

石室は前端が失われているが、残存長約5.3m、最大幅約1.5mで、無袖の横穴式石室である。石室の中にはかなり流入土が堆積しており、奥壁付近では現状で高さが1.15mである。また、入口は人がかろうじて這って入れる程度まで埋まっている。奥壁・側壁はおおむね2段程度に積まれている。天井石は現状で4石からなっているが、もとは5・6石であったものと思われる。

採集遺物は全くないが、何十年も前にこの付近の古墳から出土した鉄刀で子供が遊んでいたという。あるいはこの古墳のことであろうか。

註

- (1) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「日本古代の駒尾」 1980年
- (2) 小見山熊夫・田中舜治・廣沢澄郎「関戸廃寺の研究」 1961年
に破片の略図がある。6cm間隔で並ぶ縦帶の間に、連珠文が配されている。
- (3) 鎌木義昌編「長福寺裏山古墳群 附関戸廃寺跡」 1965年

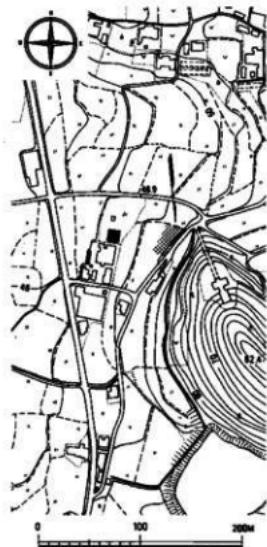


第88図 関戸廃寺周辺の状況 (1/5,000)

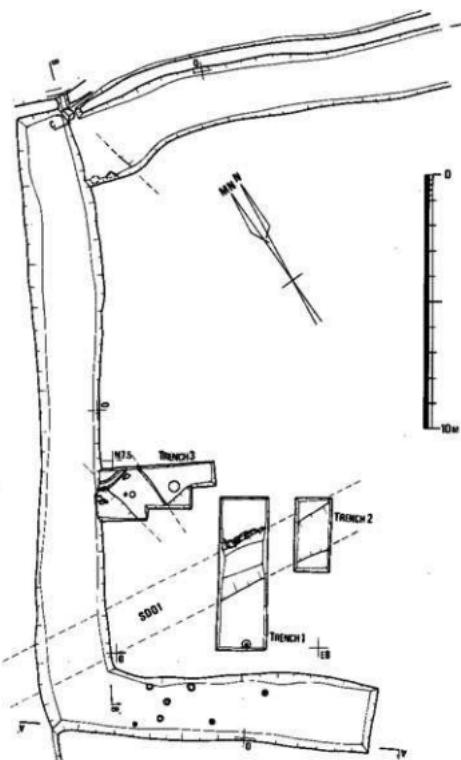
付載2 昭和54（1979）年の発掘調査報告

1. はじめに

昭和54年4月に第89図に示した地区で宅地造成が実施され、宅地周囲の擁壁を築くために掘られた溝の中から瓦が出土した。その報告を受けて笠岡市教育委員会と岡山県教育委員会とが地権者と協議し、出土遺物の採集と検出遺構の性格を把握するための確認調査を行った。その経過と調査の概略については「岡山県埋蔵文化財報告」10に掲載したが、擁壁用側溝の土層図や個々のトレンチの実測図ならびに遺物については、未発表であったため、ここに改めて報告することとしたい。



第89図 調査地区位置図
(S=1/5000)



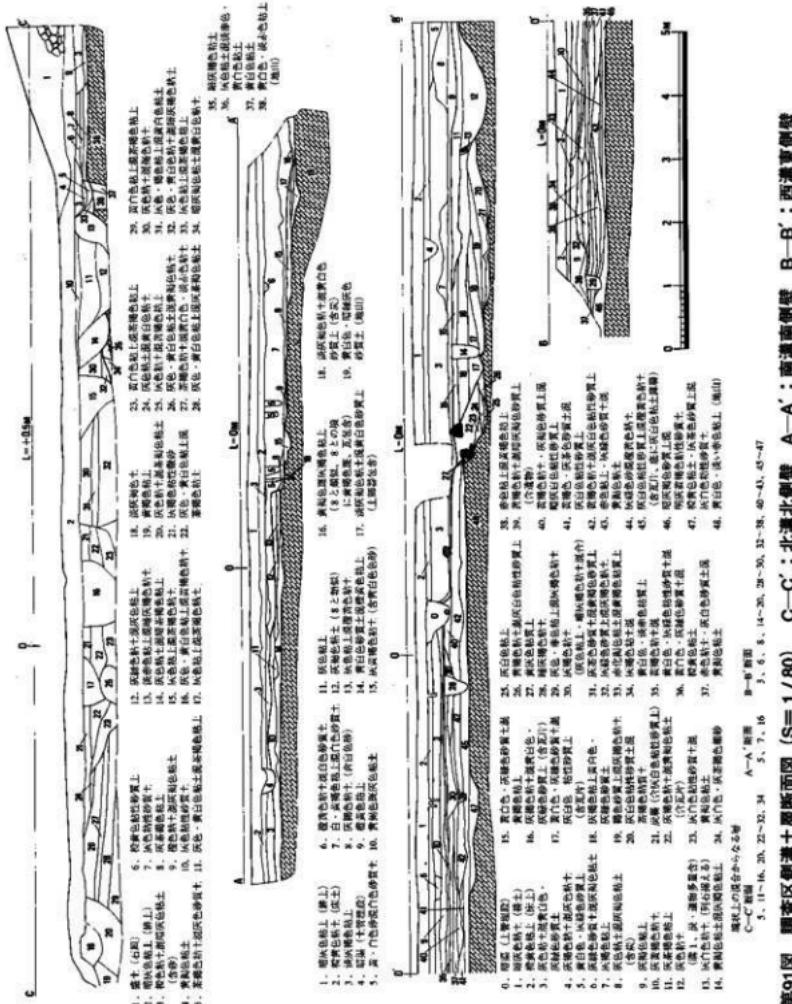
第90図 調査地区全体図 (S=1/200)

2. 側溝断面の観察

北溝北側壁（C-C'） 唯道の断面である。1層は東の道路への上り道を作り、石垣は道路に伴う。2層は現代の水田と同じ土である。廃寺に関係すると考えられる土層はほとんどなく、わずかに36・37層の柱穴と34・35層にその可能性がある。柱穴は一辺100cm前後の方形の掘り方で、その北東角が断面に現れたものである。調査時点では新しい遺構と判断していたが、廃寺との関連を再考したい。この部分から東へ地山が高く残り、2層が道路下へ水平に続していくことが注意される。寺域の東限に関する資料といえよう。

南溝南側壁（A-A'） 1層は現水田の耕土で、7層はそれを造成するために狭小な水田を埋めた土にあたる。当然に8・10・12層は旧水田あるいは畑の耕土と考えられ、土の類似から16層もその可能性が強い。廃寺に関係するかとみられるのは13・14層で、旧水田の東上段に残存していることは注意される。後述する第3トレンチで確認された基壇肩部の線と連続させて、旧来の段が水田の境界として保存されたと考えることもできなくはないが、第1トレンチでの地山の高度が問題である。

西溝東側壁（B-B'） 3層は南溝の7層と同じで、9層は旧水田の耕土と考えられる。10層は床土、11層は水田造成上である可能性が強い。それから下が廃寺に関連した上層である。中央から南寄



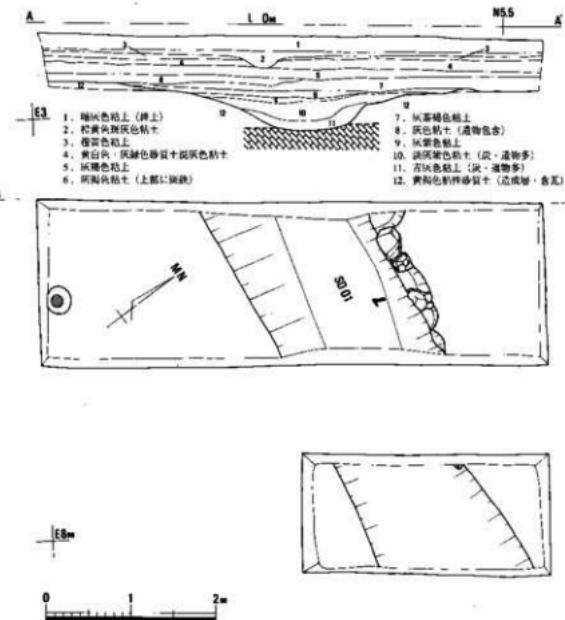
第91図 調査区側溝土層断面図 (S=1/100) C-C': 北北東側壁 A-A': 南南西側壁 B-B': 西溝東側壁
 A-A': 南側壁
 B-B': 北側壁
 C-C': 中央側壁
 5. 16. 20. 22-32. 34. 5. 7. 16
 3. 6. 8. 9. 14-26. 28-30. 32-35. 36-47

りで肩部に列石を伴う二つの段を確認した。段から北では版築状の薄層が認められたことから壇状遺構の存在を推定したが、平成6年度の調査で東方建物の基壇であることが判明した。南側の段は基壇の拡張による。12は調査の契機となった瓦を多く包含した溝で、東方建物の基壇を埋めた造成面から掘られていた。45層の底でも瓦が出土した。これらの土層状況は平成6~8年度にかけて調査されたトレンチ6・7・38の南北断面土層とよく対応している。

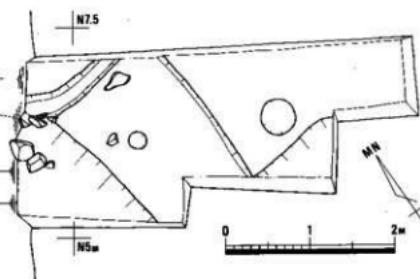
3. 各トレンチの状況

第1・2トレンチ(第92図) 西溝東側壁の南端部で検出された溝1(SD01)の調査を目的に設定したが、第2トレンチでは溝の検出に止めた。溝1は幅が1.7m、深さは0.5mを測る。壁の傾斜は緩やかで、断面形は浅い椀状を呈する。溝底は凹面をなしている。溝の北脇には長径20~40cmの石が3個あり、その両側にも抜け跡があったことから、石を並べていたものと考えられる。南脇では石はみられなかった。溝の中から多くの遺物や炭粒が出土し、完形に近い平瓦もみられた。溝底の高度から水は西へ流れていると判断される。西壁上層の8層は寺院の廃絶後の整地層かもしれない。

第3トレンチ(第93図) 基壇肩部の状況を調べるために設定し、肩部の線を検出するだけに止めた。中央の浅い段は川水田のもので、西溝東側壁の中央で検出されたものの統計とみられる。これとほぼ平行するように北側基壇の肩部の線を検出した。南側基壇のそれは検出できず、列石も西溝の際だけに残存していた。造成面での検出で不安はあるが、基壇が南に張り出す可能性を指摘したい。



第92図 第1トレンチ・第2トレンチ (溝1:SD01) 平面・断面図
(S=1/60)



第93図 第3トレンチ平面図 (S=1/60)

なお、北溝の西端で南北両側壁に大形の石が残存し、南側壁ではそれより少し東まで版策層が認められた（第2図破線）。このため、これらの石は礎石の根石である可能性が考えられ、東方建物の東端の礎石列がこのあたりにくることも想定される。

4. 出土遺物について

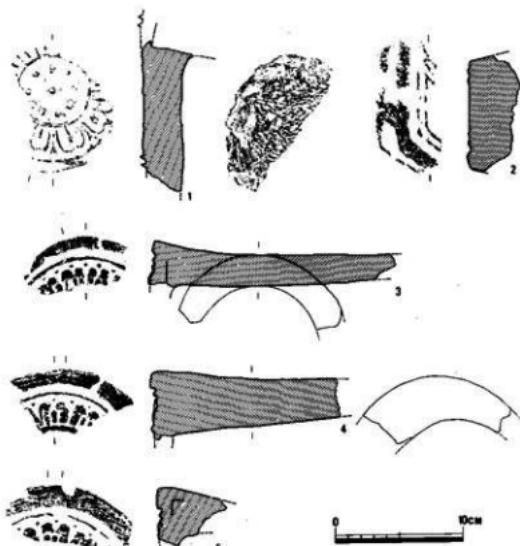
第94図には軒瓦を示した。

4は表面採集で、他は溝1から出土した。1は単弁と複弁を交互に配する蓮華文軒丸瓦で、中房は闇線で区画するのみで突出しない。内区と外区圓線との間に范傷が認められる。瓦当裏面には綱目のような圧痕が残る。2は1と組

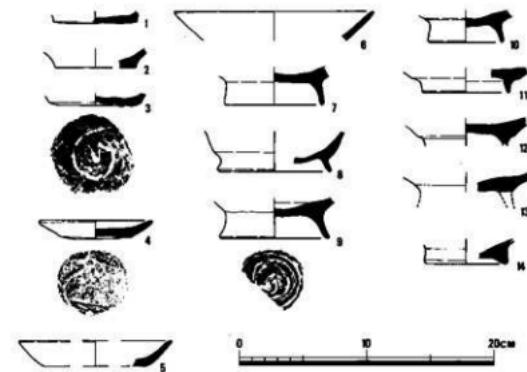
合う均整唐草文軒平瓦の側端部で、外郭線の外に接して凸部がある。3～5は3子葉をもつ複弁の蓮華文軒丸瓦で、花弁間と花弁の中央に三角の珠点を置く。丸瓦部分の外表面はヘラケズリされている。

多くの平瓦・丸瓦が出土したが、平瓦はほとんどが繩目叩きで、格子目叩きは若干であった。

第95図は溝1出土の土師器である。1～3は杯の底部とみられ、外反して体部に続く。底径は63～72mm、胎土は精良・緻密で、色調は灰白色ないし淡灰褐色を呈する。底面は回転ヘラ切りが中央まで達し、内底面は不定方向のナデがなされている。4～5は小皿である。胎土・色調は杯と同じで、底面も回転ヘラ切りである。6は完形で口径が86mm、器高は15mmを測る。6～14は楕の口縁と高台であろう。6・12・14は色調が黄褐色ないしは淡灰褐色を呈し、胎土も砂粒を多く含む。他の色調・胎土は杯と等しい。高台は高く、内湾するものと外反するものがある。底面は回転ヘラ切りで、内面はナデる。これら土師器の年代は10世紀末から11世紀前半と考えられる。（岡本）



第94図 調査地区出土軒瓦 (S=1/4)



第95図 溝1出土土師器 (S=1/4)

付載3 平成4(1992)年の確認調査

①. 調査の経緯と経過

1992(平成4)年秋、塔跡の西側約30mにある個人所有の土地において、住宅建築が計画された。同年10月22日、石垣の基礎工事が行われているのを発見した笠岡市教育委員会は、工事の中止を申し出ると同時に岡山県教育委員会にこのことを連絡した。

その後、市教育委員会は県教育委員会と連絡を取りつつ、11月10日から16日までの間、建築予定地において確認調査を行った。その結果、調査区は築地もしくは回廊の内側に位置していることが判明し、寺域のなかでも重要な地点であることが確認された。

11月17日、岡山県文化財保護審議会委員等による現地視察があり、遺跡と当該地点の重要性が改めて認識された。2日後、市教育委員会は所有者に住宅建築中止の申し入れを行うと同時に地元に対して現地説明会を行い啓発を進めた。幸いにして所有者のご理解を得ることができたため、工事計画は中止となった。あわせて笠岡市はこの土地を買収し、所有者には代替地を呈示することにより、ご協力いただいた。

この一連の出来事が起こったことにより、関戸廃寺周辺にも開発の波が押し寄せつつあることが改めて認識された。そして、それに対応するためにも、寺域の確認とその状況を把握しておくことの必要性が痛感されることになったのである。

②. 調査区の概要(第96図)

調査区は地形と工事の状況に合わせて図のように配置した。1・2・3トレチは東西方向に設定し、4トレチは南北方向に設定した。調査の結果、遺構は何ら検出されなかったが、コンテナ21箱の瓦が出土した。特にトレチ4では、トレチ全体に瓦が散乱しており、その出土量は18箱にも達している。この状況から、調査区の西側を南北に走る畦道が何らかの瓦葺き施設の痕跡であり、その東側に瓦が帶状に散乱していることが想定された。そのため調査当時は回廊または築地の瓦であるとしていたが、平成6~8年度の寺域確認調査を経た現段階では、この施設は築地と考えてよいであろう。

土層は、水田耕作土から明灰褐色の堆積土層を2層はさんで暗褐色上層があり、最下層は淡灰褐色土層となっている。瓦はほとんどが最下層から出土している。

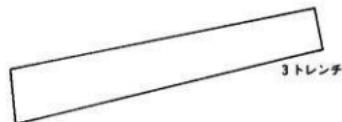
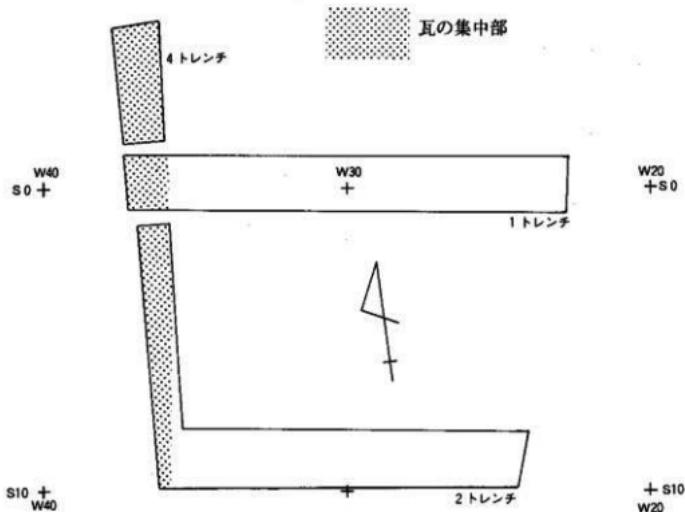
1・2・3トレチにおいて遺構が発見されていないことから、回廊に相当する施設は調査地点よりも東側にあったと考えられる。

③. 出土遺物

瓦21箱・土器1袋が出士している。

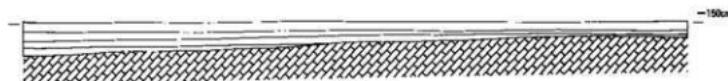
軒丸瓦はI類の新しい段階のもの2点、III類3点、軒平瓦はII B類が1点出土しており、平瓦では縄目叩きのIII類が圧倒的に多い。

土器は土師質椀と須恵器甕を主体としている。また、円面鏡の小破片と瓦塔が各1点出土している。



S20 +
W40

+ S20
W30



第96図 調査区平面図（1/150）・1 トレンチ断面図（1/100）

図版1 関戸廃寺の遠景



1. 寺域北半►
(西から)



2. 寺域南半►
(西から)



3. 調査前の塔跡►
(東から)

図版2 金堂



◀ 1. 基壇と南辺の
瓦溜り（南西から）
32・33トレンチ



▲ 2. 南辺の瓦溜り（南から） 32トレンチ



▲ 3. 基壇南辺（南から） 32トレンチ



1. 東辺の瓦溜り▶
(東から)
33トレンチ



2. 基壇東辺 ▶
(北から)
33トレンチ



3. 東辺の基壇化粧▶
(南東から)
33トレンチ

図版 4 金堂

1. 北東端部の瓦溜▶

り①上面

(北から)

26トレンチ



2. 北東端部の瓦溜▶

り②鬼瓦 I 類出

土状況

(北から)

26トレンチ



3. 北東端部の瓦溜▶

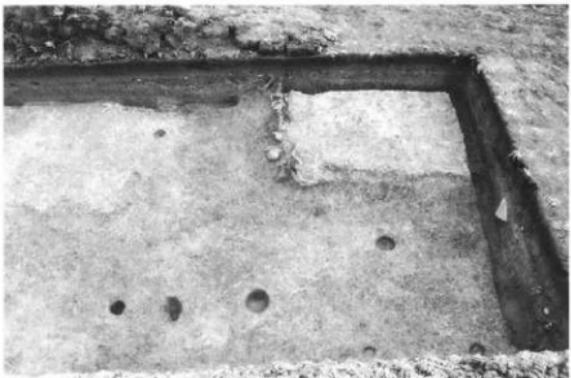
り③軒丸・軒平

瓦出土状況

(南から)

26トレンチ





1. 基壇北東端部▶

(北から)

26トレンチ



2. 北東端部の基壇▶

化粧

(北東から)

26トレンチ



3. 基壇東辺断面▶

26トレンチ

南壁

図版 6 金堂

1. 基壇北辺 ▶
(東から)
9 トレンチ



2. 基壇南西端部▶
(南から)
36 トレンチ



3. 基壇西端部断面▶
36 トレンチ
北壁



1. 基壇北辺 ▶
(北から)
35トレンチ



2. 北辺の瓦溜り▶
(北から)
35トレンチ



3. 北辺の階段状遺構 (北西から)
35トレンチ



図版 8 塔



1. 基壇東辺 ▶
(南東から)
34トレンチ

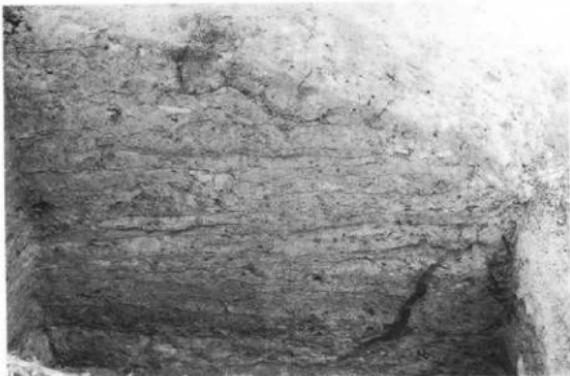


2. 東辺の瓦溜り▶
(東から)
34トレンチ



3. 塔心礎 ▶
(西から)
35トレンチ

1. 塔心礎西側の▶
版築
(南から)
35トレンチ



2. 版築と立板▶
状痕跡
35トレンチ
東壁



3. 塔北側の搅乱▶
土層
(北から)
32トレンチ
南壁



図版10 塔周辺

1. 瓦塔出土状況▶

35トレンチ



2. 瓦塔出土状況▶

32トレンチ



3. 塔東側の溝と柱▶

穴（北から）

21トレンチ



図版11 東方建物



1. 第3期建物基壇►
と南辺の基壇化
粧（南西から）
6・7トレンチ



2. 第3期建物基壇►
北東部分
(西から)
23トレンチ



3. 第3期建物の軒►
先に落とし込まれた礎石
(北から)
6・7トレンチ

図版12 東方建物



1. 第3期礎石抜け跡2（東から）



2. 第3期礎石抜け跡3（南から）



3. 第3期礎石抜け跡4（北から）



4. 第3期礎石抜け跡5（北から）



5. 第3期礎石抜け跡6（南から）



6. 第3期礎石抜け跡7（西から）



7. 第3期礎石抜け跡8（西から）



8. 第3期礎石抜け跡9（南から）

1. 第3期建物基壇▶
化粧（南から）
6・7トレンチ



2. 第3期建物基壇▶
化粧の外側断面
(西から)
6・7トレンチ



3. 東方建物の版築▶
6・7トレンチ
北壁



図版14 東方建物



1. 基壇南側の掘形▶
(西から)
6・7トレンチ



▲ 2. 基壇南側の掘形 1 (南から)



▲ 3. 基壇南側の掘形 2 (南から)

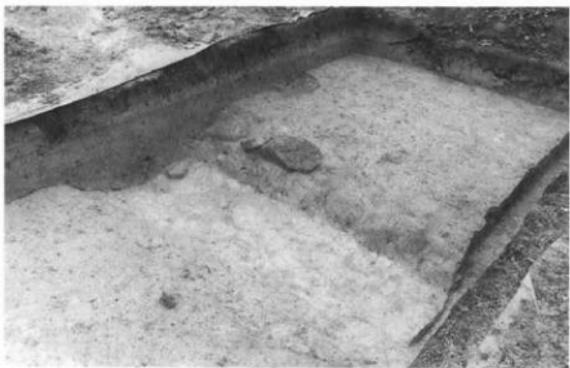


4. 第2期建物の小▶
形礎石 (西から)
6・7トレンチ

図版 15 東方建物周辺



1. 東方建物南側の▶
溝と柱穴（南から）
38トレンチ



2. 第4期整地土と▶
溝（南東から）
38トレンチ



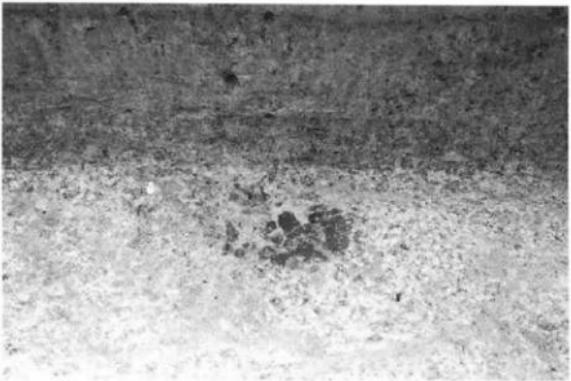
3. 同溝断面 ▶
38トレンチ
東壁

図版 16 東方建物周辺

1. 土師質土器窯跡▶
の焼成室
(南東から)
38トレンチ



2. 烧土遺構 ▶
(東から)
38トレンチ



3. 東方建物西側の▶
溝 (南西から)
5トレンチ

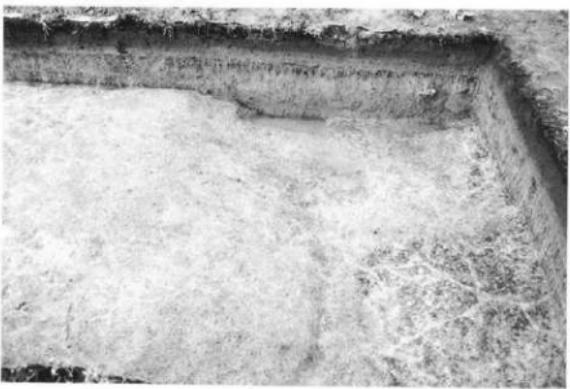




1. 8トレンチ▶
(南から)



2. 39トレンチ▶
(北東から)



3. 10トレンチ▶
溝
(西から)

図版18 回廊等



1. 40トレンチ▶
(東から)



2. 37トレンチ▶
柱穴
(南から)



3. 9トレンチ▶
地山の盛り
上がり
(西から)

図版19 築地と寺域の西側



▲1. 4トレンチ（西から）



▲2. 16トレンチ（南から）

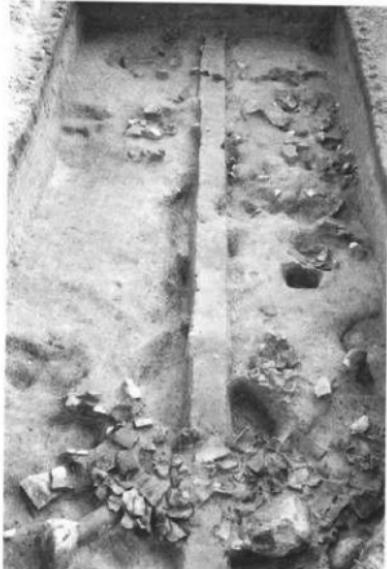


▲3. 24トレンチ 築地基底部（北から）



▲4. 25トレンチ（東から）

図版20 寺域の北西端部



▲1. 13トレンチ 瓦溜り（北から）



▲2. 13トレンチ 築地内側の溝（南から）



▲3. 14トレンチ 溝（東から）



▲4. 14トレンチ 柱穴遺群（南から）

図版21 寺域の北側と北東端部



1. 11トレンチ寺▶
域北端部の溝
(南西から)



2. 12トレンチ▶
(南西から)



3. 2トレンチ▶
(南から)

図版22 寺城の東側

1. 30トレンチ▶
(西から)



2. 31トレンチ▶
(東から)



3. 29トレンチ▶
(北東から)



図版23 寺域の東側

1. 20トレンチ▶

段状造構

(南西から)



2. 19トレンチ▶

(南西から)



3. 18トレンチ▶

(南西から)



図版24 寺域の南側



▲2. 15トレンチ (南から)



▲3. 17トレンチ (南から)

図版25 掘立柱建物と溝



▲1. 11トレンチ 掘立柱建物（南から）



▲2. 10トレンチ 柱穴（北から）



▲3. 28トレンチ 柱穴（南から）



▲4. 27トレンチ 溝（南から）